DAIETSU SITE

大悦遺跡

――「丸山工業団地」造成工事に伴う発掘調査報告書――

1995年 3月

茅野市教育委員会

DAIETSU SITE

大悦遺跡

―― 「丸山工業団地」造成工事に伴う発掘調査報告書 ――

1995年3月

茅野市教育委員会

大悦遺跡全景（南西上方から）

平成６年度調査区全景　上方：大悦遺跡　下方：大悦南遺跡

序

茅野市は国特別史跡尖石遺跡、国史跡上ノ段遺跡を初めとする数多くの縄文時代遺跡がある縄文文化の宝庫です。

ここに報告する大悦遺跡は、この茅野市にある縄文時代から平安時代にかけての遺跡です。

平成6年度、茅野市土地開発公社が大悦遺跡のほぼ全域と大悦南遺跡の一部に及ぶ一帯を工業団地として造成することになり、それに伴い両遺跡の大規模な発掘調査を実施しました。

大悦遺跡が位置する宮川地区は昭和53年に中央自動車道建設に伴い発掘された縄文時代後期から晩期にかけての大遺跡「御社宮司遺跡」が知られています。今回の調査では平安時代の住居址2軒と、御社宮司遺跡で特に注目された縄文時代最終末から弥生時代中期初頭の遺構とこれに伴う遺物が発見されました。

この時代の遺跡は沖積平野を臨む台地上や扇状地と沖積地にあることが知られています。しかし沖積地から離れた台地にこの時期の遺跡がある例は極めて少なく、市内でも発掘により確認されたのは、茅野和田、米沢の棚畑遺跡に次ぎ3例目であります。

発掘された大悦遺跡の貴重な文化遺産と共に、本書が、多くの人々に広く活用され、また郷土を知り学ぶことで、地域文化の向上に役立てば幸いです。

最後になりましたが発掘調査から本書の作成までご協力いただきました地元の皆さんに厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成7年3月

茅野市教育委員会
教育長　両角　昭二

例　　言

1．本書は、丸山工業団地造成工事に伴い、茅野市土地開発公社から茅野市教育委員会が委託を受け実施した「長野県茅野市宮川大悦遺跡」の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は茅野市教育委員会が平成５年に第１期工区内に位置する大悦遺跡と大悦南遺跡の一部で実施しているが、大悦南遺跡の報告書は協議の結果第２期工区分と合わせて発行する予定である。
調査の組織等の名簿は発掘調査組織として別載してある。

3．発掘調査は平成６年５月19日から12月19日まで実施、出土品の整理及び報告書の作成は平成６年12月20日から平成７年３月28日まで茅野市文化財調査室において行った。

4．発掘調査から本書作成までの現場と、執筆は百瀬一郎が担当した。

5．本報告書に掲載の遺構実測図は、住居址を1/60、土坑、ロームマウンドを1/40の縮尺とした。遺物は縄文時代の土器を1/4、石器は2/3、平安時代の遺物を1/3を原則として、縮尺比の異なるもののみ比率を記してある。
石器の分類は岡　和宣が担当した。

6．調査区の基準点は国家座標基準点による。また遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

7．本報告にかかわる出土品、諸記録は茅野市文化財調査室で収蔵、保管している。

目　　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　大悦遺跡の環境……1
第1節　大悦遺跡の位置と環境……1
1　遺跡の位置と地理的環境……1
2　遺跡の立地と周辺遺跡との地理的関係……3
3　調査の歴史……3
第2節　大悦遺跡周辺の遺跡……5
1　八ヶ岳西南麓　茅野市の遺跡……5
2　八ヶ岳西南麓　諏訪郡原村の遺跡……9
第Ⅱ章　発掘調査の概要と諸事業の記録……12
第1節　発掘調査の経過……12
1　発掘調査に至る経過……12
2　発掘調査の経過……14
3　調査日誌抄……14
4　遺物整理と報告書作成の作業……19
第2節　発掘調査の方法……19
1　発掘調査組織……19
2　発掘調査区の設定……20
第3節　遺構と遺物の概要……20
1　遺構の概要……20
2　遺物の概要……20
第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物……25
第1節　大悦遺跡の層序……25
第2節　竪穴住居址と遺物……25
第3節　土坑と遺物……29
第4節　ロームマウンド……40
第Ⅳ章　総　　括……54
付　　表……60
抄　　録

第Ⅰ章　大悦遺跡の環境

第１節　大悦遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置と地理的環境

大悦遺跡は、長野県茅野市宮川9580番地他に所在する。ＪＲ中央本線茅野駅から茅野市街地の東南東へ約４㎞の地点で宮川丸山と諏訪郡原村大久保の中間にある尾根上に位置している。

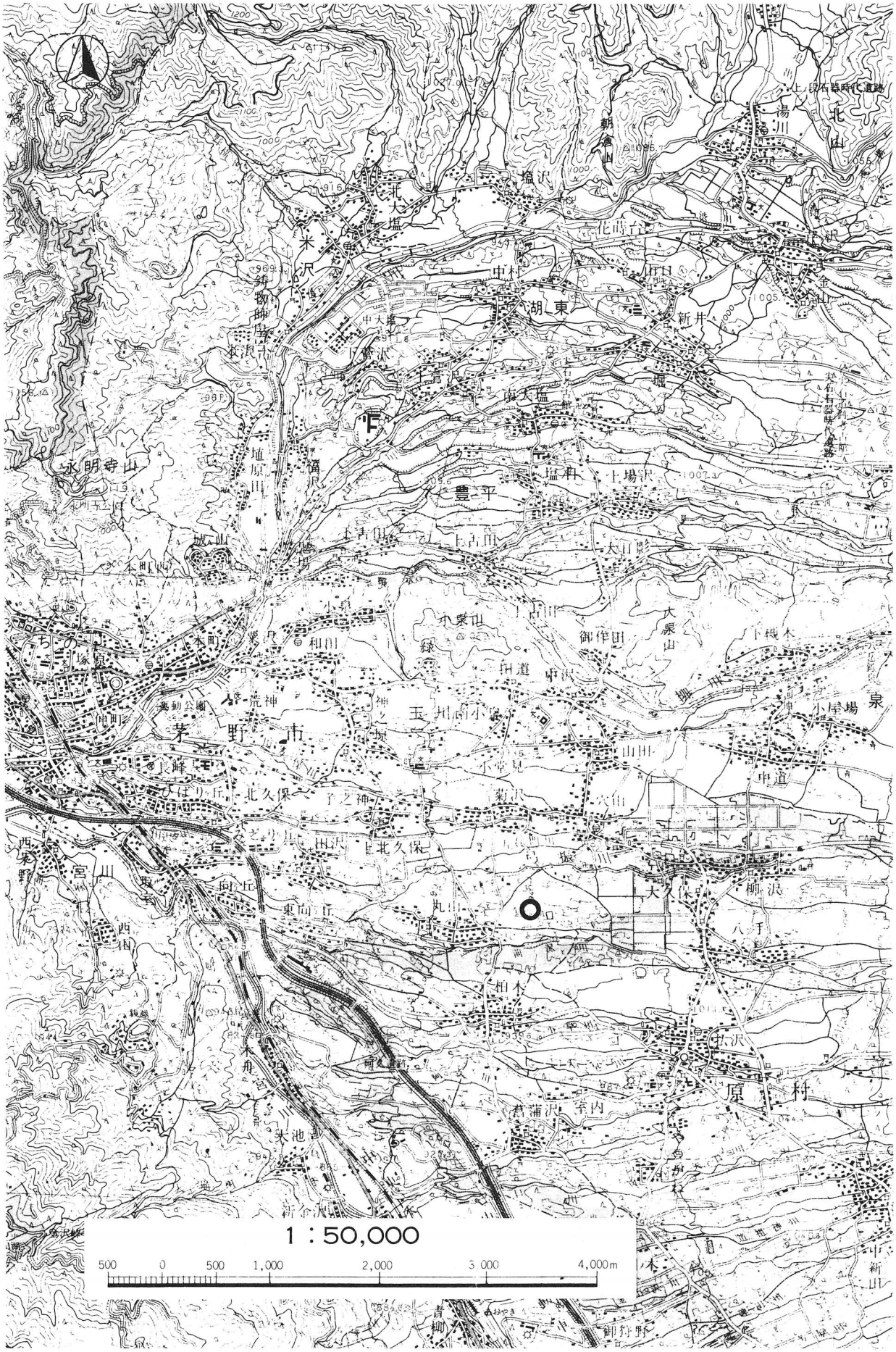
諏訪盆地の南端に位置する宮川地区はフォッサマグナの西縁を形成する糸魚川～静岡構造線の釜無断層により北西から南東方向へほぼ一直線に分けられ、諏訪湖への流入河川である宮川水系により西側は急傾斜な赤石山系の守屋山（標高1650ｍ）・入笠山（標高1955ｍ）山麓、東側は火山活動による堆積物で覆われた広大な裾野を持つ南八ヶ岳（最高峰赤岳、標高2899ｍ）山麓に画された丘陵部と小規模な扇状地、沖積地から成る。

八ヶ岳西南麓の火山泥流の表面には、古期、新期の信州ローム層が堆積し、この上面を腐食土層が覆っている。裾野の標高1000ｍ付近からは涌き水が各所にあり、幾筋も集まった流水の小渓流によって開析谷が形成され、長峰状の尾根をつくりだし、宮川、上川に注いでいる。富士見峠に近い吉原湿原に発する宮川へ八ヶ岳側から合流する主な渓流は、北から田沢沢川、弓振川、前沢川（丸山の西、田沢の南で弓振川に合流）、小早川、大早川、阿久川、矢ノ口川、蟹出沢川、金山沢川、碑田川、芳原川である。水質は小早川、大早川などがアルカリ性を示す他、ほとんど中性である。

集落は、守屋山麓方面では宮川に流れ込む小河川により形成された扇状地と沖積地に接する一帯に発達している。八ヶ岳西南麓方面の裾野は、標高1200ｍ付近を境に広原状を成しながら西方なだらかに下がり途中から長峰状の丘陵に分かれ末端部は舌状となる。旧集落はこうした舌状台地の分化する付近から台地先端の達する沖積地にかけて立地し、近年は住宅団地の開発も急速に進みつつある。

遺跡の周りは大規模な構造改善事業が進み、圃場整備に取り残されたような形で雑木林がある。主な植生はカラマツ、サワラ、ヒノキ、キハダ等の人工造林と、自然林のアカマツ、コナラ、クリ、ハクウンボク等が群生する。この間にウワミズザクラ、ミズキ、イヌエンジュ、リョウブ、コブシ、アオハダ、ハリギリ、イチイ、オニグルミ、ヌルデが点在、中低木ではニシキギ、ニワトコ、サンショウ、クロモジ、ヤマウルシ、ウツギ等が散在する。秋にはイグチ等のキノコ類も豊富で、調査中にタヌキ、ホンドギツネなどの動物にも時折出会う機会があった。鳥類ではキジ、カルガモ等が目立ち、12月に入ってからはマガンも飛来している。また周辺の堰では雨後にヤマメが遡上するのを確認しているので、縄文時代は現在よりも豊かな自然環境で狩猟をする際には獲物も多かったことが想像に難くない。

気象面での特徴として湿度が低く夏期冷涼なことが上げられる。このため冷夏になると冷害を受けることもあり、最近では1993年（平成５年）には標高900ｍ以上の水田で水稲がほとんど不熟になるという大冷害に遭遇している。また秋から冬にかけて標高の高いところより平坦地の気温が低くなる気温の逆転現象を見る事がある。冬は少ない降雪で寒さは厳しい。この冬期寒冷を利用している地場産業として全国的に有名な角寒天の製造があり、中でも西茅野方面は諏訪地方における天然角寒天製造の中心地である。



第１図　大悦遺跡の位置（1/50,000）

宮川の幹線となる交通は、東西を八ヶ岳から長峰状の尾根上を通り、木落しを経て平坦地の途中で伊那方面に繋がる杖突街道と交わり諏訪大社へ向かう御柱道と、南北は河成段丘沿いにＪＲ中央東線と旧甲州街道の国道20号線や、長峰の先端を結ぶ形で中央自動車道西宮線が狭い範囲で通過している。地区内には信濃国の一宮である諏訪大社の上社前宮が鎮座し、縄文時代以来、駅、宿場はなかったものの文化が交流し、産業が興隆してきた中で、特に流通には重要な役割を持って発展してきた要衝である。

2　遺跡の立地と周辺遺跡との地理的関係

大悦遺跡は、八ヶ岳からの火砕流や泥流の堆積によって構成された広原状の通称俎原（まないたっぱら）の西方に展開する開析谷によって形造られた尾根のひとつにある。台地上部と平坦地の比高差は西側先端部で約４ｍある。平坦地は黒褐色土を含む表面が黄褐色に変色した円礫層であり、台地上部は風成ローム層の上部を腐食土層が覆っている。

遺跡のある尾根は北が弓振川、南が前沢川の渓流によって形成された台地上にあり、東西方向にはいくつか派生している小渓谷により発達した小丘陵の一条で平坦部の巾約40ｍ、長さ約300ｍである。この小丘陵の形成には涌き水の影響が大きかったと思われる。しかし圃場整備によりかつての涌水部も水田の下になり、水は導水管で尾根を横切ってきた堰へ落ち、両河川の合流点より上流に流れ込んでいる。

大悦遺跡の台地からは北方遙かに槍ヶ岳を始めとする北アルプスの連峰、中景に塩嶺峠、諏訪湖、霧ヶ峰、車山、大門峠、東方に蓼科山から大河原峠、八ヶ岳が列なり、南方から西方にかけては遠く赤石山系の甲斐駒ヶ岳、近くに入笠山、杖突峠、守屋山が360°のパノラマで一望できる。

近隣で直接見ることができる遺跡は小渓谷を挟んだ南側に約100ｍ離れ、丸山の集落先まで延びる尾根上にある大悦南遺跡だけである。周辺の茅野市域にある遺跡は弓振川北側の玉川菊沢の南沿いの畑に屋敷添遺跡、この台地西側の延長上に古御堂遺跡、宮川田沢北側の台地に神垣外遺跡がある。原村地籍内には大悦遺跡の東側、弓振川と前沢川の間に位置する大久保の西はずれに家裏遺跡、大久保の西南方に大久保前遺跡、茅野市との境界に近い大久保区の南に向尾根遺跡、前沢川以南ではいずれも原村内になるが丸山区との境界付近、柏木の北方に長峰、裏長峰、程久保、恩膳南等の遺跡があったがほとんどは圃場整備事業により消滅してしまっている。

3　調査の歴史

大悦遺跡の遺跡名が初めて現われるのは、1958年（昭和33年）諏訪史談会が発行した『諏訪史蹟要項　16茅野市宮川篇』の宮川地区踏査図に於いて、丸山堤の西側に場所のみ図示されている。しかし遺跡についての説明はない。

大悦遺跡の内容が最初に報告されたのは1959年（昭和34年）今井すみ江さんが刊行した『旧宮川村史編纂会研究其の６』「旧宮川村に於ける縄文式文化時代（附弥生式文化時代）遺跡」においてであり、現在の大悦と大悦南遺跡を丸山大悦遺跡として詳細に記載しているので転記する（図は省略）。

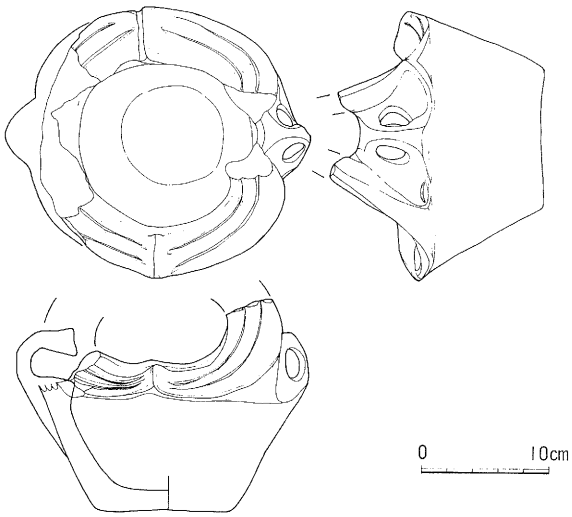
丸山大悦遺跡

宮川の一番東の丸山の民家の上のはずれより（守屋菊一氏宅辺）貯水池にかけての丘陵と其の北側の横の二つの東西に走る丘陵の南の日向側一帯に縄文中期の土器破片が多く散乱している。この付近の東西に走る丘陵には遺跡が多く、縄文中期の中部山岳地帯を中心に繁栄を極めた尖石の大集落遺跡の文化圏に包まれたのであろう。

当地は地表よりローム層までの深さが比較的浅く、一帯が耕地となって掘り返され表出土器が多いながらも発掘調査にあまり期待する気になれないのは残念であるが昭和32年３月、守屋菊一氏宅の庭先に炉址が発見されその炉囲石のくずれた中に両方から内側に倒れた炉石に押しつぶされて小さく砕かれた加曽利Ｅ式の土器が発見されており、又、農道の掘り割の端から勝坂式の釣手土器が発見されている。釣手土器は松根油の類など燃やして燈りに使ったものであろう。内側は炭素粉がついて黒く焼けている。他以前に炉形態や大きな土器が地均らしや開墾のときに多く掘り出された話があり、相当の集落を形成していたものと思われる。他遺物は石鏃、打製石斧、凹石が多く発見されている。加曽利Ｅ式土器片は粘土紐貼付文、及び巾広い浅い隆起線上をなでて、充塡文は櫛様條痕文等である。底部に木の葉文が２、３点あり、打石斧は、12cm×5.5cm×1.0cm、11cm×6cm×1.5cm等、尚特徴ある弥生式時代の有孔大形蛤刃磨製石斧が発見され、意義深い資料といわねばなるまい。

更に比較的多いのは、南長峰、比久尼原と同様の條痕文様のある縄文式直後形式土器の東海地方の西志賀II式に属するではないかと思われる土器が相当発見されている。

又、土師器、須恵器の破片も割合多く発見される。土師器は北側の尾根に相当多い。これら長峰比久尼原と共に今後の研究に興味深い。



第２図　昭和32年発見の縄文時代中期中葉の釣手土器（1/6）

と記されている。炉内から土器が発見された守屋菊一氏宅は現在の守屋忠泰氏宅にあたり、ここに記載されている釣手土器については今回の発掘調査中に所蔵者の守屋栄三郎氏の協力をいただき実測したので掲載する（実測図1/6）。

他の遺物の所在については不明となっている。

大悦遺跡と大悦南遺跡が分けられたのは、1980年（昭和55年）に長野県教育委員会から発行された『八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書昭和54年度』であり、この時から現在の遺跡番号大悦-181、大悦南-182を使用している。同報告書によると大悦遺跡からは縄文時代中期土器片、大悦南遺跡からは縄文時代加曽利Ｅ式土器、石鏃、平安時代土師器、灰釉陶器が遺物として確認されている。

1986年（昭和61年）茅野市から刊行された『茅野市史　上巻　原始古代』には

大悦遺跡　宮川丸山の東北方に位置する小丘陵で、標高は950ｍである。表面採集で縄文時代中期の土器片が発見された。

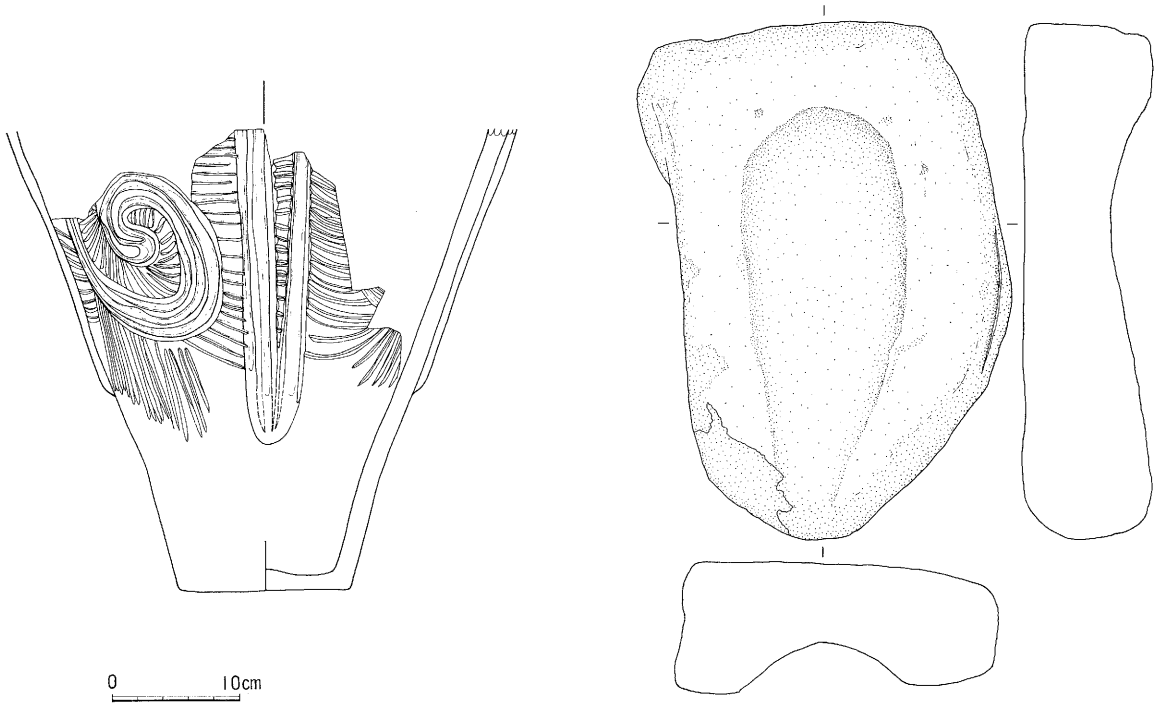
大悦南遺跡　丸山の集落の東にあり、前沢川の北側に沿う長峰状の台地で標高は950ｍである。台地の南斜面は前沢川に対しゆるやかな傾斜となっている。台地の頂部から南斜面にかけて遺物が採集され、立地する地形からかなり規模の大きい遺跡と推定される。縄文時代中期の曽利式土器片や石鏃、平安時代の土師器や灰釉陶器破片が採集されている。

大悦・大悦南遺跡の北西にかけては遺跡の未発見区域で、これは台地の発達が乏しく遺跡の立地には適さない地形によるものであろう。東から南にかけての原村地籍には多くの遺跡が分布している。

と記している。

1991年（平成３年）茅野市教育委員会で発行した『茅野市遺跡台帳』は『八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』を踏襲しているが大悦南遺跡に「曽利Ⅱ～Ⅲ埋甕」を加えている。

茅野市教育委員会では丸山工業団地の造成に伴う保護協議を進める中で大悦南遺跡を中心として数回にわたる現地踏査と遺物の表面採集を実施。黒耀石片や押型文土器片などを発見しているが遺物の中から縄文時代中期の住居址に伴う埋め甕（実測図1/6）とこれと若干離れた地点から見つかった花崗閃緑岩の石皿（実測図1/6）を図示しておく。



第３図　保護協議時大悦南遺跡で発見した埋甕と石皿（1/6）

第２節　大悦遺跡周辺の遺跡

八ヶ岳西南麓の諸遺跡についての概要は『茅野市史』上巻、『原村誌』上巻、『富士見町史』に詳しい。ここでは特に大悦遺跡が位置し、幅が広く深い谷で画された、柳川以南から矢ノ口川以北にかけての標高850～1000ｍ付近に点在する山麓台地遺跡について簡単に紹介しておく。

１　八ヶ岳西南麓茅野市の遺跡

①日鴨寺遺跡　泉野小屋場の西側から続く丘陵上で北側は柳川渓谷となっている。昭和17年宮坂英弐・矢島数由によって縄文時代中期後半の曽利式土器片が出土する竪穴住居址が調査された。昭和39年には諏訪実

業高校の生徒等によって縄文時代後期の堀之内式土器片が出土した敷石住居址が調査された。中期中葉に始まり後期まで続く複合遺跡でかなりの規模の集落遺跡と推定される。

②中沢遺跡　柳川渓谷に沿う広原状の台地に立地し、耕作によりしばしば遺物が発見されるが未発掘の遺跡である。縄文時代中期中葉から末葉までの土器が出土し、上方の日鴨寺遺跡と立地条件が似ている。

③尾根田遺跡　柳川渓谷の河成段丘に立地する中沢と、浅い谷状地形に立地する山田との中間にある台地で、台地を南北に県道が横切り県道東側の台地頂部から南側一帯の畑に遺物が散布する。未発掘の遺跡で縄文時代中期の土器片や打製石斧が発見されている。

④一本木遺跡　尾根田遺跡から西に続く台地の南縁に派生する小台地で、尾根田との距離はわずか150ｍである。縄文時代中期末葉の土器等が採集されている。

⑤藤塚遺跡　一本木遺跡の立地する台地の西続きで南北の幅約200ｍ、南側は浅い谷の水田地帯で北側は浅いくぼ地となっている。昭和32、34年当時の玉川中学校が社会科の学習を目的として縄文時代中期の住居址２個所が発掘された。昭和58年道路拡幅に伴い茅野市教育委員会では遺跡の規模、性格等を更に究明して今後の保存対策の資料を得るため、学術調査を兼ねた発掘を実施、縄文時代中期曽利Ⅰ、Ⅳ期の住居址２個所と独立土器、小竪穴４か所を発見している。過去２回の小発掘により発見された住居址はいずれも台地南縁から約100ｍの台地中央部より北に位置している。これらの住居址を北限とする環状集落が想定され、かなりの規模を持つ集落遺跡である。

⑥上御前遺跡　八ヶ岳裾野台地の先端舌状を呈する小台地上に立地する。昭和45年から47年まで３次ににわたり岡谷南高校歴史部を中心として発掘調査が行われた。縄文時代前期２、同終末１の住居址と中世の地下式横穴が検出されている。遺物では先土器時代のナイフ形石器、縄文時代早期、前期、中期、晩期の土器片、内耳土器の破片等があり量も多い。長期間にわたって断続的に生活の痕跡が残され、しかも早期の押型文土器や晩期など山麓台地にはあまりない時期の生活が行われた特殊性のある遺跡である。

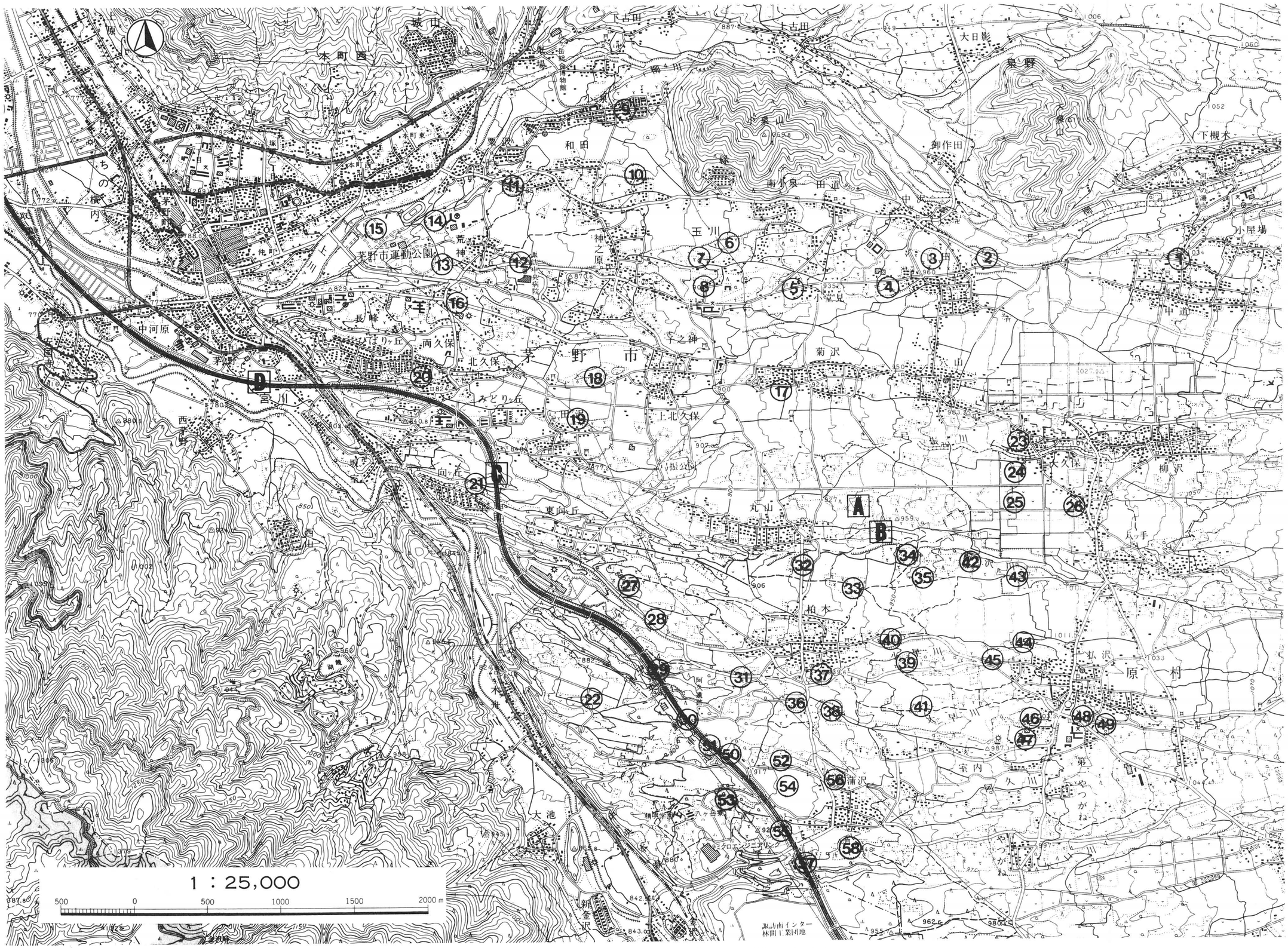
⑦小堂見遺跡　上御前と浅い谷を隔てた南側の尾根状台地にあり縄文時代中期の土器片や打製石斧・石匙が採集されたが未発掘のため詳細は不明である。

⑧久保川遺跡　小堂見の南側に並行した小台地で、縄文時代中期の土器片と磨製石斧、黒耀石片が採集されている。小規模な居住地であろう。

⑨茅野和田遺跡　小泉山西麓の長峰状台地の山裾に近い位置にある。昭和44年長野県企業局により住宅団地が造成されることになり茅野市教育委員会が5200㎡の発掘調査を行った。遺跡付近の台地の南北幅は約280ｍで台地の南縁に幅約30ｍ、比高約５ｍの浅いくぼ地があり、遺跡を東西２地区に分けている。発見された遺構は東地区が縄文時代前期の住居址５、中期44、古墳時代の住居址５、特殊遺構24、西地区では縄文時代中期の住居址27、後期３、晩期１、平安時代の住居址２と特殊遺構が検出された。昭和49年東地区の台地南斜面に住宅が建設されることとなり、茅野市教育委員会で発掘調査を行い縄文時代中期の住居址３と弥生時代の住居址１を発見し、一部では集落が発掘区の外側まで及んでいることがわかった。発掘された遺物の量は莫大である。茅野和田遺跡は縄文時代中期の集落が、時期によって立地を変えて住み分けすることがわかる資料として、その後の集落論展開に大きな影響を与えた。

⑩和田日向遺跡　茅野和田遺跡の南、浅い谷を隔てた小泉山西麓から続く台地で古くから遺物が採集され、縄文時代中期の勝坂式や曽利式土器のほか各種の石器類が出土する。茅野和田遺跡に近接しており、これに付随する小規模な遺跡と考えられる。

⑪上の原遺跡　和田日向遺跡の西の小台地に立地し、縄文時代中期の曽利式土器片や石鏃・打製石斧等が採



茅野市の遺跡

- A 大悦遺跡
- B 大悦南遺跡
- C 入の日影遺跡
- D 御社宮寺遺跡
- ① 日鴨寺遺跡
- ② 中沢遺跡
- ③ 尾根田遺跡
- ④ 一本木遺跡
- ⑤ 藤塚遺跡
- ⑥ 上御前遺跡
- ⑦ 小堂見遺跡
- ⑧ 久保川遺跡
- ⑨ 茅野和田遺跡
- ⑩ 和田日向遺跡
- ⑪ 上の原遺跡
- ⑫ 中御前遺跡
- ⑬ 下の原遺跡
- ⑭ 京塚原遺跡
- ⑮ 下河原遺跡
- ⑯ 長峰遺跡
- ⑰ 屋敷添遺跡
- ⑱ 古御堂遺跡
- ⑲ 神垣外遺跡
- ⑳ 林ノ峯遺跡
- ㉑ 長峯遺跡
- ㉒ 阿久尻遺跡

原村の遺跡

- ㉓ 家裏遺跡
- ㉔ 大久保前遺跡
- ㉕ 向尾根遺跡
- ㉖ 横道下遺跡
- ㉗ 比丘尼原北遺跡
- ㉘ 比丘尼原遺跡
- ㉙ 柏木南遺跡
- ㉚ 阿久遺跡
- ㉛ 前沢遺跡
- ㉜ 長峰遺跡
- ㉝ 裏長峰遺跡
- ㉞ 程久保遺跡
- ㉟ 恩膳南遺跡
- ㊱ 臼ヶ原遺跡
- ㊲ 前尾根西遺跡
- ㊳ 南平遺跡
- ㊴ 前尾根遺跡
- ㊵ 上居沢尾根遺跡
- ㊶ 清水遺跡
- ㊷ 恩膳西遺跡
- ㊸ 恩膳遺跡
- ㊹ 裏尾根遺跡
- ㊺ 家下遺跡
- ㊻ 閼盧沢遺跡
- ㊼ 宮平遺跡
- ㊽ 向尾根遺跡
- ㊾ 南尾根遺跡
- ㊿ 居沢尾根遺跡
- (51) 中阿久遺跡
- (52) 原山遺跡
- (53) 広原日向遺跡
- (54) 宿尻遺跡
- (55) ヲシキ遺跡
- (56) 楡の木遺跡
- (57) 大石遺跡
- (58) 山の神遺跡

第4図　大悦遺跡周辺の遺跡（1/25,000）

集された。

⑫中御前遺跡　玉川神之原から荒神にかけてのびる長峰状台地の先端部に近い一帯にある。昭和24年諏訪清陵高校地歴部が発掘調査を行い縄文時代中期後半期に属する竪穴住居址を完掘。昭和42年茅野高校地歴部が発掘調査を行い縄文時代中期の住居址１と独立埋甕、土坑を発見している。遺跡からは後期の土器片も採集されるので縄文時代中期末葉から後期へと続く複合遺跡であろう。

⑬下の原遺跡　南側を川久保川、北側を上川に挟まれた台地の南斜面から平坦面の一帯に位置する。茅野市運動公園造成工事に伴い、昭和49年から53年まで３次にわたる発掘調査を茅野市教育委員会で行った。発見された遺構は、住居址31、方形配置土坑６、土坑220、集石等である。住居址は縄文時代前期２、中期26、後期２、時期不明１である。縄文中期に限らず特に後期の社会構造を解明する上にいくつもの貴重な問題を提起した遺跡である。

⑭京塚原遺跡　下の原遺跡の北側に位置し、涌き水の小渓流により枝分かれした小さな尾根にある。縄文時代早期の土器片と石鏃が採集されている。規模の小さな早期の単純遺跡であろう。現在は茅野市運動公園の一角にあり自然公園の一部として保存されている。

⑮下河原遺跡　上川南崖の河成段丘面にあり昭和52年茅野市教育委員会により試掘調査が行われた。縄文時代中期初頭の土器片と晩期のものと思われる粗製の無文土器片が出土、土師器、須恵器、灰釉陶器、青磁破片、管状土錘も出土している。上川畔の従来遺跡が存在しないと考えられていた低位段丘面から遺物が発見されたことは貴重である。現在、土盛りをして陸上競技場となっている。

⑯長峰遺跡　川久保川の南側台地にあり、御柱街道と荒神から北久保へ抜ける道の交差点付近を中心とする古くから知られた遺跡である。昭和24年諏訪清陵高校地歴部により発掘が行われたことがある。昭和56年宅地造成に伴い茅野市教育委員会により緊急発掘が行われ、縄文時代中期の住居址３などが発見された。下の原遺跡との同時期の遺物があり、集落のあり方を考える上に重要である。また１点ではあるが先土器時代に属すると思われる槍先形尖頭器も出土している。

⑰屋敷添遺跡　玉川菊沢南添いの畑地で古くから知られた遺跡であり、縄文時代中期曽利式土器片の採集があるが詳細は不明である。

⑱古御堂遺跡　屋敷添遺跡の西側にある尾根状の台地で昭和54年農業改善事業に伴い台地北側の斜面を茅野市教育委員会で調査、遺構の発見はなかった。平成３年工場造成に伴う発掘調査が実施され縄文時代前期後半、中期前葉、平安時代の住居址が検出されている。

⑲神垣外遺跡　宮川田沢の北側の台地で、平成３年に茅野市教育委員会で調査、中世の土坑、地下式横穴等が発見された。

⑳林ノ峯遺跡　宮川舟久保の北側、長峰遺跡の台地と並行するかなり規模の大きな台地で、住宅団地の造成により失われた部分も多いが、台地の東南部が畑として残されており遺物の散布が見られる。縄文時代中期の土器片や打製石斧、石鏃等が採集されている。

㉑長峯遺跡　弓振川と小早川に挟まれた台地で、台地の両側は急斜面で渓谷との比高差も大きい。現在では県営住宅団地が造成されているが、縄文時代中期の土器片や打製石斧・石鏃が採集されたという。

㉒阿久尻遺跡　金沢の阿久遺跡から西に続く尾根上にあり、県営工業団地造成に伴い平成２，３年に茅野市教育委員会が調査した。縄文時代早期１、前期前半31、平安時代１の住居址と方形柱穴列20が検出された。阿久遺跡でも発見されてた方形柱穴列については数回にわたりシンポジウムや座談会が開催され、縄文時代前期前半における八ヶ岳西南麓の集落について論議が高まった。現在は一部保存となっている。

2　八ヶ岳西南麓諏訪郡原村の遺跡

㉓家裏遺跡　大久保の西に位置する遺跡で、村道改良工事に伴い昭和59年原村教育委員会で緊急発掘調査を行い先土器時代の尖頭器、縄文時代中期後半の住居址14、平安時代の住居址２が発見されている。

㉔大久保前遺跡　大久保の西南方に位置し、土師器と灰釉陶器の小破片が極めて狭い範囲から数点発見されている。

㉕向尾根遺跡　大久保の南、茅野市境付近に位置し、昭和54年原村教育委員会で緊急発掘調査を実施した。八ヶ岳西南麓において最初の出土層位がはっきりする先土器時代の遺物集中個所が発見された遺跡である。

㉖横道下遺跡　大久保の南方に位置し、昭和54年原村教育委員会により緊急発掘調査が行われ、遺構の検出はなかった。遺物は曽利式土器の破片が発見されている。

㉗比丘尼原北遺跡　柏木北西茅野市との境界付近に位置する遺跡。縄文時代早期、前期の土器片、平安時代の土師器片など採集できた資料は少ない。

㉘比丘尼原遺跡　柏木の西方に位置し、阿久、居沢尾根、大石遺跡等とほぼ同じ等高線上に位置する遺跡で縄文時代中期の土器片、平安時代の土師器、須恵器等の破片が採集されており、住居址の存在も確認されている。

㉙柏木南遺跡　柏木の西方茅野市境に位置し、中央自動車道建設に伴い昭和51年長野県教育委員会により調査され、先土器時代の石器と縄文時代中期中葉の住居址１が発見された。

㉚阿久遺跡　大早川と阿久川とに挟まれた東西に長く延びる尾根上と阿久川に面したなだらかな斜面上にある。中央自動車道建設に伴い昭和50年から53年まで長野県教育委員会によって４次にわたる緊急発掘調査が実施され、昭和53、54年に範囲確認の調査と村道改良工事に伴う緊急発掘調査を原村教育委員会が行っている。これらを総合すると、縄文時代前期の中央に立石と列石を伴う幅30ｍ径90～120ｍの環状集石群と呼ばれる大祭場と、その下層から関山式併行の馬蹄形集落、方形柱列群が姿を現し、前期縄文時代観の転換をせまる遺跡となった。昭和54年には国史跡に指定された。なお、平成５年には遺跡範囲確認調査が原村教育委員会により実施されている。

㉛前沢遺跡　柏木の西南方に位置し、昭和55年村道改良工事に伴う緊急発掘調査が原村教育委員会により実施されたが縄文時代中期の土器片が出土しただけで遺構の検出はなかった。昭和61年にも調査されている。

㉜長峰遺跡　柏木の北方、前沢川の南に位置する遺跡で平成３年原村教育委員会により縄文時代中期の住居址３軒、弥生時代の小竪穴３基、平安時代の住居址８軒が発掘調査されている。

㉝裏長峰遺跡　柏木の北方、前沢川を挟んで茅野市の大悦南遺跡と対向する。曽利式土器片等が採集されている。平成４年原村教育委員会により発掘調査されている。

㉞程久保遺跡　柏木の北方、茅野市との境界付近に位置する遺跡で、平成４、５年原村教育委員会により発掘調査され竪穴住居址等が検出されている。

㉟恩膳南遺跡　柏木の北方に位置する。平安時代の土師器と須恵器の破片が採集されている。

㊱臼ヶ原遺跡　大早川と阿久川に挟まれたなだらかな北向き斜面に立地する。昭和53年農道改良工事に伴い緊急発掘調査が実施され陥し穴８が検出されている。

㊲前尾根西遺跡　柏木の南に隣接する遺跡である。縄文時代中期の土器片と乳棒状石斧が採集されている。

㊳南平遺跡　柏木の南に位置し、縄文時代中期の土器片、顔面把手と打製石斧、石皿、凹石等が採集されている。

㊴前尾根遺跡　大早川と小早川に挟まれた尾根上にあり、昭和44年から４次にわたる発掘調査が行われ住居

址78が検出され、釣手土器3が出土している。縄文時代中期初頭から後期初頭まで長期間にわたり繁栄した拠点的な大遺跡である。

㊵上居沢尾根遺跡　柏木の東端に隣接し、縄文時代中期前半の住居址が発見され、平成4年原村教育委員会により発掘調査されている。

㊶清水遺跡　柏木の東南方に位置し、縄文時代中期の曽利式土器片等が発見されている。

㊷恩膳西遺跡　八ツ手の西にあり、昭和62年から平成6年まで4次にわたる発掘調査が原村教育委員会により実施されている。平成5年の第3次調査では先土器時代の石器、縄文時代中期の住居址1軒、平安時代の住居址9軒が発見され複合遺跡であることが判明している。

㊸恩膳遺跡　大正13年信濃教育会諏訪部会から発刊された『諏訪史第一巻』に報文が掲載されている古くから知られた遺跡である。遺物の量も多く縄文時代中期から後期にかけての大遺跡と考えられている。

㊹裏尾根遺跡　払沢の北方に位置する縄文時代中期の遺跡である。

㊺家下遺跡　払沢の西方にあり、縄文時代中期の土器片と平安時代の土師器の破片が採集されている。

㊻闢盧沢遺跡　払沢の西南方にあり、縄文時代中期の土器片や平安時代の土師器の破片が採集されている。昭和62年原村教育委員会によって発掘調査され複合遺跡であることが判明している。

㊼宮平遺跡　闢盧社境内と周辺が遺跡で、中世にかかる皿類が多く発見されたようである。

㊽向尾根遺跡　払沢の中心にあり、昭和50、54年に原村教育委員会により緊急発掘調査が実施されている。縄文時代中期の集石を持つ遺跡であり、近世の土坑墓を伴う複合遺跡である。

㊾南尾根遺跡　払沢の中心に位置する。縄文時代中期と平安時代の土器が発見されている。

㊿居沢尾根遺跡　菖蒲沢の西方で払沢川と阿久川に挟まれた尾根上から払沢川支流に面したなだらかな斜面上にある。縄文時代中期中葉の単純集落と平安時代の集落が発見されている。

(51)中阿久遺跡　菖蒲沢の北西に位置する遺跡で縄文時代中期の土器片が発見されており、独立した遺跡ではなく、居沢尾根遺跡のつながりとしてとらえられる可能性が指摘されている遺跡である。

(52)原山遺跡　菖蒲沢の西方にあり、遺物の発見も多い。住居址状の落ちこみが検出されていることもあり、縄文時代中期後半の集落遺跡であろう。

(53)広原日向遺跡　菖蒲沢の西方に位置し中央に小さな谷を挟んだ斜面上にある。昭和58年原村教育委員会により運動場建設に伴う緊急発掘調査が行われ、先土器時代の遺跡であることがわかっている。

(54)宿尻遺跡　菖蒲沢の西に隣接し、縄文時代中期の土器片が発見されている。平成5、6年原村教育委員会により調査されている。

(55)ヲシキ遺跡　菖蒲沢の西にあり、昭和51年中央自動車道建設に伴い長野県教育委員会により調査され、縄文時代の土器片と平安時代の住居址1が発見されている。

(56)楡の木遺跡　菖蒲沢の北に隣接する。縄文時代中期中葉の住居址1が確認されている。

(57)大石遺跡　菖蒲沢の南西に位置する。昭和50～51年にかけて中央道建設に伴う発掘調査が長野県教育委員会により行われている。主体が縄文時代中期前半の馬蹄形住居址群と土坑の核的集落遺跡である。

(58)山の神遺跡　菖蒲沢の南にあり、昔から遺物が数多く発見されている。昭和54年八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査の一環として原村教育委員会により試掘調査が実施され、縄文時代中期中葉から後期初頭に及ぶ集落遺跡であることが判明している。

第II章　発掘調査の概要と諸事業の記録

第１節　発掘調査の経過

１　発掘調査に至る経過

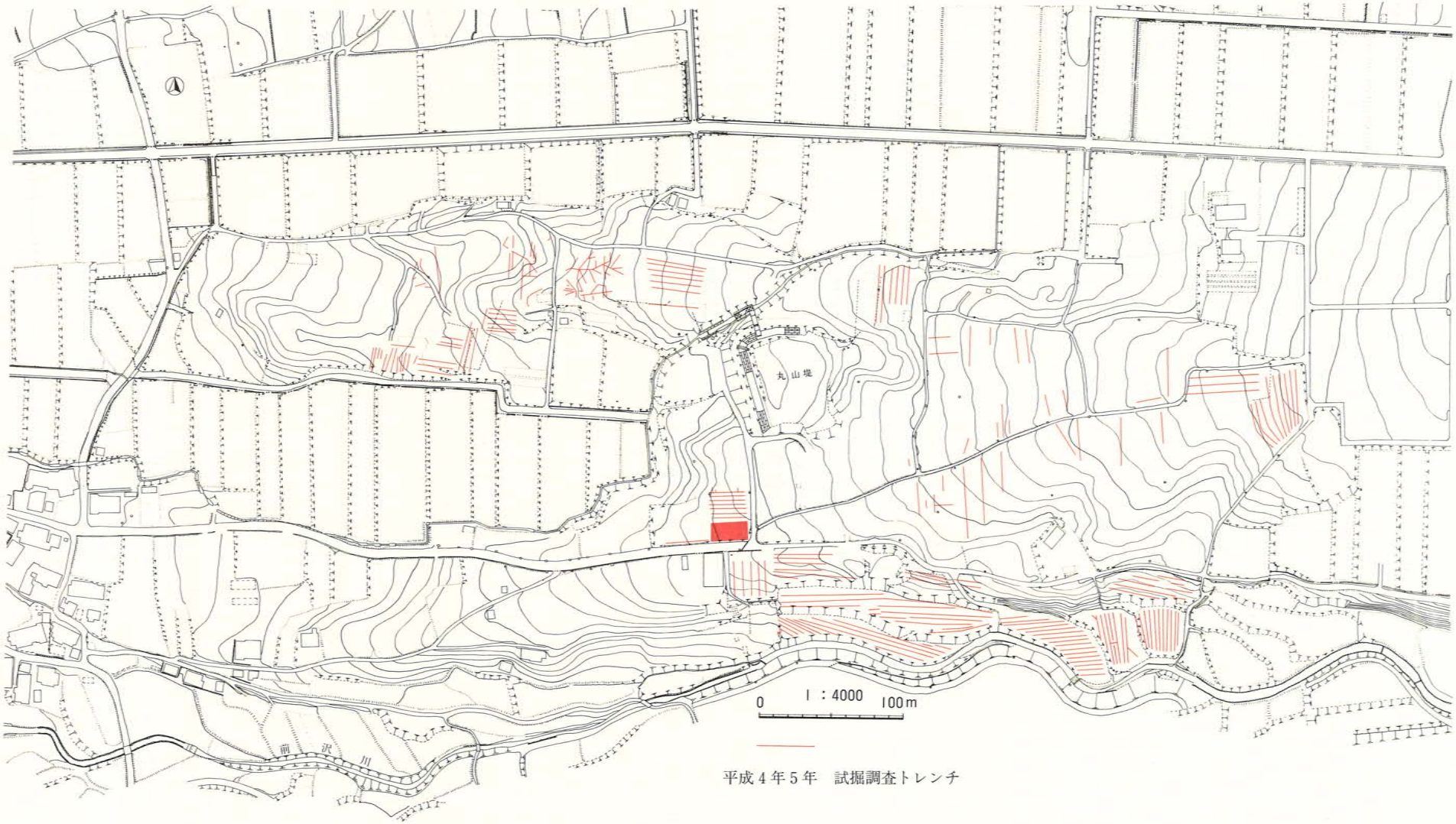
宮川丸山地区周辺一帯の県営ほ場整備の実施に伴い、平成２年、農業以外の産業へ就職を希望する市民の就業機会の増大を図るとともに、地域の活性化を進め、農業と工業とが均衡ある発展を続けることを目的として、優良企業の誘致と市内既存企業の要望に応え、活力ある地域作りのため工業団地の造成が計画された。同年６月21日には第１回の埋蔵文化財保護協議を実施、担当の工業振興課より今後の予定として平成２年度から用地交渉に入り２段階にわけて造成する計画が示され、これに対し教育委員会側からは大悦、大悦南遺跡が造成地内に該当するため保護措置が必要であると説明する。

平成３年度は２回の保護協議を開き、６月18日の協議では遺跡の保護措置について試掘を実施してから範囲を決めて本調査を行う予定とするが、９月27日の協議では平成４年度に遺構確認の試掘調査を行ないこの結果を見て記録保存とするか現状保存にするかを再協議し決定する。この協議内容については同年10月17日付けで長野県教育委員会教育長から「丸山工業団地造成に係る大悦遺跡他の保護について」茅野市長あてに回答があった。

平成４年度は試掘をはさみ３回の保護協議を開き、10月26日の協議では試掘結果により次年度本調査を行う予定とする。同年11月６日茅野市と茅野市教育委員会の間において委託料予算額640,000円で大悦南遺跡他試掘調査委託契約を締結する（決算額527,826円）。11月９日～11月18日にかけて予定地の内、大悦南遺跡及びその周辺においてトレンチ法による試掘調査を行った。その結果、遺構の密度は薄く、遺物も少なかったが広範囲にわたることが判明した。12月22日に長野県教育委員会文化課市沢英利指導主事を迎え、年度内に調査が終了しない場合は次年度に繰越して、２期工事予定の大悦遺跡については大悦南遺跡の発掘調査に合わせて試掘を行うことが決定する。

平成５年も２回の保護協議が開かれ、６月10日に工業振興課から農業振興地域の解除を進めているが、１期工事分について５年度に計画していた本調査は日程的に困難な状況となってきたので、平成５年度の予算で２期工事分と前年未調査の畑地を試掘し、その結果に基づき再協議を行い、保存区域を検討するよう要望が出され、１期工事分を平成６年度、２期工事分を平成７年度に本調査実施の予定とする。10月18日の保護協議では工業振興課から事業予定地の１期分２期分が逆になったと説明があり、平成６年度の発掘調査区は堤上の道路敷き予定地から西側を実施することになる。10月25日茅野市土地開発公社と茅野市教育委員会の間において委託料2,446,000円で試掘調査委託契約締結（決算額2,445,000円）。10月25日～12月７日まで大悦南は前年調査できなかった水田、畑、原野を中心に、大悦遺跡は畑地と山林の重機が入れられる部分をトレンチ法で試掘調査した（第５図）。

平成６年１月18日長野県教育委員会文化課小平和夫主事を交えて行われた保護協議で工業振興課から２月中には設計も出来上がり、買収は６月に本契約の予定であることが示され、文化財調査室からは試掘の結果について大悦遺跡は山林で不明な所もあるが遺構の存在が確認し、大悦南遺跡については南斜面にある原野化した旧水田と畑には土を削り引いた跡が現われて崖との境からは涌き水も数個所で確認、更に元の地形はこの涌き水により形成された幾筋もの小さな谷が前沢川に直行していたらしいことと、ここの東続き原村と



第5図　圃場整備後の地形と試掘トレンチの位置（1/4,000）

境界を接する畑からは表土を剝ぐと泥炭化した草と粘土により構成される湿地跡が発見された。このような状況で遺物の出土はほとんど無く、最下段の西側隅で平安時代の土器片を採集しただけである。台地上部では斜面を含め平安時代の住居址を確認した他、押型文土器の出土等があり、遺跡範囲が今までよりも広がる等の報告と説明を行った。遺跡の保護措置について2年度にわたる試掘調査を踏まえた結果やむを得ない方法として記録保存の措置を取ることになり、平成6年度の発掘範囲を確定することになったが、造成工事では移動する土量が多いことと、表土の一部を運び出す予定があるため大悦遺跡は北側に延びる枝尾根を除き、試掘できなかった山林部を含めて発掘することになり、大悦南遺跡は第1期工区分のみ調査計画を立てることにする。また発掘調査委託は茅野市教育委員会とするよう指示があった。開発計画の早い段階より何回も協議を重ね、途中で計画変更等により予定通り進まなかったこともあるが、関係各位の理解、協力が得られ実施した試掘調査と保護協議の結果をもとに、4月1日茅野市土地開発公社と茅野市教育委員会との間で「大悦遺跡他埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を委託料28,416,000円で締結する（決算額28,211,000円）。

5月10日開発公社から発掘調査に先立ち行なわれる予定だった立ち木の伐採について早くても6月末でなければ着工できないため畑地部分から調査に着手し伐採後、山林部に調査区を拡張するよう決定した。5月18日付けで茅野市教育委員会教育長宛に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（通知）が長野県教育委員会教育長より発信される。

2　発掘調査の経過

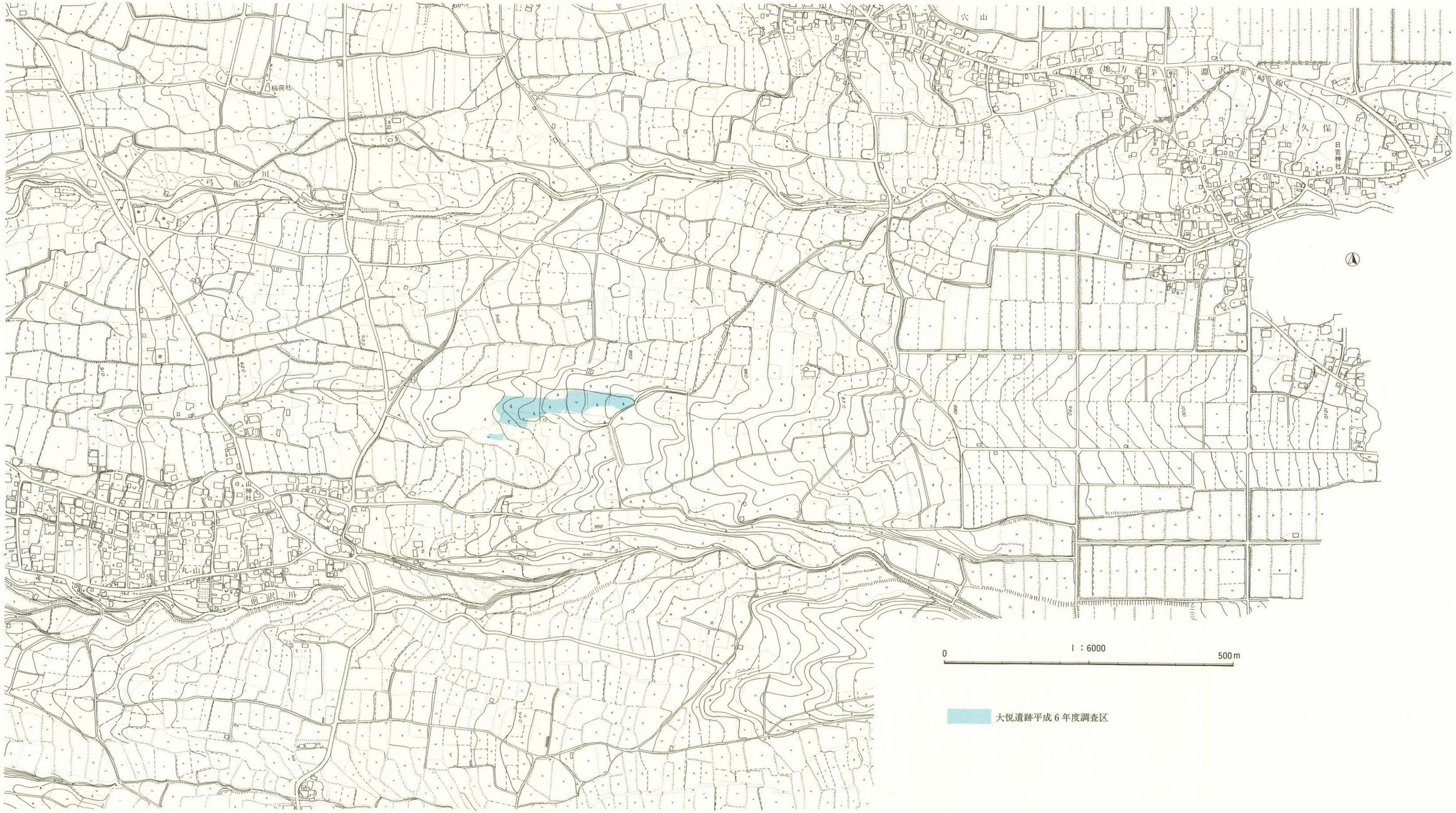
5月19日発掘調査開始、9月9日の平成7年度以降埋蔵文化財保護協議で、来年5月に1期工事が終わる予定だが平成6年度調査区に隣接し廃土置場として使う未調査部分についても切り土等の関係から年度内調査が必要となり、2期工事予定地の一部まで調査区面積を拡張することにする。発掘調査報告書については現場作業の日数が延びることから今年度調査区のうち大悦遺跡分を平成6年度、大悦南遺跡については平成7年度に合わせて刊行の予定とし、拡張部分に総力を投入することにする。2期工事は7月着工、12月完成の予定でこれに使う土を来年度調査区内から運搬するため新年度早々から発掘調査に着手するように要望が出される。10月25日大悦遺跡の調査終了（第6図）開発公社へ引渡しを行い、発掘機材は大悦南遺跡へ運搬する。11月18日丸山工業団地造成起工式、12月19日第1期工区の発掘調査終了、開発公社に引渡しを行う。

3　調査日誌抄

試掘調査（大悦南遺跡分を含む）

平成4年11月9日から11月18日にかけて大悦南遺跡でトレンチ法による試掘を総延長1040mにわたって実施。遺構の確認はできなかったが押型文土器や黒耀石を発見、須恵器破片が採集された付近に住居址らしい落ちこみを検出し、原村の境界に近い畑で縄文土器の一括土器を採集する。

平成5年10月25日から12月7日にかけて大悦、大悦南遺跡でトレンチ法による試掘を実施。総延長大悦遺跡は1290m、大悦南遺跡は3110mのトレンチを開けた。この試掘調査で大悦遺跡からは遺構の分布濃度は薄かったが平安時代の住居址を検出。大悦南遺跡では平安時代の住居址の他土坑等が検出され従来よりも遺跡の範囲が広がることが判明し、開発予定地東端の前年一括土器が出土した畑の東側に隣接する原村と境を接する畑からは土坑を検出する。また大悦南遺跡内の一部から11月5日に県営小規模老朽ため池等整備事業丸山地区工事刃切土工の波除け、護岸工に用いるハードローム層の切り出しを行うことになり、この部分について表土剝ぎを実施したが遺構、遺物の検出はなかった。



第６図　圃場整備前の地形と大悦遺跡発掘調査区位置図（1/6000）

平成６年度発掘調査

４月４日　発掘機材並びに測量器材の点検整備開始。

５月10日　開発公社側から山林部の立ち木伐採予定が当初予定より遅れ６月末ころになるため畑地について先に着工するよう要請を受け発掘調査の開始を決定する。

５月18日　重機業者と打合せ、機材搬入開始。

５月19日　大悦遺跡の東側、圃場整備用に土を持ち出す予定の一角を先行して発掘調査するため重機を入れて表土剝ぎを開始する。

５月20日　東側部分に遺構の検出、遺物の出土なく発掘調査終了。大悦遺跡に重機を移動、中央の畑部分から表土剝ぎを開始する。

５月23日　遺構検出を始める。

５月25日　最南端の畑へ重機を移動して表土剝ぎを開始するが、試掘以前にトレンチと直行する斜面上方から下方に向い重機で土を引いた跡が現われる。

５月30日　原村教育委員会平出一治、平林とし美氏来跡。

５月31日　大悦南遺跡へ重機移動表土剝ぎを開始、押型文土器や黒耀石片が目立って散布しているのでまず耕作土を剝ぎ、様子を見ることにする。

６月１日　土の色が変わる部分まで再び表土剝ぎ。この層内まで所によってビニールマルチを含んでいる。

６月２日　再表土剝ぎでやや深めに重機の平バケットを入れた部分で礫を検出、この礫上のレベルまで更に表土を剝ぐことにする。

６月３日　遺構検出作業で集石が現われる。

６月７日　原村教育委員会平出一治、平林とし美氏来跡。開発公社で廃土の一部を運びだす。

６月９～19日　伐採が始まらないため発掘作業休止。

６月18日　伐採作業開始。

６月20日　大悦南遺跡で発掘作業再開。

６月23日　大悦遺跡の伐採部に切り残しの立木があり開発公社に確認、緑地帯として残る部分なので保存地として調査を行わないことに決定する。

６月24日　大悦遺跡の伐採ほぼ終了。

６月27日　大悦南遺跡畑の部分遺構検出終了。

６月28日　大悦遺跡第１号住居址を掘りはじめる。

６月30日　諏訪市教育委員会青木正洋氏来跡。宮下教育次長視察に訪れる。

７月１日　重機再稼働、山林部分の表土剝ぎ開始する。

７月４日　遺構検出を始める。

７月６日　尾根先端付近から条痕文系土器片が出土する。

７月19日　午後、大悦南遺跡に重機移動表土剝ぎを開始する。

７月21日　第２号住居址調査開始。

8月17日　基準点測量準備。

8月19日　大悦遺跡基準点測量。

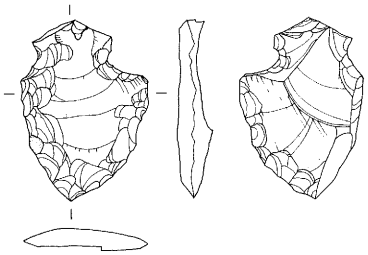
8月23日　大悦遺跡西側へ再び重機を入れる。

8月25日　重機による表土剝ぎ終了。

8月29日　萩原進工業振興課長、石田弘同係長来跡。

8月30日　大悦遺跡で遺物の取上げ開始。

8月31日　第1号土坑から茎のある黒耀石製の石鏃が出土。



第7図　丸山堤の北西、大悦遺跡
調査区東隅で表面採集された石匙（2/3）

9月9日　保護協議の結果本年度調査範囲広がる。

9月14日　第1、2号住居址の遺物出土状況の写真撮影。

9月29日　大悦遺跡の航空測量来月初旬に延期。

9月30日　両角室長台風後の点検に訪れる。

10月4日　抜根跡の掘りぬき開始。石田工業振興係長来跡。

10月6日　航空測量準備。河西進経済部長、萩原工業振興課長、石田係長来跡。

10月7日　航空測量実施。終了後大悦南遺跡へ発掘器材を運搬する。

10月11日　大悦南遺跡にすべて移動し本格的に調査を始める。

10月12日　牛山俊財政課長外3名来跡

10月24日　萩原工業振興課長、石田係長来跡

11月9日　永富直子八ヶ岳総合博物館指導主事来跡。

11月11日　集石群の清掃開始。

11月17日　大悦南遺跡集石群の航空測量実施。

11月18日　丸山工業団地造成起工式。

11月21日　土坑半割開始。

11月25日　原村教育委員会五味一郎氏来跡。

12月1日　地元の守屋栄三郎氏が調査区外の西側にあたる大悦南遺跡内から以前に出土した釣手土器を持って訪れる。

12月7日　押型文土器を伴う住居址を検出する。

12月14日　道路敷き予定地の一部が調査区外になっていることが判明、急遽調査区を拡張する。

12月15日　大悦南土坑群の航空写真撮影。

12月16日　撤収開始。

12月19日　撤収終了、第1期工区分すべて引き渡す。

12月20日　本格的に整理作業を始める。

平成7年2月1日　第2期工事分大悦南遺跡の伐採予定地縄張り。

4　遺物整理と報告書作成の作業

12月20日大悦遺跡の本格的な整理作業開始。

平成７年３月25日大悦南遺跡の本格的な整理作業開始。

３月28日大悦遺跡緊急発掘調査報告書発行。

第２節　発掘調査の方法

1　発掘調査組織

本調査は茅野市教育委員会の直轄事業として実施し、その組織は次ぎのとおりである。

調査主体者　両角　昭二　（茅野市教育委員会教育長）

事務局　宮下　安雄　（茅野市教育委員会教育次長）

文化財調査室　両角　英行（文化財調査室長）　鵜飼　幸雄（文化財係長）　守矢　昌文

小林　深志　大谷　勝己　小池　岳史　功刀　司　百瀬　一郎

小林　健治　柳川　英司　大月三千代

調査担当者　百瀬　一郎

調査補助員　赤堀　彰子　伊藤　千代美　牛山　徳博　武居　八千代

堀内　潭

発掘調査・整理作業参加者

伊藤　京子	伊東　みさを	鵜飼　恭子	鵜飼　澄雄	植松　博視
牛山　矩子	小尾　知美	太田　悟史	太田　友子	太田　実幸
太田　光則	岡　和宣	帯川　藤夫	金子　清春	北原　きよゑ
久根　種則	栗原　舜	小平　里美	小平　長茂	小平　三行
小平　義市	坂本　大策	坂本　と史	清水　太助	清水　つるゑ
清水　豊一	塩原　博子	篠原　リカ子	白籏　スエ子	関　秀樹
田中　か志子	田中　つかね	立木　利治	立岩　貴江子	長田　真
花岡　照友	林　靖之	平尾　弘子	平沢　房江	藤村　英俊
保科　常夫	保科　貞一	保科　まさる	宮坂　ちよ江	宮坂　ひとみ
三宅　三重子	目黒　恵子	両角　次郎	矢島　のぶ子	柳平　あい
柳平　いつ子	山崎　直希	吉田　末巳	吉田　淑子	

基準点測量委託　株式会社　北　測　代表取締役　北原　一利　（伊那市西春近下島2875－３番地）

航空測量委託　株式会社　協同測量社　代表取締役　中澤千之助　（長野市大字安茂里671番地）

遺物実測委託　株式会社　ジャステック　代表取締役　松澤　正文　（飯田市鼎名古熊2539番地１）

発掘調査期間中、地元宮川、隣接する玉川、原村の方々には埋蔵文化財に対して深いご理解と協力を賜り、また宮坂光昭、五味一郎、野澤則幸、三上徹也、百瀬長秀氏からは貴重で有益なご指導、助言を賜りました。ここに深甚なる謝意を表します。

2　発掘調査区の設定

大悦遺跡は本格的な発掘調査がされることなく周辺の開発が進み、造成予定地は山林、原野が多かったことから規模や内容について明確な全体像は不明であった。そこで、平成４、５年度に茅野市教育委員会で実施した試掘調査と表面採集を中心とする踏査結果をもとに大悦南遺跡分を含め範囲を設定した。グリッドの設定は座標系第Ⅷ系Ｘ＝-2830.000、Ｙ＝-26600.000を基準軸とし10ｍ四方の大グリッドの中に２ｍ四方の小グリッドを配置し、大グリッド・小グリッドともに東西軸を数字、南北軸をアルファベットで表し、大グリッドは大文字のアルファベットとアラビア数字、小グリッドは小文字のアルファベットとローマ数字の組合せで例えばＡａ－１Ｉと表示して小グリッド一つ一つをブロック分けしている。

第３節　遺構と遺物の概要

1　遺構の概要

遺構は発掘順に番号を付し、通し番号で示されている（第８図）。

土坑としたものはいわゆる小竪穴や穴状の遺構について便宜的に土坑と総称し、遺物の出土は無いが壁、底面がある程度しっかりしたものは小型の穴でも土坑として登録してある。調査区は表土剝ぎに入る前に行われた抜根とその焼却作業によりほぼ全域にわたって根を抜いた攪乱痕と焼却穴痕があり、更に西側の南向き斜面の畑では試掘調査以前に重機をいれて土を押した跡が検出されたことから調査前に失われていた遺構も少なくないと思われる。調査時に土坑は36個所を登録している。ロームマウンドは１基である。土坑のなかには数基づつの群としてとらえることができるものもある。

土坑は注目されるような遺物の出土がほとんど無く、時期決定できたのは４基だけでいずれも縄文時代晩期最末から弥生時代中期初頭にかけての条痕文系土器群の破片が出土している。

住居址は２個所発見されており、いずれも平安時代で南向きの尾根の斜面と少し離れた肩に設けられている。

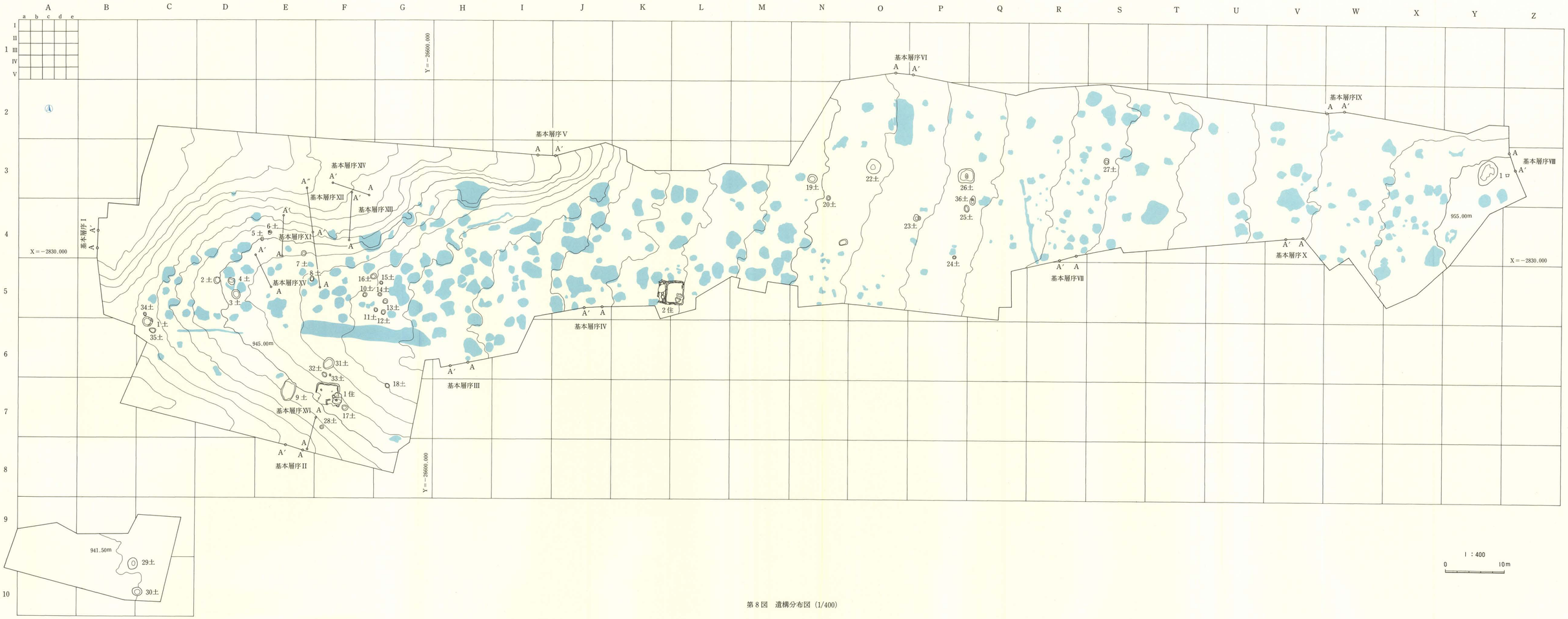
2　遺物の概要

遺物で多いのは条痕文系の土器群である。完形になるものは１点も無く、部分的な器形復元できたのも１点だけである。他の時期では縄文時代中期後葉曽利期と後期、時期の特定ができなかった磨消縄文の土器片が１点ずつ出土している。

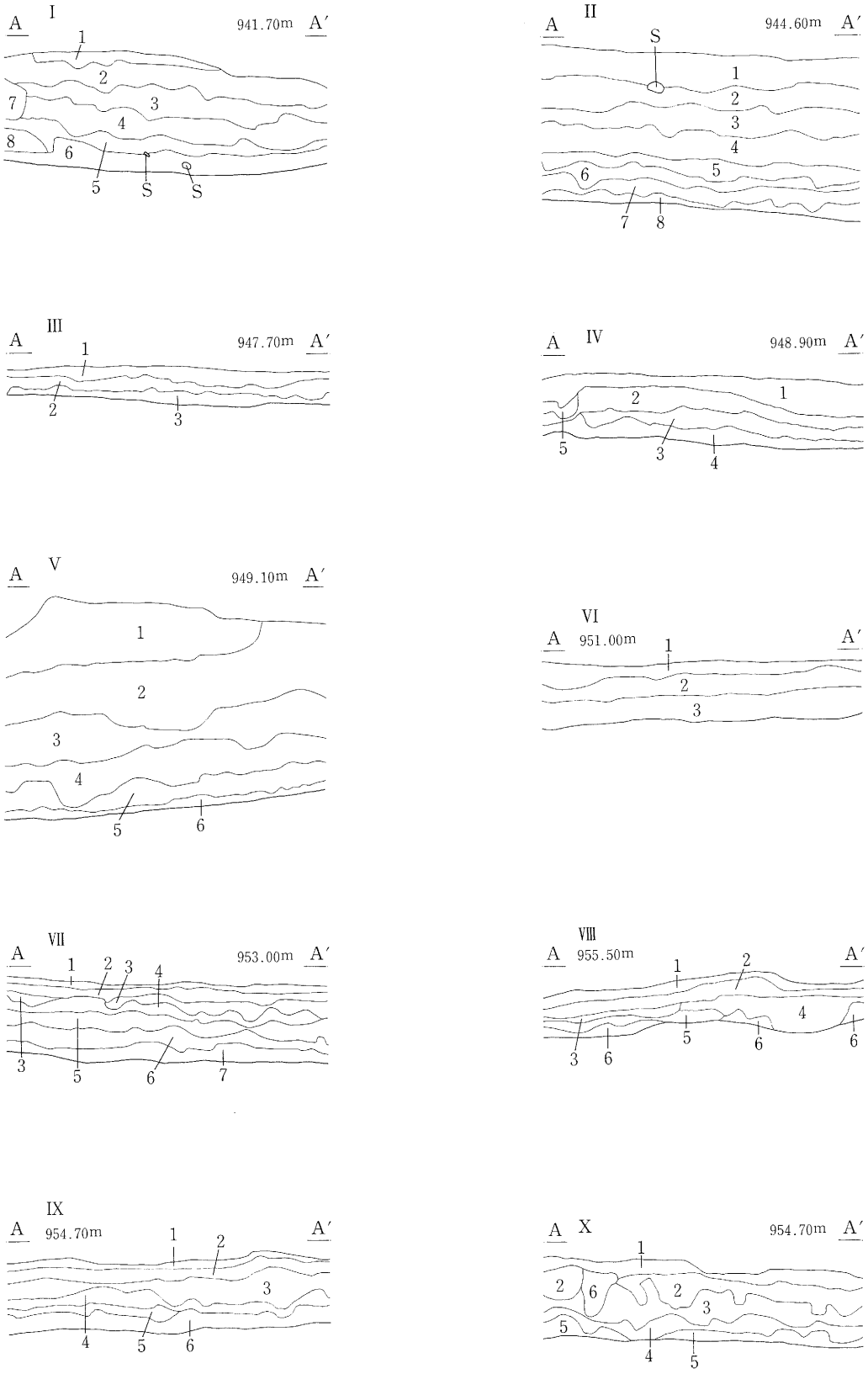
石器の出土で目立つのは打製石斧である。形態は小型のやや厚目な撥形で、破損しているものが多い。

黒耀石の石器では縄文時代早期にみられる局部磨製石鏃が２点出土しており、今回の調査に続いて実施した大悦南遺跡の押型文土器を伴う集石群との関係からも興味深い。

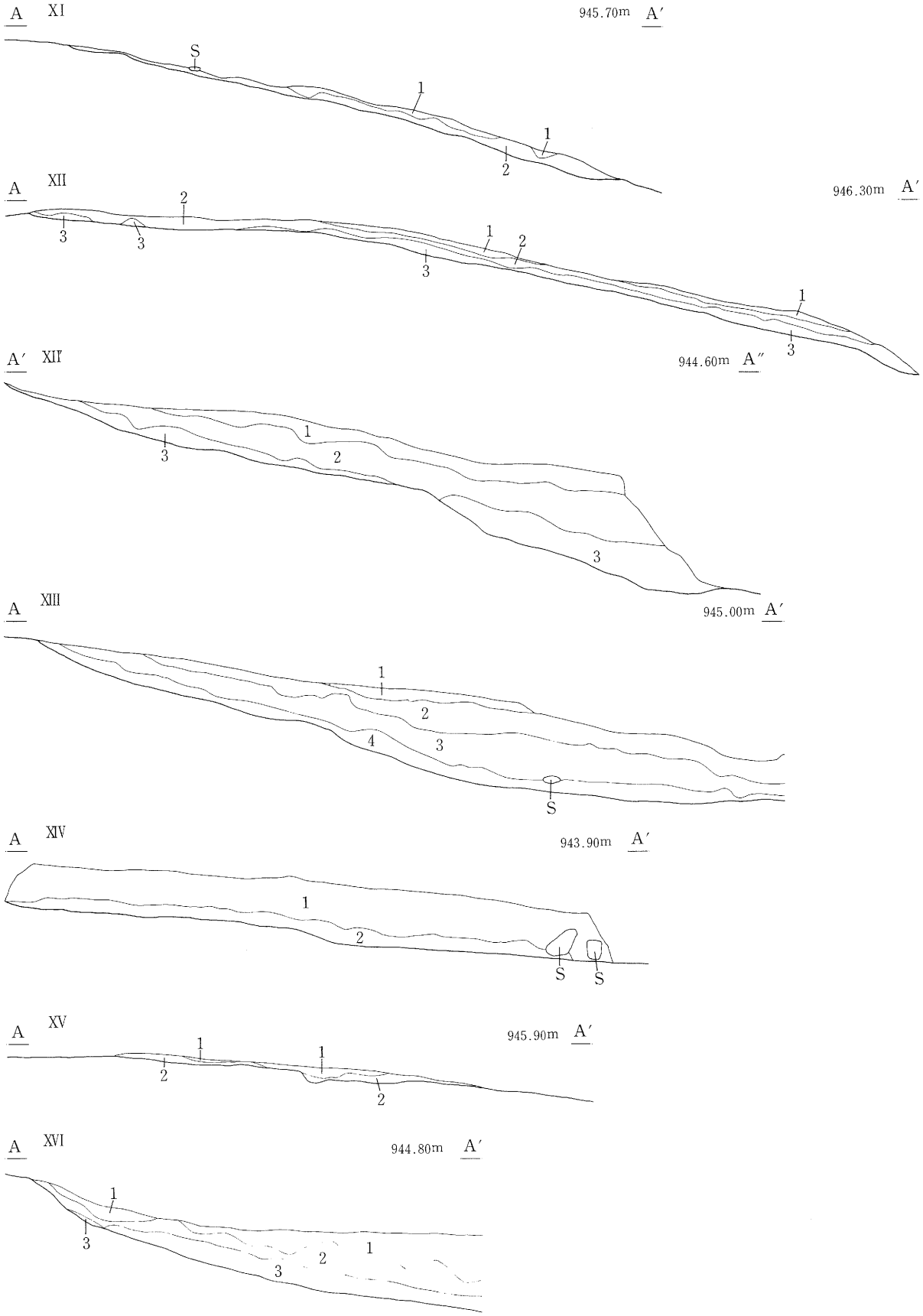
平安時代の遺物は土師器、灰釉陶器があり、いずれも破却された状態で、試掘時に発見したものも含め、ほとんどが住居址内から出土したものである。



第8図　遺構分布図（1/400）


I
A
A′
941.70m
1
2
3
4
5
6
7
8
S
S
II
A
A′
944.60m
S
1
2
3
4
5
6
7
8
III
A
A′
947.70m
1
2
3
IV
A
A′
948.90m
1
2
3
4
5
V
A
A′
949.10m
1
2
3
4
5
6
VI
A
A′
951.00m
1
2
3
VII
A
A′
953.00m
1
2
3
4
3
5
6
7
VIII
A
A′
955.50m
1
2
3
4
5
6
6
6
IX
A
A′
954.70m
1
2
3
4
5
6
X
A
A′
954.70m
1
2
2
3
4
5
6

第9図　基本層序（1/60）



第10図　基本層序（1/60）

第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物

第１節　大悦遺跡の層序

大悦遺跡は調査区が東西に細長いこととローム層まで極浅い尾根頂部と、基層となる礫層まで達している谷部とでは層序が端的に変わるため調査区外周で10個所、表土剥ぎ終了後に条痕文系土器群を出土した北斜面一帯に６個所を対象として層序の測量地点を設定した（第８図）。

層序は上位から１．黒色土（表土）、２．黒褐色土、３．暗褐色土、４．暗褐色土（遺構確認面）、５．暗褐色土、６．褐色土、７．黄褐色土、８．黄褐色土となっている。各土層の性質は下記のとおりである。

第１層は腐葉土と耕作土からなり色調は黒色を呈する。粒子は細かく締まりが無い、粘性は弱い。ビニールマルチ、石灰粒を含む場合がある。

第２層の色調は黒褐色を呈する。粒子は細かく締まりが無い、粘性は弱い。植物の細根がかなり入り込んでいる所もある。

第３層の色調は暗褐色を呈する。粒子は細かく締まりがあり、粘性は弱い。

第４層から遺物の包含層となり色調は暗褐色を呈する。粒子は細かく締まりがあり、粘性を認められる。５㎜以下のローム粒子を少量含む。

第５層の色調は暗褐色を呈する。粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５㎜以下のローム粒子を少量含む。

第６層の色調は褐色を呈する。粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。２㎝以下のローム粒子を斑に含む。

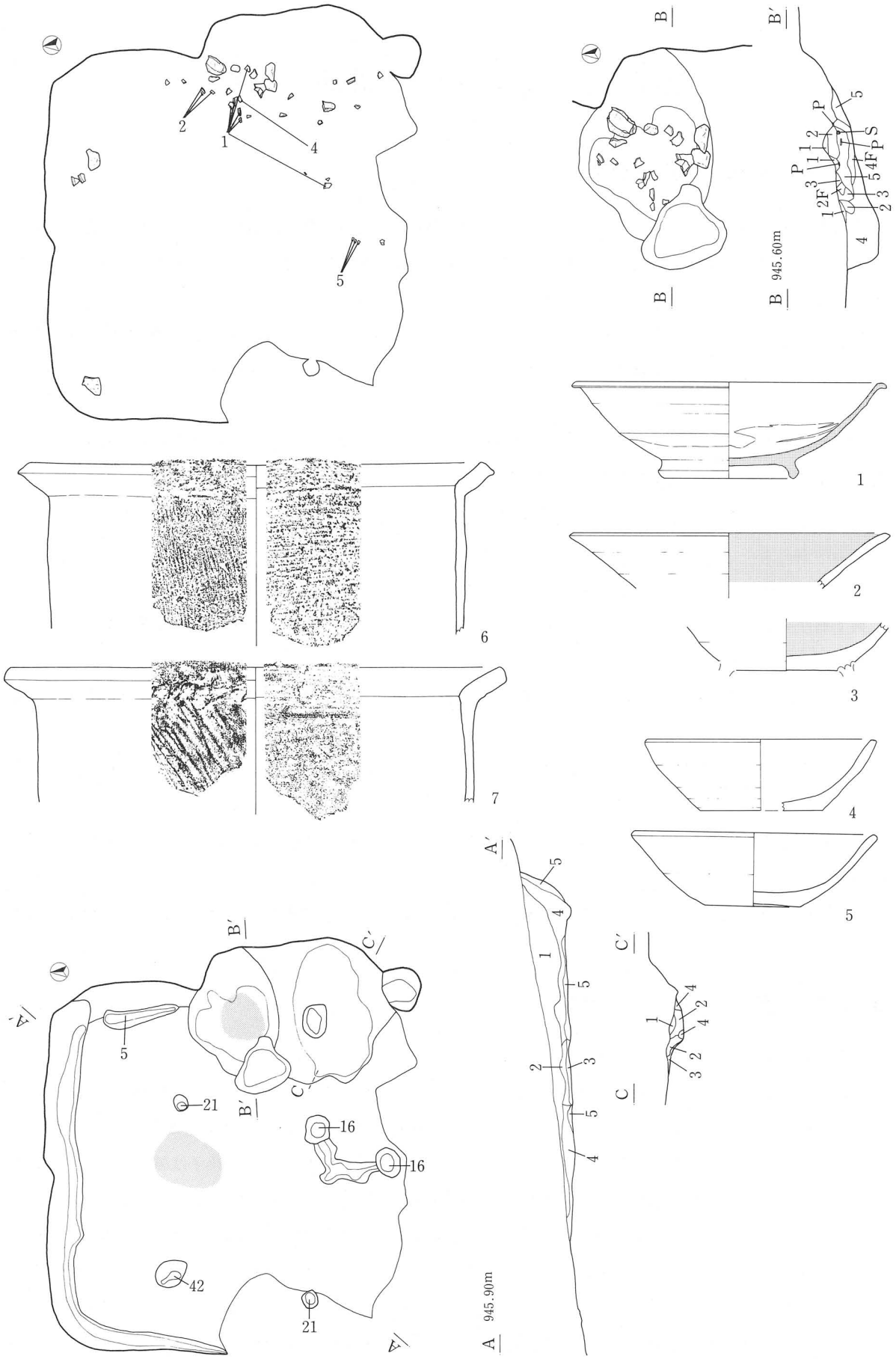
第７層の色調は黄褐色を呈する。粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５㎜以下のローム粒子少量と８㎝以下のロームブロックを含む。

第８層の色調は黄褐色を呈する。粒子は細かくしまりがあり、粘性は強い。１㎝以下のローム粒子を多量に含む。

第２節　竪穴住居址と遺物

１．第１号住居址（第11図、図版６）

Ｆｂ－６Ⅱグリッドを中心とした台地先端に近い南西向き斜面に位置する隅丸方形の住居址である。長径4,42ｍ、短径4,04ｍ、長軸Ｅ－８°－Ｓ。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。３㎜以下のローム粒子を多量に含む平安時代の遺物包含層。２層は暗黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５㎜以下の炭化物と焼土を多量に含む。３層は黄褐色土で粒子が粗く締まりが無い。粘性は強く１㎝以下の焼土ブロックと炭化物を多量に含む。４層は暗黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。３㎜以下のローム粒子と１㎝以下のロームブロックを多量に含み、５㎜以下の炭化物と焼土を少量含む。５層は黄褐色土で粒子は粗く締まりが無い。粘性は強く、１㎝以下のロームブロックを多量に含む。現存していた最大壁高は北東隅で50㎝を測るが遺構検出の際、試掘前に北から南へ重機による土を押した跡が東側に隣接して観察されており、住居址上面も同様で試掘以前すでに削り取られていた。更に南側半分には



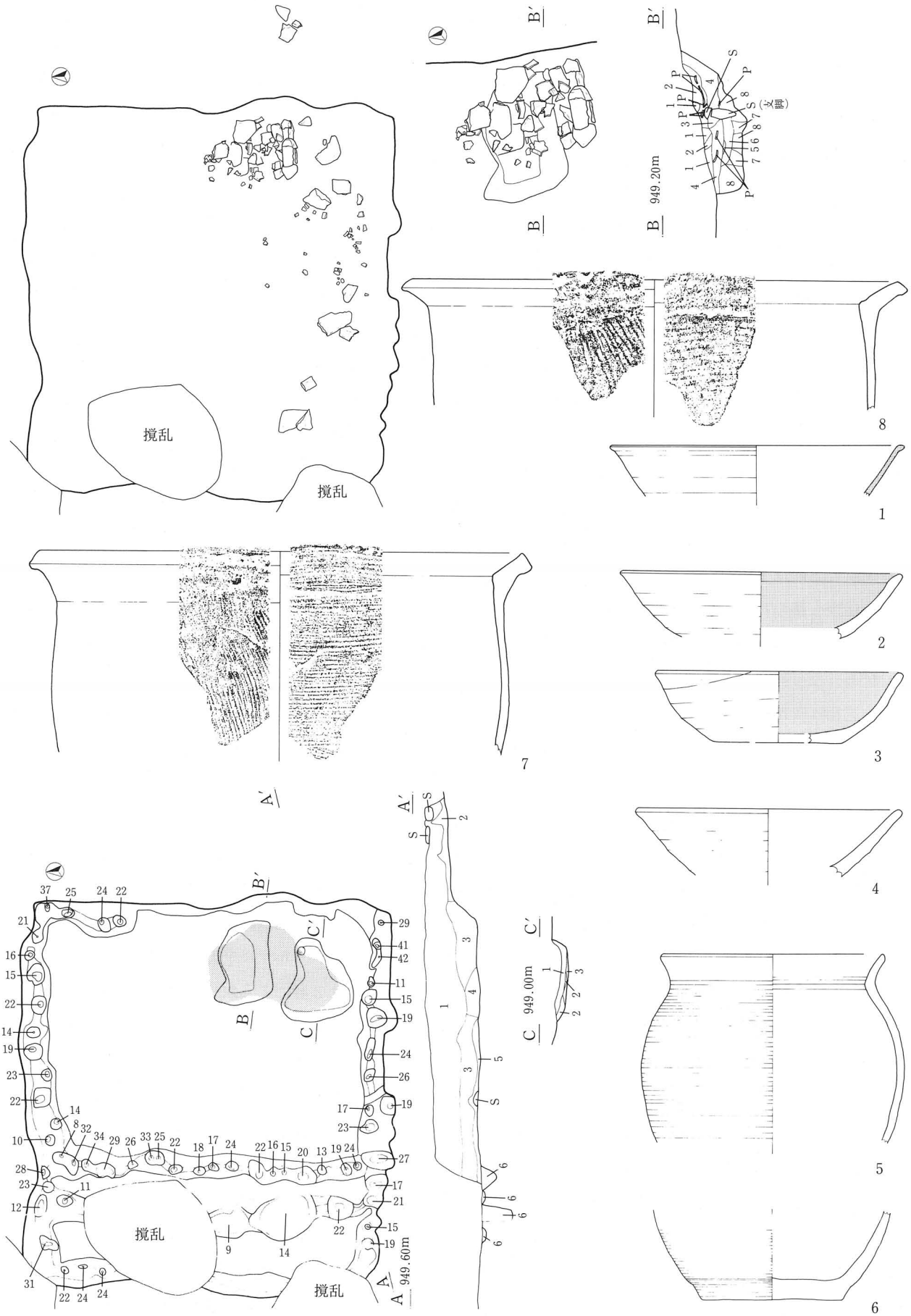
第11図　第１号住居址（1/60）同竈（1/40）同出土遺物（1/3）

農機具による攪乱と相俟って壁の残っていない部分もあるが、残存部は硬く締まった良好な壁面となっている。周溝は北側の床から最深部まで約９cmで浅いが、半周する状態で検出している。床面は凹凸は多いが壁面同様に硬く締まり、南側は僅かながら傾斜し下がっている。明瞭に柱穴となるものは検出されなかった。住居址中央からやや北よりの床面に約0,3m²にわたって焼土が形成されている部分がある。竈は東壁の中央付近に石組竈が破却された状態で検出し、中から灰釉陶器の埦や土師器の坏、甕の破片が出土している。煙道のあったと思われる部分は削り取られた中にあったと思われる。竈の層序は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがある。粘性は強く５mm以下のローム粒子を少量含む。２層は褐色土で粒子は粗く締まりが無い。粘性弱く１cm以下のローム粒子多量と10cm以下の焼土ブロックを斑に含む。３層は褐色土で粒子は粗く締まりがあり粘性を認められる。５cm以下のローム粒子と１cm以下の炭化物と焼土を少量含む。４層は黄褐色土で粒子は粗く締まりがあり粘性は強い。７cm以下のロームブロックと５cm以下の焼土ブロックを多量に含み、壁へ寄るほど焼土の量が徐々に増加し、西側には支脚を抜いたと考えられる小穴があり、この中の焼土ブロックの量は周辺とほぼ同様である。５層は赤褐色土で粒子は細かく締まりが無い。粘性弱く５mm以下のローム粒子少量と１cm以下の炭化物少量と焼土を多量に含む。竈の南に隣接し平面楕円形で浅いすり鉢状の灰穴がある。層序は１層が褐色土で粒子は細かく締まりがあり粘性は弱い。５mm以下のローム粒子と１cm以下の炭化物、焼土を少量含む。２層も褐色土で粒子は細かく締まりが無い。粘性弱く１cm以下のロームブロック少量と５mm以下の同粒子、１cm以下の炭化物と焼土を多量に含む。３層は黄褐色土で粒子は粗く締まりがあり粘性も認められる。３cm以下のロームブロック多量と５mm以下の同粒子、炭化物、３mm以下の焼土少量を含む。灰穴西側の壁面には焼土が帯状に検出された所があり、東側は住居址の壁まで達しているため以前竈があった可能性も否定できない。

遺物は灰釉陶器の埦、土師器の坏(内面黒色土器を含む)、甕があり、いずれも破棄された状態で出土、器形復元可能なものについて図示する。

２．第２号住居址（第12図、図版７）

Ｌａ－４Ⅲグリッドを中心とした台地上に位置する隅丸方形の住居址である。長径4,46m、短径4,13m、長軸Ｅ－５°－Ｓ、検出当初は南側の約２割の部分が保存地となる緑地予定地内にあったが造成工事で破壊される可能性もあるため協議の結果完掘することになった。そのため層序の観察はこの境界部分に設定して行なった。１層は黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり粘性は強い。ビニールマルチと細根が混在する耕作土層。２層は暗褐色土で粒子は細かく締まりがあり粘性は弱い。３層は２層に１cm以下のロームブロックと炭化物、焼土を多量に含み、本層からが住居址の覆土となる。４層は褐色土で粒子は細かく締まりがあり粘性は弱い。１cm以下のロームブロック少量と２cm以下の炭化物、焼土ブロックを多量に含む。５層は暗黄褐色で粒子は細かく締まりがあり粘性は強い。３mm以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを大量に含む。６層は黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり粘性は強いソフトロームと５cm以下のロームブロックを多量に含む。検出した部分の上面は耕作により、また、住居址内の一部は今回の抜根による攪乱を受けているため壁面はやや軟弱ながらも立上りは明瞭である。最大壁高は南東隅で29cmを測るが北西側の約半分は周溝を検出しただけで壁は残っていなかった。周溝は竈の部分と、抜根による攪乱で途切れている所もあるが、深さ15cm～25cm程の小穴が連続し、ほぼ一周する。西側には３本の溝があり、内側と外側の２本は周溝の幅、深さも他の周溝とほぼ同様であり、おそらく西側へ拡張したものと考えられる。床面も壁面同様にやや軟弱な傾向にあるが、凹凸は少なく僅かに西側に傾斜し下がっている。主柱穴は検出されなかった。竈は東側の中



第12図　第２号住居址（1/60）同竈（1/40）同出土遺物（1/3）

央から若干南寄りに設けられており、上部は破却されているが支脚と袖石は残存する。石組竈の中からは土師器の杯と甕の破片などが出土している。煙道は攪乱を受けた部分にあったとみられるが検出されていない。竈の層序は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性が弱く細根が多く混在する。２層は黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり粘性は弱い。１cm以下の炭化物と焼土を少量含む。３層は褐色土で粒子は粗く締まりが無い。粘性は弱く１cm以下の炭化物少量と焼土多量を含む。４層は暗褐色土で粒子は粗く締まりが無い。粘性は弱く１cm以下のローム粒子と炭化物、焼土を含む。５層は黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。６層は５層が焼けた明赤褐色の焼土である。７層は褐色土で粒子は粗く締まりが無い。粘性が認められる。１cm以下のローム粒子と炭化物を少量含む。竈の南に歪んだ瓢箪形の灰穴がある。層序は１層が暗褐色土で粒子は粗く締まりがあり粘性は弱い。１cm以下の礫少量と同焼土、３cm以下の炭化物を多量に含む。２層は褐色土で粒子は粗く締まりがあり粘性は弱い。１cm以下のローム粒子と炭化物、焼土を少量含む。３層は黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり粘性は強い。１cm以下のローム粒子多量と焼土を少量含む。

遺物で図示可能なものはいずれも土師器で坏（内面黒色土器を含む）と甕がある。他に灰釉陶器の椀破片が１点出土している。

第３節　土坑と遺物

土坑として取り上げたものは耕作跡と発掘調査前の伐採に伴い新たに作られた抜根跡を除き、人為的に土中へ穿たれた穴のすべてを便宜的に土坑としているため、昭和30年代に桑畑を落葉松林に転化した際、開削された桑抜根跡も土坑として扱い、この抜根跡については明記してある。

１．第１号土坑（第13図、図版10－①）

Ｃａ－５Ｉグリッドを中心として尾根西先端の肩部に位置する。長径183cm、短径162cm、深さ103cm、平面形はほぼ円形で断面は中央がなだらかに凹む鍋形。覆土は１層が色調は黒褐色で粒子が細かく締まりはある。粘性は弱く、５mm以下のローム粒子を少量含む。２層は１層より色調がやや明るい黒褐色土で、粒子は細かく締まりがあり、粘性が強く少量の炭化物とローム粒子を含み、斑にやや褐色味を帯びる部分がある。３層は色調も暗褐色土となり、粒子は細かく締まりがある。炭化物を少量含み、２層より１cm以下のローム粒子が増え、２cm以下のロームブロックも小量ながら認められる。４層は黄褐色土で粒子は粗く炭化物は無い。多量のロームブロックと２cm以下の礫を少量含む。セクションにはほとんどかかっていないが、東側には４層に含まれるものより大きなロームブロックと黄褐色土の混在する土をかなり硬く固めて作り出されたと思われる段がある。段上には径約20cm、深さ12～52cmの小穴が４か所に集中し、この内２個所の小穴は長円の平面形でハの字にならんでいる。

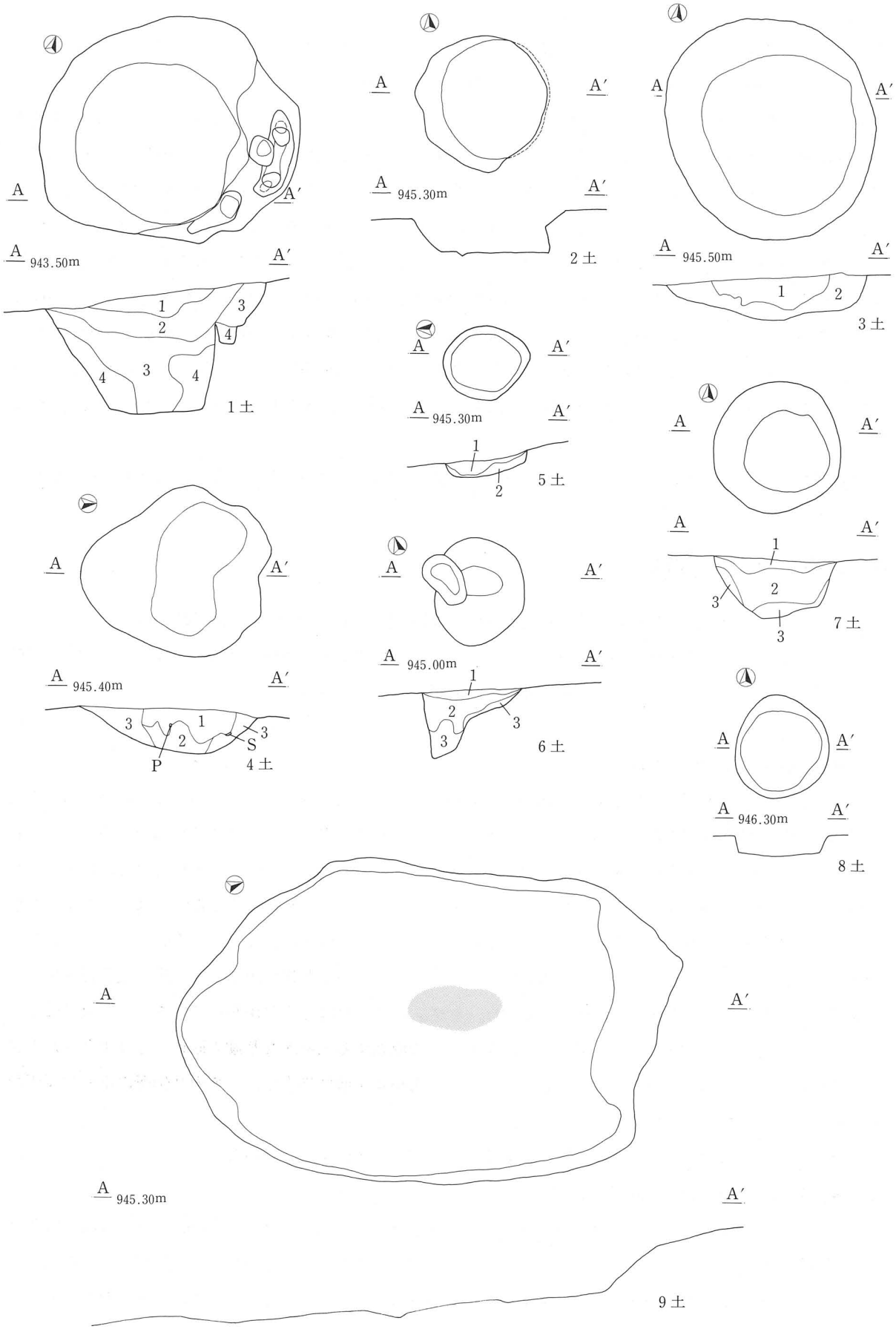
遺物は土坑のほぼ中央最上層から欠損した黒耀石製の有茎石鏃が出土している。

２．第２号土坑（第13図、図版10－②）

Ｄｂ－４IIグリッドを中心とする北西向きのなだらかな斜面に位置する。長径135cm、短径111cm、深さ48cm、下方部は底面、壁面とも硬く締まっている。平面形は円形であったと思われるが、中程より上部はローム層内まで抜根により攪乱され、不整形なプランで検出された。断面は底部がわずかに広がる鍋形である。

遺物の出土はなかった。

３．第３号土坑（第13図、図版10－③）



第13図　第1、2、3、4、5、6、7、8、9号土坑（1/40）

Ｄｃ－４Ⅳグリッドを中心とした西向きのなだらかな斜面に位置する。長径161cm、短径145cm、深さ47cm、平面形は円形で断面形は中央が若干凹む鍋形を呈する。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり粘性は強く、細根が多量に入っていた。５mm以下のローム粒子と３cm以上の同ブロックを含み、遺物が多く出土している。２層は暗黄褐色で１cm以下のローム粒子と５cm以上の同ブロックを多量に含む。

遺物は条痕文の土器片等が出土している。

４．第４号土坑（第13図）

Ｄｃ－４Ⅱグリッドを中心として第２，３号土坑に挟まれるようにしてある。南東側がローム層内まで広く抜根により攪乱されており、この中からも遺物が出土した。長径120cm、短径105cm、深さ35cm、平面形はゆがんだ楕円形で断面形は鍋形を呈する。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり粘性は強い。１cm以下の炭化物を多量に含み、ローム粒子、同ブロックを少量含み多量の遺物が出土している。２層は暗黄褐色土で粒子は粗く締まりがあり、粘性は強く多量のローム粒子と少量の同ブロックを含む。３層は黄褐色土でロームブロックを多量に含む。

遺物は土坑内の上部から条痕文の土器片と打製石斧等が出土している。

５．第５号土坑（第13図、図版10－④）

Ｅａ－３Ⅳグリッドの北向き斜面に位置する。長径53cm、短径48cm、深さ18cm、平面形はほぼ円形で断面形は鍋形を呈し、底面、壁面とも硬く締まっている。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５mm以下のローム粒子を少量含む。２層は暗黄褐色で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５mm以下のローム粒子を少量含む。

遺物の出土はなかった。

６．第６号土坑（第13図）

Ｅｂ－３Ⅲグリッドで第５号土坑の北東に位置する。長径76cm、短径64cm、深さ49cm、平面形は円形で断面形は鍋形を呈する。西側に抜根による攪乱跡があるため底面が北の谷側へ傾斜しており、壁面は南東側にのみ残っていた。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりが無い。粘性も弱く５mm以下のローム粒子を含む。２層は暗褐色土で１，３層がブロックになって混在している。３層は黄褐色土で粒子は粗く締まりが無い。粘性は強く５cm以下のローム粒子と同ブロックを多量に含む。

遺物の出土はなかった。

７．第７号土坑（第13図）

Ｅｅ－３Ｖグリッドの北東向き斜面の台地肩に位置する。長径94cm、短径93cm、深さ43cm、平面形は円形で断面形は鍋形を呈する。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり粘性は強い。３cm以下のローム粒子を少量含む。２層は暗褐色土で粒子は細かく締まりが無い。粘性は弱く炭化物を少量含み、７cm以下のロームブロックを多量に含むため斑状になっている。３層は黄褐色土で７cm以下のロームブロックを多量に含む。

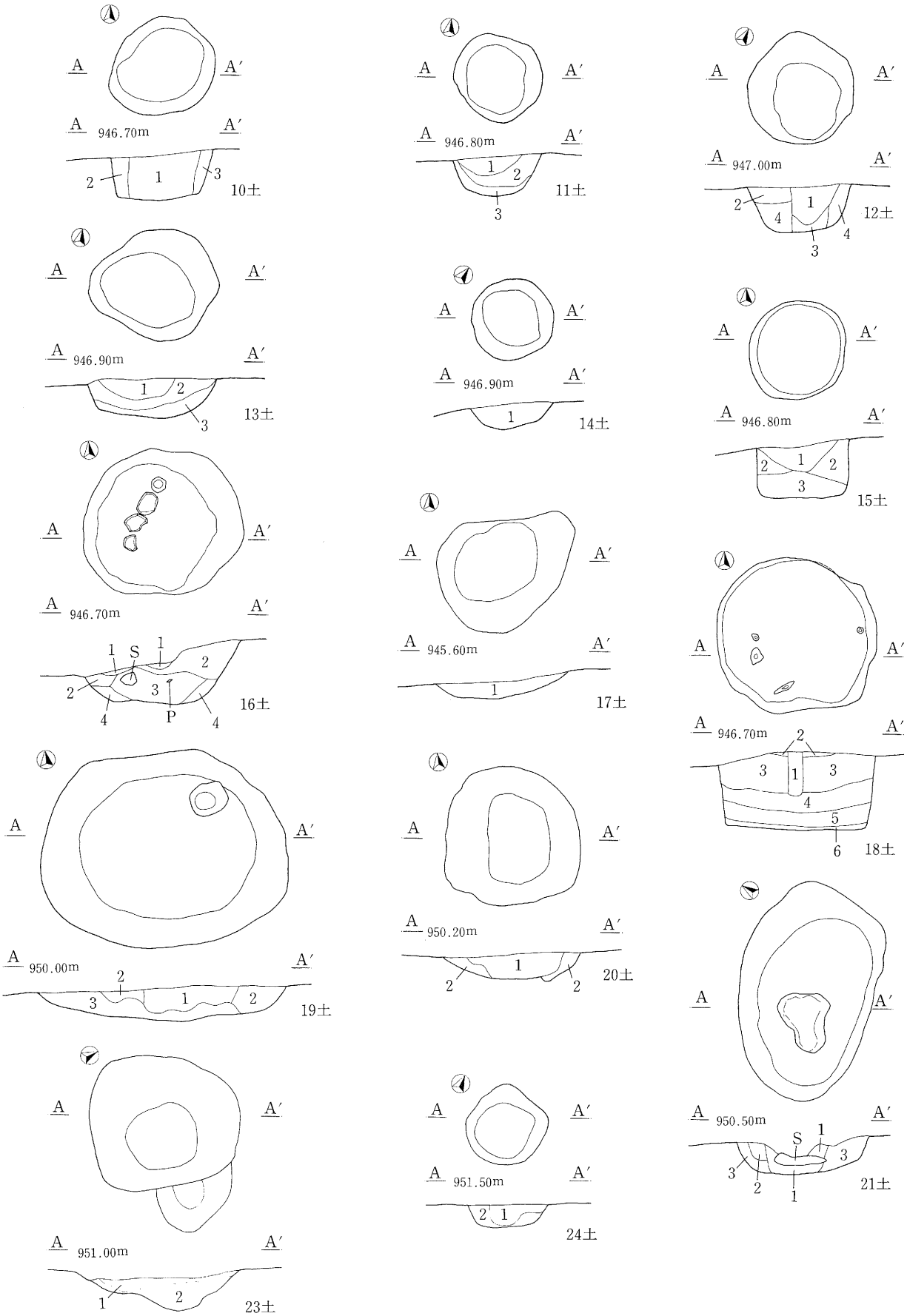
遺物は条痕文の土器片が出土している。

８．第８号土坑（第13図）

Ｅｅ－４Ｉグリッドで７号土坑のほぼ南に位置する。長径74cm、短径68cm、深さ30cm、平面形は円形で断面形は鍋形を呈する。

遺物の出土はなかった。

９．第９号土坑（第13図）



第14図　第10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、23、24号土坑（1/40）

Ｅｃ－６Ⅱグリッドを中心として南西向き斜面に位置する。遺構検出面ほぼ中央の上面で厚さ約２cmの焼土を検出しているが周囲に炭化物も少なく本址に伴うものであるか判明しなかった。長径344cm、短径221cm、深さの平均は24cm、平面形は歪んだ楕円形で底面はなだらかに斜面方向に傾斜している。上面は試掘以前に重機により削り取られているため自然地形の浅い谷ということも考えた。しかし、壁状の立上りも確認しており、またこれに隣接して東側の斜面に第１号住居址があるので、住居構築時に土を取った跡の可能性も考えられる。形状はあまりよくないが人為的に地面を穿った穴なので土坑に設定した。

遺物は出土していない。

10. 第10号土坑（第14図）

Ｆｅ－４Ⅳグリッドを中心とする北側がくびれた尾根の平坦部上に位置する。長径75cm、短径69cm、深さ33cm、平面形は円形で断面形は桶形。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５mm以下のローム粒子少量を斑状に含む。２層は褐色土で粒子が粗く締まりは無い。粘性は強く、５mm以下のローム粒子を多量に、また２cm以下のロームブロックを少量含む。３層は粒子の粗い暗褐色土で締まりがあり、粘性は強い。１cm以下のローム粒子を多量に、また２cm以下のロームブロックを少量含む。

遺物は出土しなかった。

11. 第11号土坑（第14図）

Ｇａ－４Ⅴグリッドを中心として10号土坑の南東側に位置する。長径65cm、短径59cm、深さ21cm、平面形は円形で断面形は鍋形を呈する。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりが無い。粘性は弱く２mm以下のローム粒子を多量に含む。２層も黒褐色土で粒子は細かく締まりがある。粘性は弱く、８cm以下のロームブロックを多量に含む。３層は黄褐色土で粒子は粗く締まりはあり、粘性は強い。主に10cm以下のロームブロックを多量に含む。

遺物は出土していない。

12. 第12号土坑（第14図）

Ｇａ－４Ⅴグリッドで11号土坑のほぼ東に位置している。長径82cm、短径81cm、深さ26cm、平面形は円形で断面形は鍋形を呈する。覆土は１層が黒褐色で粒子は細かく締まりがあり、粘性は弱い。２mm以下のローム粒子を多量に含む。２層は暗褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は弱い。５mm以下のローム粒子を少量含む。３層は褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。２cm以下のロームブロックを少量含む。４層は黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は弱い。２cm以下のローム粒子少量と３cm以下の同ブロックを多量に含む。

遺物は出土しなかった。

13. 第13号土坑（第14図）

Ｇａ－４Ⅳグリッドを中心として12号土坑の北側に位置する。長径90cm、短径82cm、深さ28cm、平面形は不正円形で断面形は底面が荒れた鍋形を呈する。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。４mm以下のローム粒子を多量に含み、３cm以下のロームブロックを少量含む。２層は黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５mm以下のローム粒子を少量含む。３層も黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強く、１cm以下のローム粒子と８cm以下のロームブロックを少量含む。

遺物の出土は無かった。

14. 第14号土坑（第14図）

Ｇａ－４Ⅲグリッドを中心として10号土坑の東側に位置する。長径60cm、短径59cm、深さ18cm、平面形は

円形で断面形は皿形を呈する。壁面底面ともに硬く締まっているが覆土は抜根による攪乱をかなり受けており、黒褐色土に５㎜以下のローム粒子少量と３㎜以下の炭化物を多量に含み、斑に入った様な状態で粒子は細かく締まりは無く、粘性も弱い。

遺物の出土はなかった。

15. 第15号土坑（第14図）

Ｇａ－４Ⅲグリッドを中心として14号土坑の北側に位置する。長径100㎝、短径91㎝、深さ44㎝、平面形は円形で断面形は鍋形を呈する。覆土は１層が黒褐色土で粒子が細かく締まりがあり、粘性は強い。５㎜以下のローム粒子と３㎜以下の炭化物を少量含む。２層は褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５㎜以下のローム粒子を多量に含む。３層は黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。１㎜以下のローム粒子を少量含む。

遺物は出土していない。

16. 第16号土坑（第14図、図版10－⑤）

Ｆｅ－４Ⅱグリッドを中心として15号土坑の北西側に位置する。長径113㎝、短径104㎝、深さ44㎝、上面の西側が攪乱を受けて削られている。平面形は円形で断面形は鍋形を呈する。掘り方はしっかりしており、壁面、底面ともに硬く締まっている。覆土は１層が黒黄褐色で粒子は細かく締まりが無い。粘性は弱く、２㎜以下のローム粒子を多量に含む攪乱様の層である。２層は褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は弱い。５㎜以下のローム粒子を多量に含む。１，２層から器形復元できない土器片が数個体分出土している。３層は黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。２㎜以下のローム粒子を少量含み、石器類が出土している。４層は暗褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。２㎜以下のローム粒子少量を含む。

遺物は条痕文系土器の破片５個体分以上、中央付近で割れている磨石１点、凹石１点などが出土している。

17. 第17号土坑（第14図）

Ｆｃ－６Ⅲグリッドで１号住居址の南東に隣接する。長径131㎝、短径90㎝、深さ31㎝、上面は試掘前に削り取られており、平面形は歪んだ楕円形で断面形が鍋底状で遺構はかなり荒れている。覆土は１層で粒子は粗く締まりがあり、粘性は強い。５㎜以下の炭化物と５㎜以下のローム粒子を多量に含む褐色土。

18. 第18号土坑（第14図、図版10－⑥）

Ｇｂ－６Ⅰグリッドを中心として、１号住居址のほぼ東に位置する。長径113㎝、短径108㎝、深さ62㎝、平面形は円形で断面形が桶形を呈する。上面は試掘以前に若干削り取られていたが、掘り方は底面、壁面共に硬くしまっている。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく硬く締まり、粘性がある。１㎝以下のローム粒子と炭化物を少量含む。２層も黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。４㎜以下のローム粒子、２㎝以上の礫、５㎜以下の炭化物、３㎜以下の焼土を少量含む。３層は暗褐色で粒子は細かく締まりがあり粘性は強い。１㎝以下のローム粒子、５㎜以下の炭化物を多量に含み２㎝以下の礫を少量含む。４層は褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は弱い。２㎝以下のローム粒子と５㎜以下の炭化物を多量に含み、３㎝以下の礫と３㎜以下の焼土を少量含む。５層は暗灰褐色で粒子は粗く締まりが無く、粘性は強い。15㎜以下のローム粒子と40㎜以下の炭化物を多量に含み、３㎜以下の焼土を極少量含む。６層は暗黄褐色で粒子は粗く締まりが無い。粘性は強く、３㎝以下のロームブロックを多量に含む。

遺物は器形復元できない条痕文系の土器片７個体分以上が出土している。

19. 第19号土坑（第14図）

Ｎｂ－２Ⅳグリッドを中心としたなだらかな西向き斜面の台地上にある。長径176㎝、短径139㎝、深さ22

cm、平面形、底面形とも円形で断面形は浅い鍋形を呈する。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。６㎜以下のローム粒子多量をやや斑に含む。２層は暗灰褐色で粒子は細かく締まりが無い。粘性は強く、３㎜以下のローム粒子を少量含む。３層は黄褐色で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。３㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを少量含む。

遺物は遺構検出面から黒耀石製の石鏃が出土している。

20．第20号土坑（第14図）

Ｎｄ－２Ｖグリッドを中心として19号土坑のほぼ南東に位置する。長径99cm、短径97cm、深さ19cm、平面形はやや歪んだ円形で、底面形は長円形に近い。断面形は皿形を呈する。覆土は１層が黒褐色で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。６㎜以下のローム粒子多量を斑に含む。２層は黄褐色土で粒子は細かく、締まりがあり、粘性は強い。３㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを少量含む。

遺物の出土はなかった。

21．第21号土坑（第14図）

Ｎｅ－３Ⅳグリッドで20号土坑のほぼ南に位置する。長径154cm、短径96cm、深さ24cm、平面形は楕円形で断面形は鍋底形を呈する。覆土は１層が褐色で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５㎜以下のローム粒子少量を斑に含む。２層は暗褐色で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。６㎜以下のローム粒子少量を含む。３層は褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。６㎜以下のローム粒子と７cm以上のロームブロックを少量含む。

遺物の出土はなかったが１層内から20cm以上の安山岩系自然礫が出土している

22．第22号土坑（第16図）

Ｏｃ－３Ⅲグリッドを中心として19号土坑のほぼ東に位置する。長径253cm、短径246cm、深さ70cm、平面形は円形で断面形がすり鉢形を呈する。覆土は１層が黒褐色土で粒子が細かく締まりがあり、粘性は強い。２層は暗黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５㎜以下のローム粒子を含む。３層は黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性の強いソフトロームと７cm以下のロームブロックを多量に含む。検出面より下に大きなロームブロックは認められなかったが倒木痕と考えられる。

遺物は出土しなかった。

23．第23号土坑（第14図）

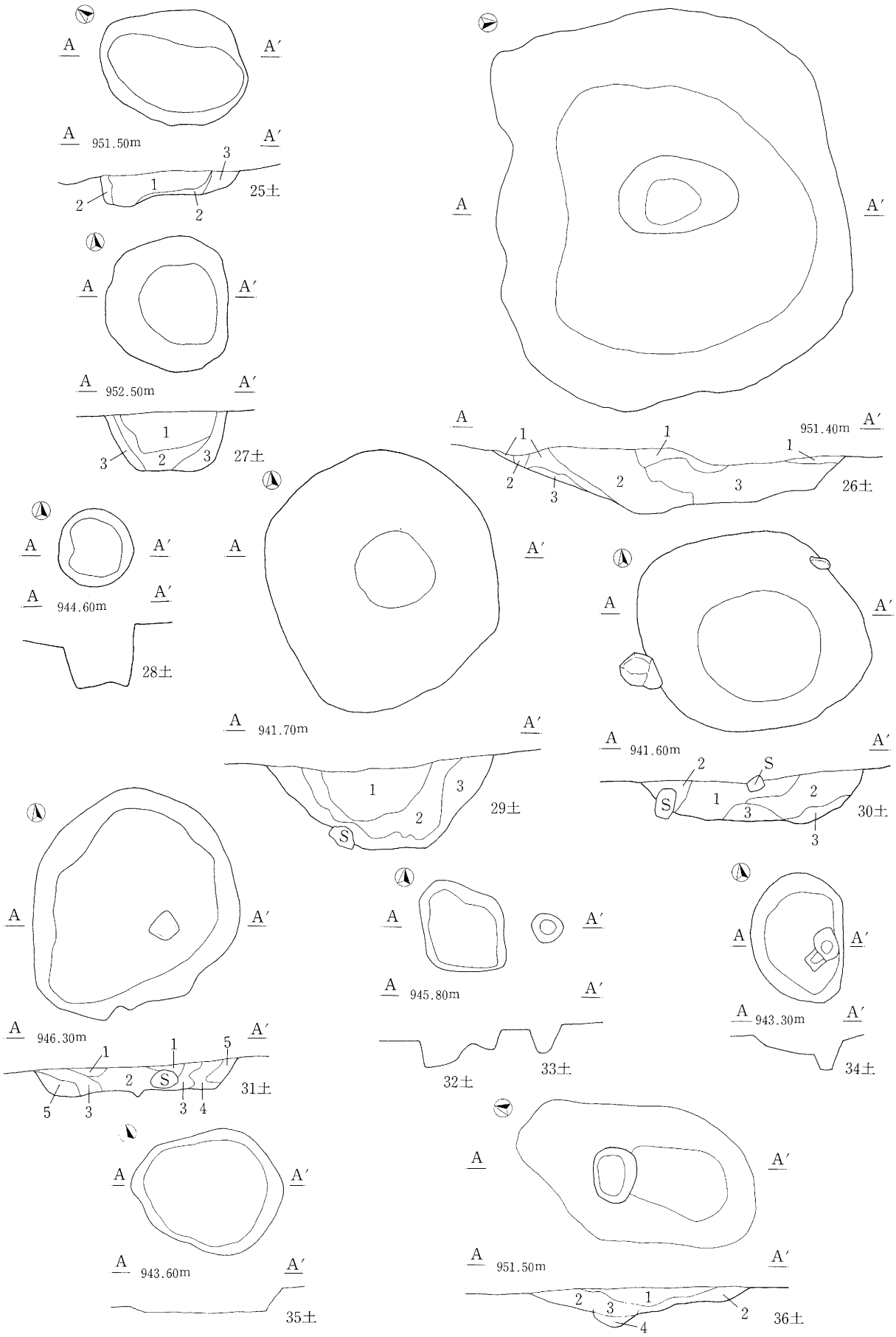
Ｐａ－３Ⅱグリッドで22号土坑の南東に位置する。長径110cm、短径96cm、深さ31cm、平面形は歪んだ隅丸方形で断面形が皿形を呈し、遺構の底面は荒れている。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりが無い。粘性弱く、５㎜以下のローム粒子と３㎜以下のロームブロックを少量含む。２層は暗黄褐色で粒子は細かく締まりはある。粘性弱く、５㎜以下のローム粒子少量と７㎜以下のロームブロックを大量に含む。桑の抜根跡と思われる。

遺物の出土はなかった。

24．第24号土坑（第14図）

Ｐｄ－３Ｖグリッドを中心として23号土坑の南東に位置する。長径58cm、短径57cm、深さ14cm、平面形は歪んだ円形、断面形は鍋形を呈する。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがある。粘性強く、４㎜以下のローム粒子を多量に含む。２層は黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５㎜以下のローム粒子と１cm以下のロームブロックを大量に含む。

遺物は出土しなかった。



第15図　第25、26、27、28、29、30、31、32、33、34、35、36号土坑（1/40）

25. 第25号土坑（第15図）

Ｐｅ－３Ｉグリッドを中心として24号土坑のほぼ北側に位置する。長径114cm、短径84cm、深さ12cm、平面形は楕円形で、断面形が鍋形を呈し、遺構の底面は荒れている。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりはある。粘性弱く、３mm以下のローム粒子と同ブロックを少量含む。２層は暗褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。１cm以下のロームブロックが斑状に入り、細根の混入も多い。

遺物は出土していない。

26. 第26号土坑（第15図）

Ｐｅ－２IIIグリッドを中心として25号土坑の北に位置する。長径292cm、短径256cm、深さ45cm、平面形は不正形でほぼ中央に凹みがあり底面、壁面共に荒れている。覆土は１層が暗黄褐色で粒子は細かく締まりがあり、粘性は弱い。１cm以下のロームブロック多量を斑に含む。２層は黒褐色土で粒子が細かく締まりは無い。粘性も弱く、２cm以下の炭化物を少量含み細根の混入も多い。３層は黄褐色土で粒子は細かく締まりがある。粘性は強く、ソフトロームに５cm以下のロームブロックを含む。桑の抜根跡と思われる。

遺物の出土はなかった。

27. 第27号土坑（第15図）

Ｓｂ－２IIグリッドの尾根ほぼ中央に位置する。長径98cm、短径88cm、深さ37cm、平面形は円形で、断面形が桶形を呈し、掘り方もしっかりしており底面、壁面共に硬く締まっている。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。細根の混入が多い。２層は暗黄褐色で粒子は細かく締まりがあり、粘性もある。２mm以下のローム粒子を少量含む。３層は褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。８mm以下のロームブロックを多量に含む。

遺物は出土しなかった。

28. 第28号土坑（第15図、図版10－⑦）

Ｆａ－６Ｖグリッドを中心とし１号住居址南の斜面に位置する。長径56cm、短径56cm、深さ39cm、平面形は円形、断面形が鍋形を呈し、底面、壁面とも硬く締まっている。覆土は１層が黒褐色土で粒子は粗く締まりが無い。粘性弱く、２cm以下のローム粒子と３cm以下の炭化物と焼土を多量に含み１cm以下の礫を少量含む。２層は褐色土で粒子は細かく締まりがあり粘性は強い。８mm以下のローム粒子を多量に含む。

遺物は出土していない。

29. 第29号土坑（第15図）

大悦遺跡の土坑群のある尾根から西に向かって派生する低い台地上で、浅い隠れ谷をへだてた南西方向のＢｅ－９Ｉグリッドを中心とした位置にある。長径177cm、短径163cm、深さ55cm、平面形は円形で断面形が鉢形を呈し、底面は礫層に達している。覆土は１層が黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。６mm以下のローム粒子を多量に含む。２層は暗灰褐色土で粒子は細かく締まりは無い。粘性は強く、12mm以下のローム粒子を多量に含み１、２層とも石灰粒が混じる。３層は褐色土で粒子は粗く締まりがあり、粘性は強い。15mm以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを多量に含み、３mm以下の炭化物を少量含む。

遺物の出土はなかった。

30. 第30号土坑（第15図）

Ｃａ－９IIIグリッドを中心として29号土坑の南に位置する。長径173cm、短径149cm、深さ32cm、平面形は円形で断面形が鍋形を呈する。覆土は１層が黒褐色で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。４mm以下のローム粒子と10cm以下の礫を少量含む。２層は褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。６mm以下

のローム粒子と20cm以上の礫を少量含む。３層は黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。ソフトロームに10cm以上のロームブロック多量を含む。

遺物の出土はなかった。

31．第31号土坑（第15図、図版10－⑧）

Ｆｂ－５Ⅳグリッドで１号住居址の北に位置する。長径174cm、短径148cm、深さ27cm、平面形はやや歪んだ円形で断面が桶形を呈し、南側に攪乱を受けた部分があるが、壁、底共に硬く締まっている。底面には多少の凹凸がある。覆土は１層が褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。２層は黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。６mm以下のローム粒子を少量含み、火砕流によく含まれている表面が暗赤褐色に変質した20cm程の礫が１点検出されている。３層は暗褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。３mm以下のローム粒子と５cm以下の炭化物を少量含む。４層は褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。３mm以下のローム粒子少量を斑に含む。５層も褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５mm以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。

遺物の出土はなかった。

32．第32号土坑（第15図）

Ｆｂ－５Ｖグリッドを中心として31号土坑の南に位置する。長径79cm、短径65cm、深さ27cm、平面形は歪んだ方形で壁面、底面ともに凹凸が多いが締まりはある。

遺物の出土はなかった。

33．第33号土坑（第15図）

Ｆａ－５Ｖグリッドで北東向き斜面の肩に位置する。長径22cm、短径22cm、深さ21cm、平面形は円形で断面形は桶形を呈するかなり小さな穴だが壁面は硬く締まっている。上面がかつて重機により削られてしまっており、柱穴となる可能性もある。

遺物の出土はなかった。

34．第34号土坑（第15図）

Ｃａ－４Ｖグリッドで１号土坑の北西に隣接する。長径96cm、短径66cm、深さ25cm、平面形は歪んだ楕円で東側が根により攪乱されている。

遺物の検出はなかった。

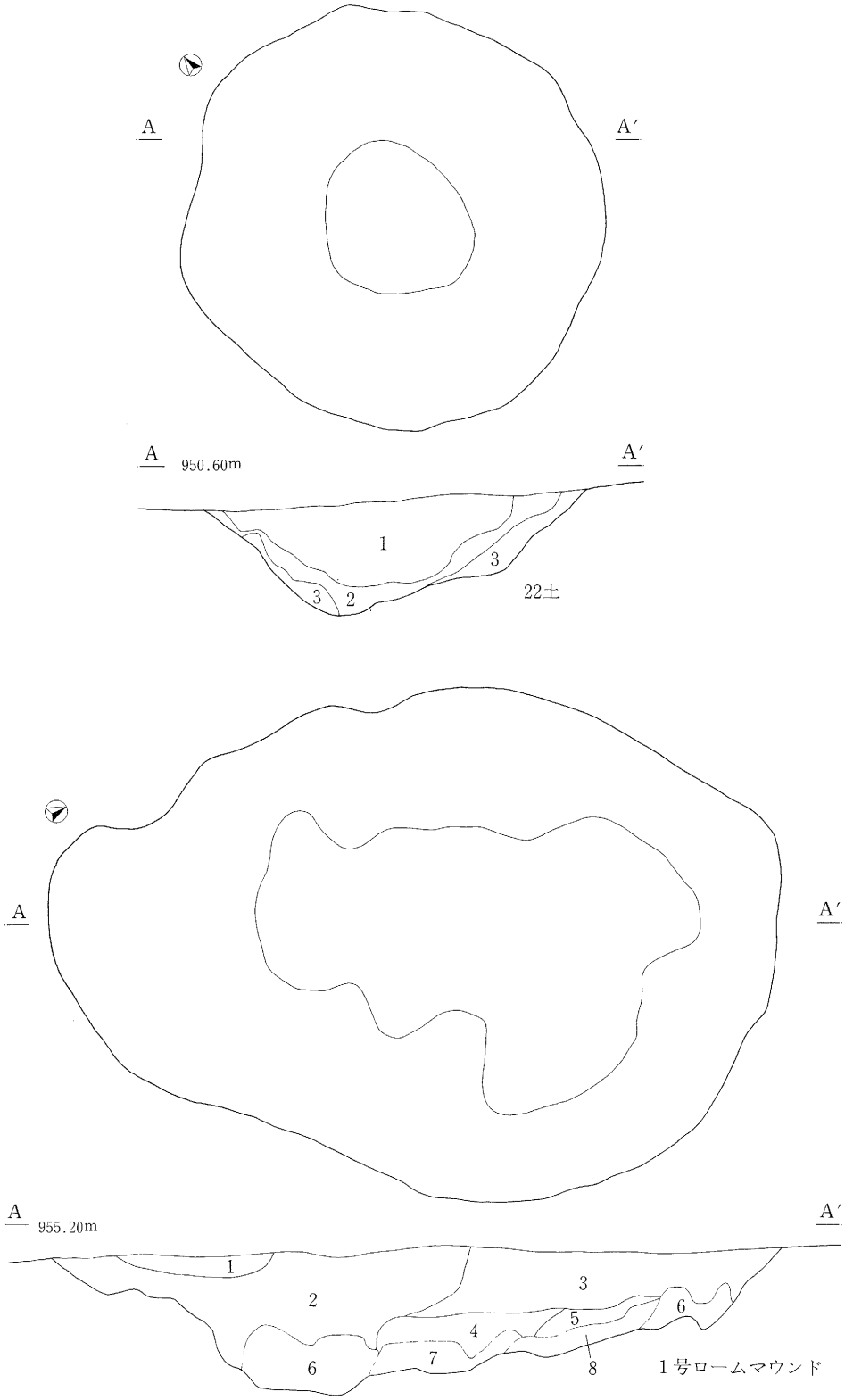
35．第35号土坑（第15図）

Ｃｂ－５Ⅱグリッドで34号土坑の東に位置する。長径103cm、短径92cm、深さ35cm、平面形、底面形ともにやや歪んだ楕円形、中には焼土ブロックとやや大きめの炭化材を含む暗褐色土が充満していた。

遺物の検出はなかった。

36．第36号土坑（第15図）

Ｑａ－２Ｖグリッドを中心として25号土坑の北東に位置する。長径41cm、短径40cm、深さ17cm、平面形は不正長円形で、断面形が皿形を呈し、底面は荒れており、中央北側に凹みがある。覆土は１層が褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５cm以下のロームブロックを少量含む。２層は暗黄褐色で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。７cm以下のロームブロックを多量に含む。３層は黄褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。４mm以下のローム粒子を含む。４層は黒褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。

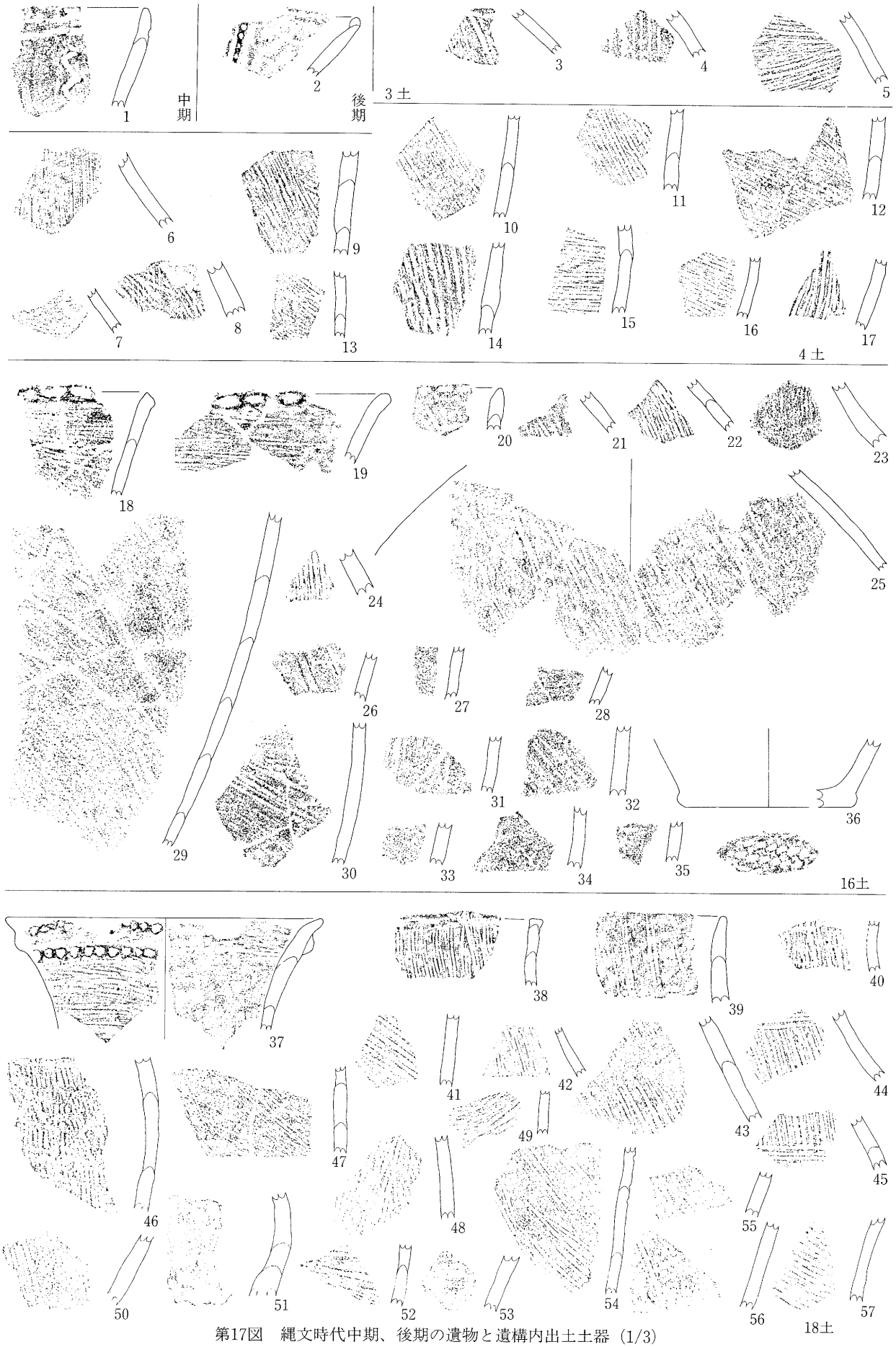


第16図　第22号土坑、第1号ロームマウンド（1/40）

第４節　ロームマウンド

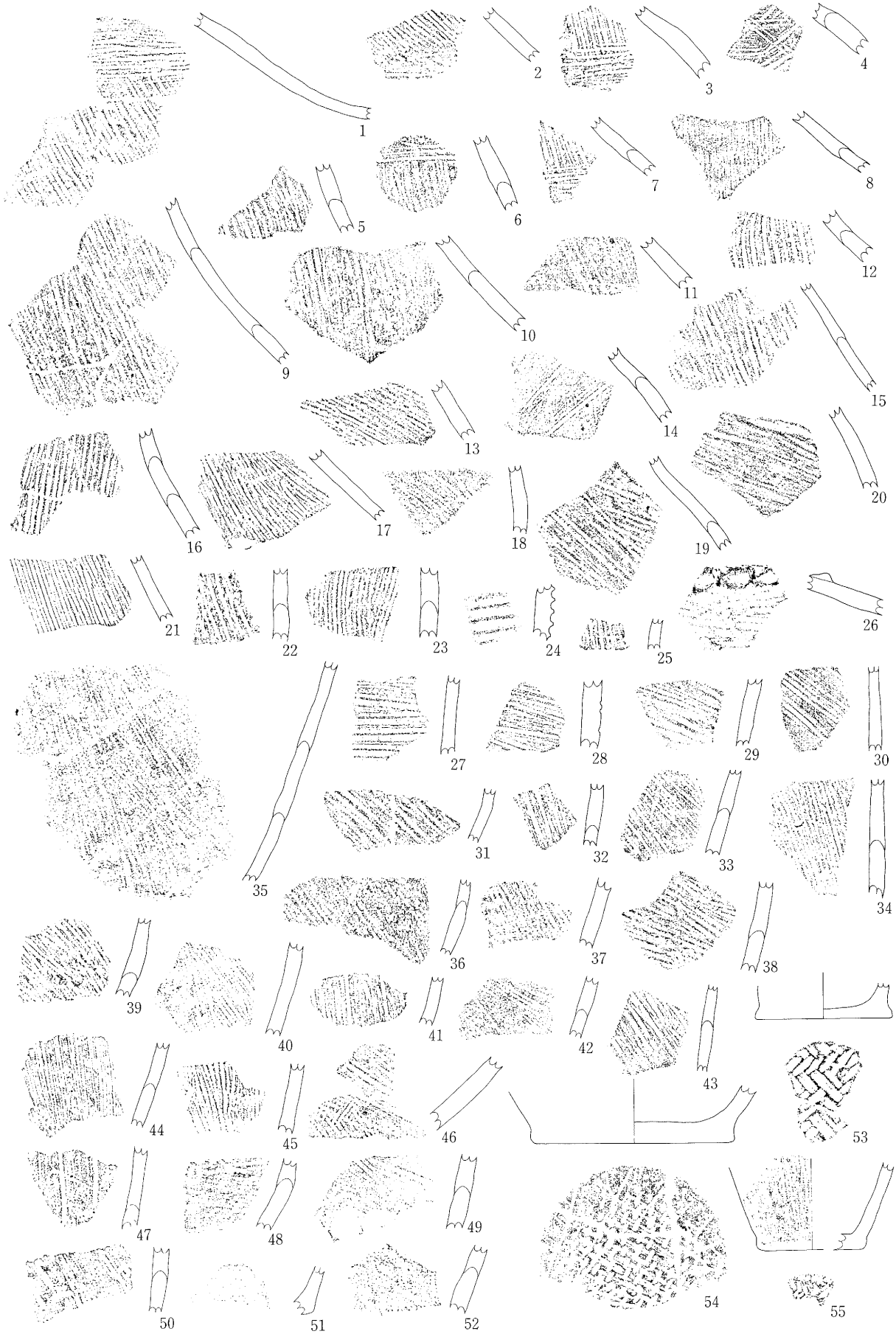
１．第１号ロームマウンド（第16図）

調査区の最東端に位置するＹｄ－２Ⅲグリッドにあり、長径427cm、短径303cm、深さ80cm、平面形は鶏卵形で断面形が船底形。覆土は１層が暗褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５cm以下のローム粒子を斑に含む。２層は褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。３cm以下のローム粒子、同ブロックと炭化物を少量含み樹木の根がかなり入っている。３層も褐色土で粒子は細かく締まりがあり、粘性は強い。５cm以下のローム粒子を少量含む。４層は黄褐色土で粒子は粗く締まりがあり、粘性は弱い。５cm以下のローム粒子を多量に含む。５層は黄褐色土で粒子は粗く締まりがあり、粘性が強い。５cm以下のローム粒子を少量含む。６層は黄褐色土で粒子は粗く締まりがあり、粘性がある。７cm以下のロームブロック多量と８mm以下の炭化物少量を含む。７層は黄褐色土で粒子は粗く締まりはある。粘性は強く、５cm以下のローム粒子少量と５cm以下のロームブロックを多量に含む。８層は黄褐色で粒子は粗く締まりがあり、粘性は強い。５cm以下のローム粒子多量と７cm以下のロームブロック少量を含む。

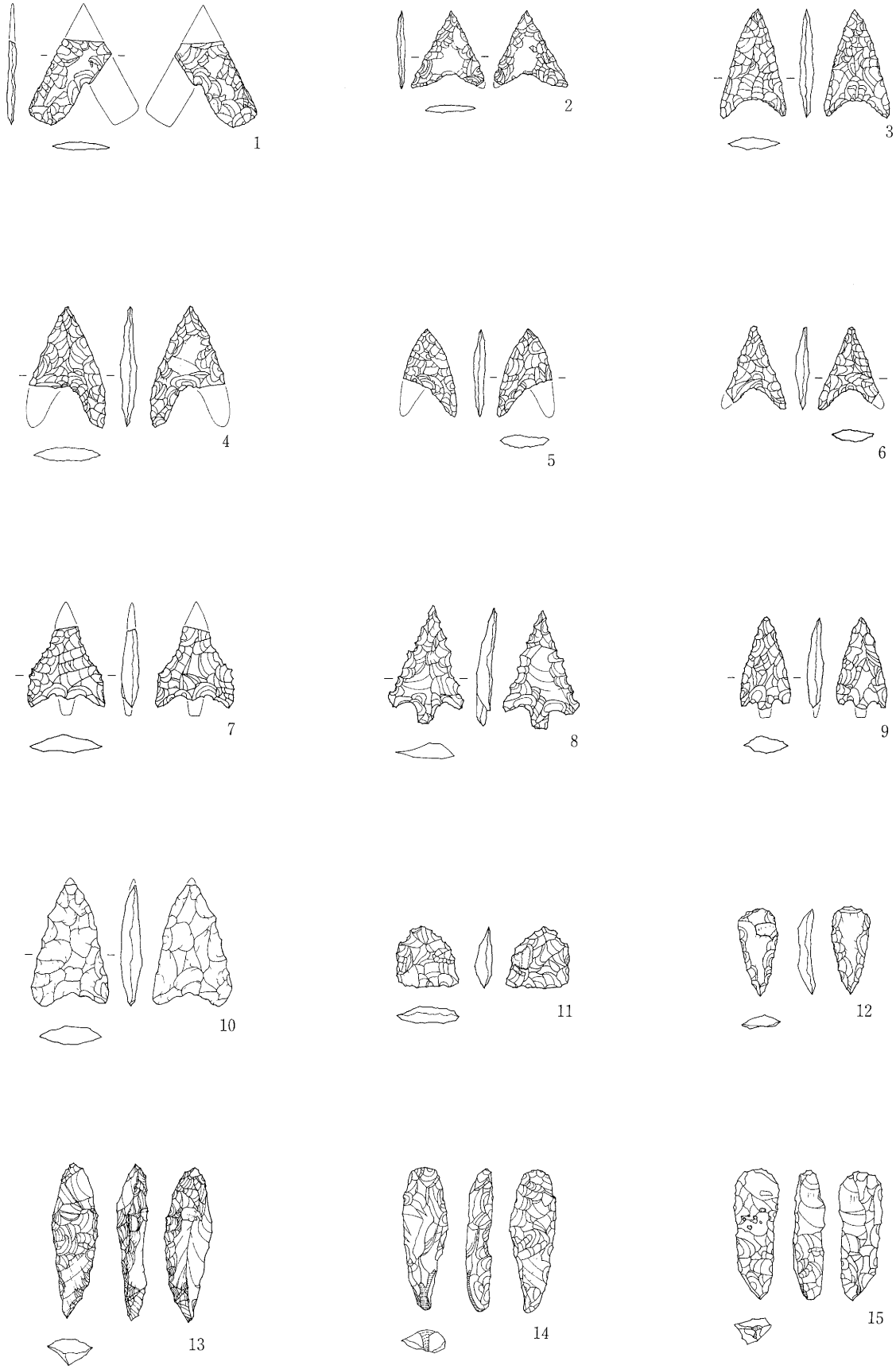


第17図　縄文時代中期、後期の遺物と遺構内出土土器（1/3）

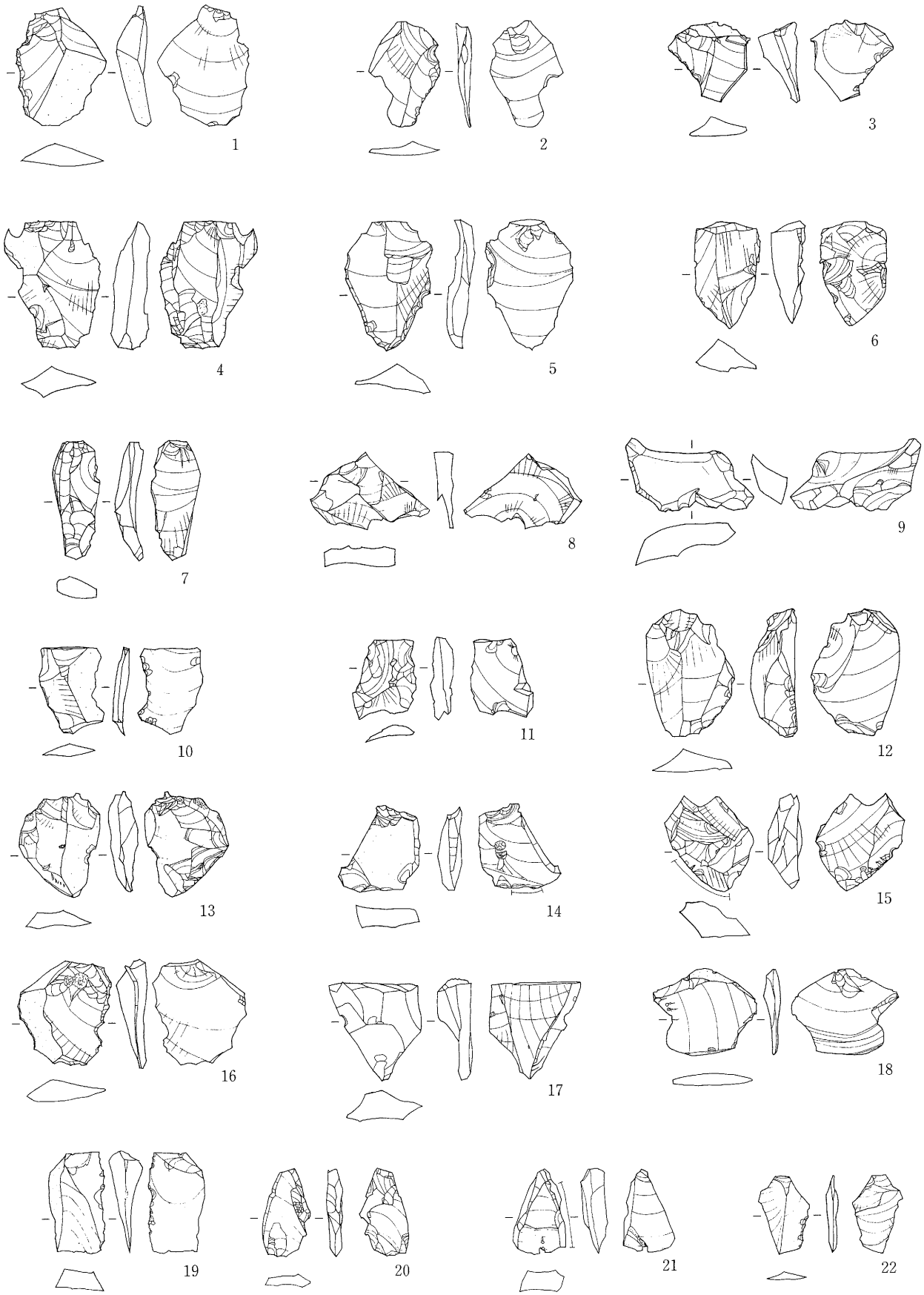
第18図　遺構外出土土器（1/3）



第19図　遺構外出土土器（1/3）

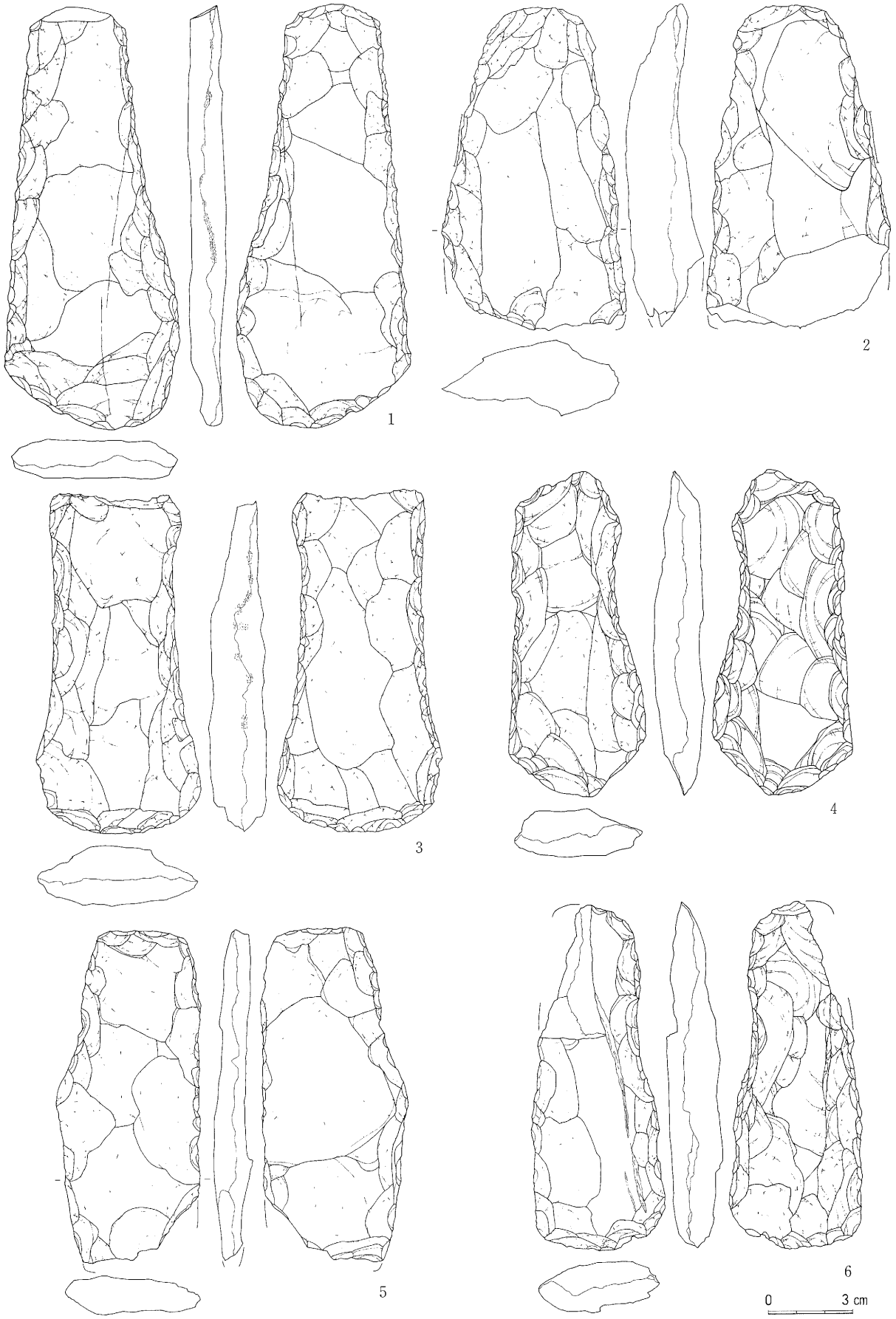


第20図　出土石器（2/3）



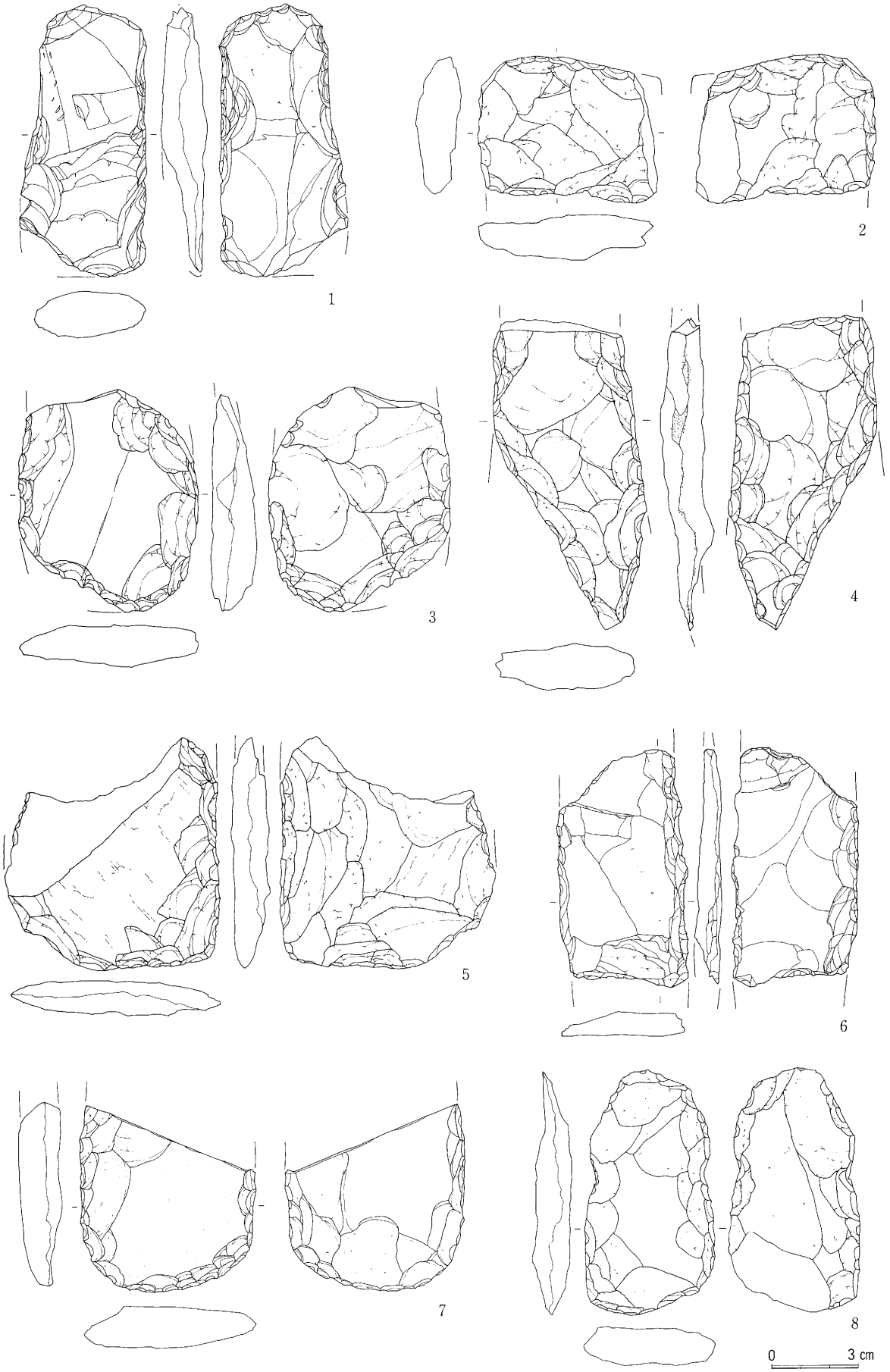
第21図　出土石器（2/3）

第22図　出土石器（2/3、21のみ1/3）

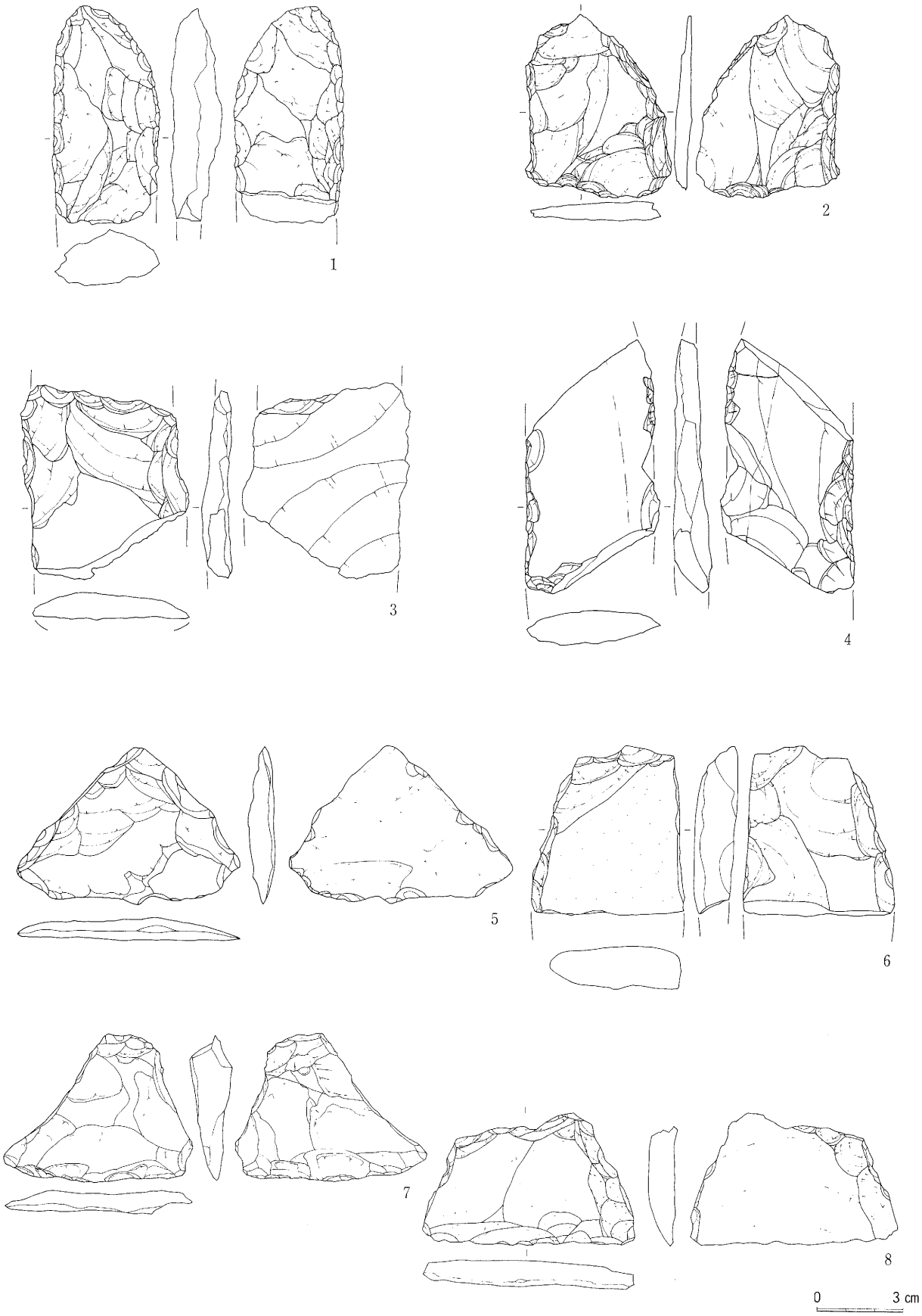


第23図　遺構外出土打製石斧（1/2）

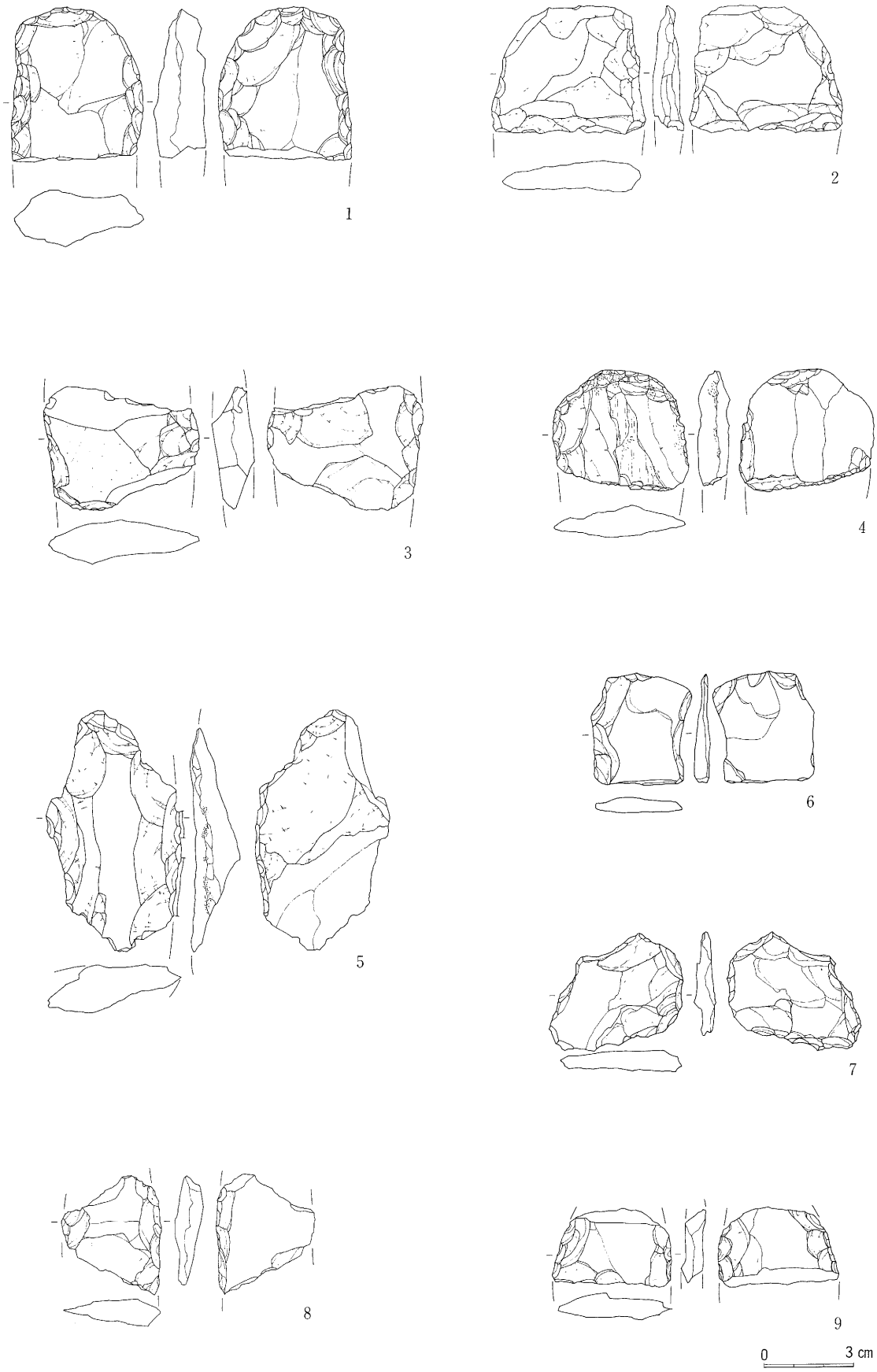
第24図　遺構外出土打製石斧（1/2）



第25図　遺構外出土打製石斧（1/2）

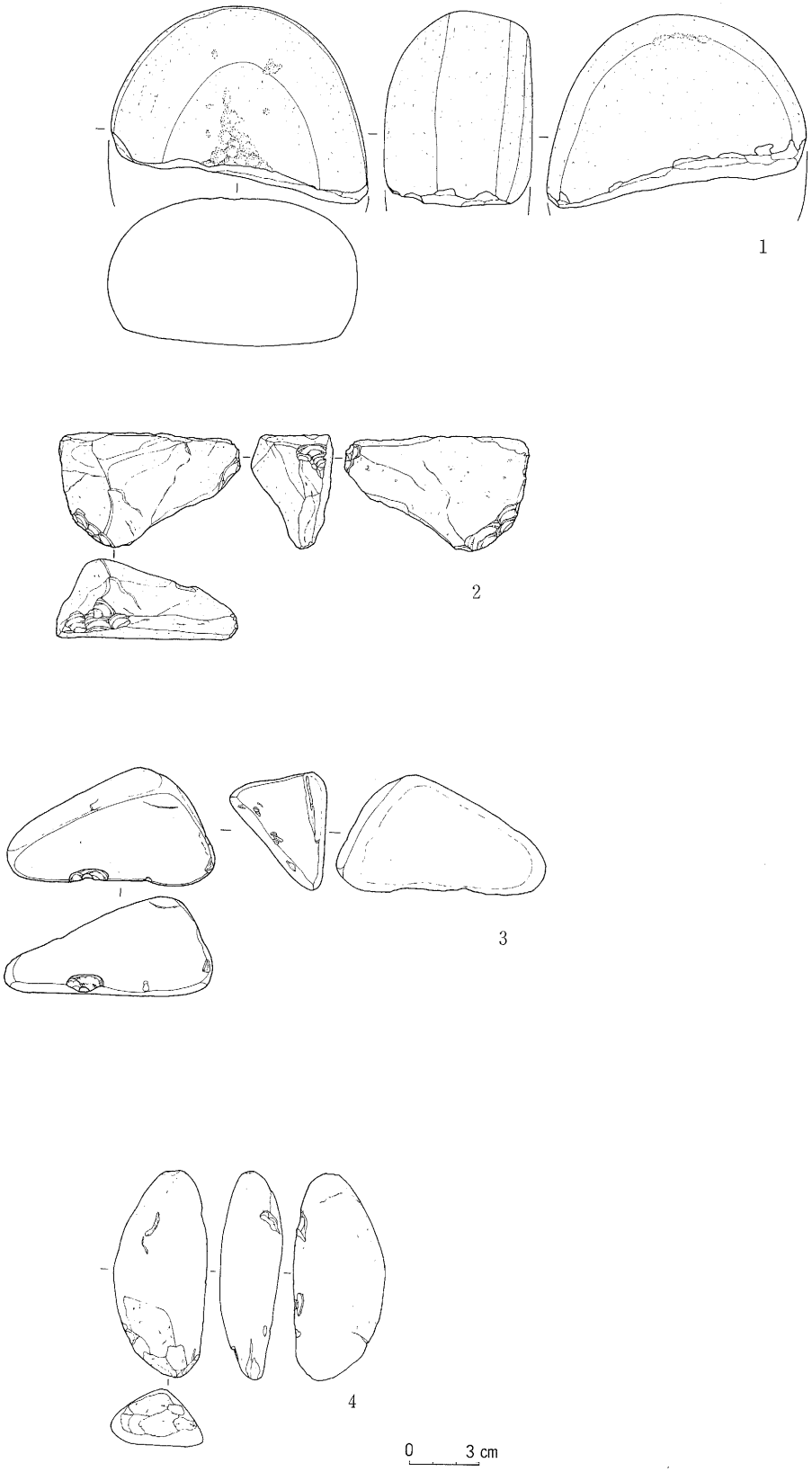


第26図　遺構外出土打製石斧、横刃形石器（1/2）



第27図　遺構外出土打製石斧剝片（1/2）

第28図　凹石（1/3）



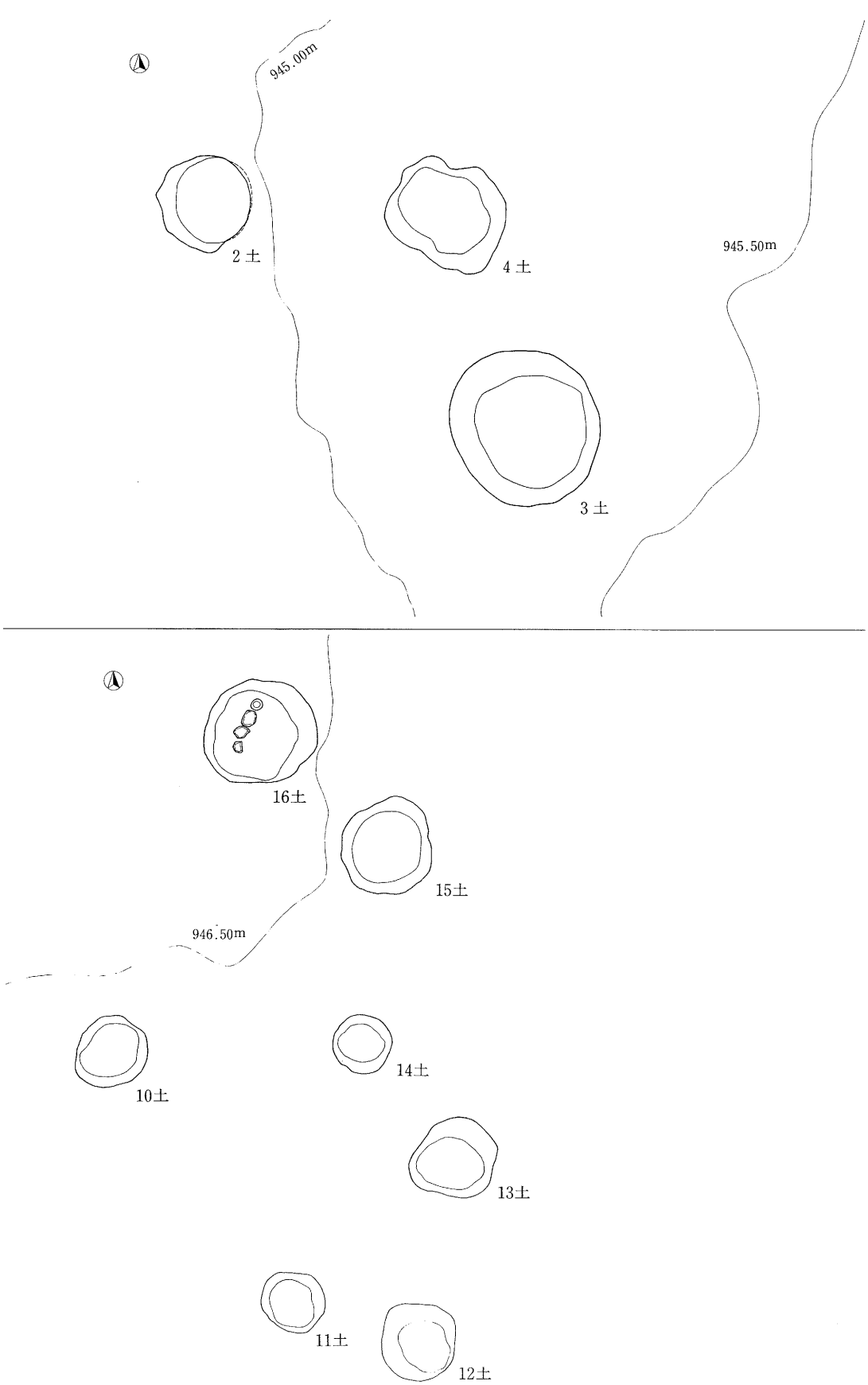
第29図　出土石器（1/3）

第Ⅳ章　総　　括

大悦遺跡の性格を示す上で特に重要なことは浅い谷を隔てた南側に長く延びる大悦南遺跡との関係である。同遺跡の広がる尾根は大悦遺跡に比べ幅も広く南側にはかつて簡易水道の水源として使われた涌き水があり、更に南向きの斜面下には渓流魚の豊富な前沢川が流れている。遺構、遺物の関係でも類似するものがある。

大悦遺跡から出土した最も古い局部磨製石鏃は縄文時代早期押型文土器に伴って発見される例があり、南東の大悦南遺跡では帯状施文された山形文を中心とする押型文土器に同石鏃が伴い出土しており、また遺物だけでなく同期の住居址、集石も検出されている。本遺跡からこの時代の土器の出土は無く、局部磨製石鏃を発見しているだけであり、当時は狩猟の場であった可能性がある。その後は時間的空白期があり、これに続く遺物の出土は中期後葉曽利期の土器片１点である。本遺跡の南にあたる大悦南遺跡の一部も本年度造成予定地となっているため発掘調査を実施したが、この造成予定地外にある西側の畑から以前、縄文時代中期中葉の釣手土器が出土したり、試掘前に訪れた現地踏査で、原村八ツ手に続く道路の切り通しにおいて同中期後葉の住居址に伴う埋甕とやや離れた地点で石皿を発見している。地元の人々によるとこの周辺から丸山の住宅地内東側に至る尾根上には長芋収穫などで深耕した際、該期の土器を発見したという話が聞くことができた。これらのことから中葉には住居址の存在が想定できる。また後葉になると尾根の北側で住居址が確認しており、南側では遺物の表面採集もできることから、かなり規模の大きな集落が形成されていた可能性がある。大悦遺跡から後期の遺物として１点の土器片が出土しているが、大悦南遺跡から今までに出土した遺物の中に同期の遺物は確認できなかった。大悦遺跡から出土した中期と後期の土器片は僅かに各１点で遺構はなく、この時期は極薄い遺物の散布地であるということができる。遺構に遺物が伴うのは縄文時代晩期最末から弥生時代中期初頭並行期からである。抜根跡の間を縫うようにして検出した遺構は土坑だけで住居址、焼土址の発見はなかった。土坑は規模などから２群（第30図）に分けることができる。遺物の無い土坑も大きさ、層序などから同期に該当すると考えられるものがある。遺物は瘠せ尾根の平坦面から北向き斜面にかけて広く点在している（第31図）が、破損した打製石斧が多いこと、土器口縁部の接合しない破片が多い。この土器については観察を行なった結果、出土状況等から明らかに破砕されたものであり、生産域の祭事に関わりこれを散布したとも考えることができないであろうか。現状では近隣に該期の遺構を発掘調査した類例が少なく、分析と結論は同期の資料の蓄積と類例の増加まで持ち越したい。また第18号土坑を中心とする南向き斜面には試掘調査以前に重機によりハードローム層まで削られた痕があり、遺物を包含したまま表土を押したためか、ここには北斜面に点在している土器がほとんど無く住居址が存在していた可能性も否定できない。

出土した土器片は口縁が多く、これから60個体が判別できる。しかし完形のものは皆無である。また胴部が極端に少なく一部器形復元できたのも１点だけで形態がわかる土器もほとんど無い。精製土器は１片も無く、すべて粗製土器である。土器片は市内宮川の御社宮司遺跡から出土している装飾が少なく、胎土も粗いものが目立ち、なかには東海地方の水神平式に並行するものがある。同遺跡ではモミの圧痕がついた土器片の発見があったが本遺跡では確認していない。石器にも同期に属すると思われる黒耀石製の中子のある有茎石鏃や、柱状でつまみがなく先端の擦り減った石錐、数量が目立つ打製石斧はやや小型ながら厚みがあるものが多く、刃部の幅が広くなる撥形が主であり、側縁部は柄に装着し使用した時にできたと考えられる連続した潰し痕が認められ、更に刃毀れや、折れたり欠けた破損品が多いことも特徴のひとつである。大悦・大

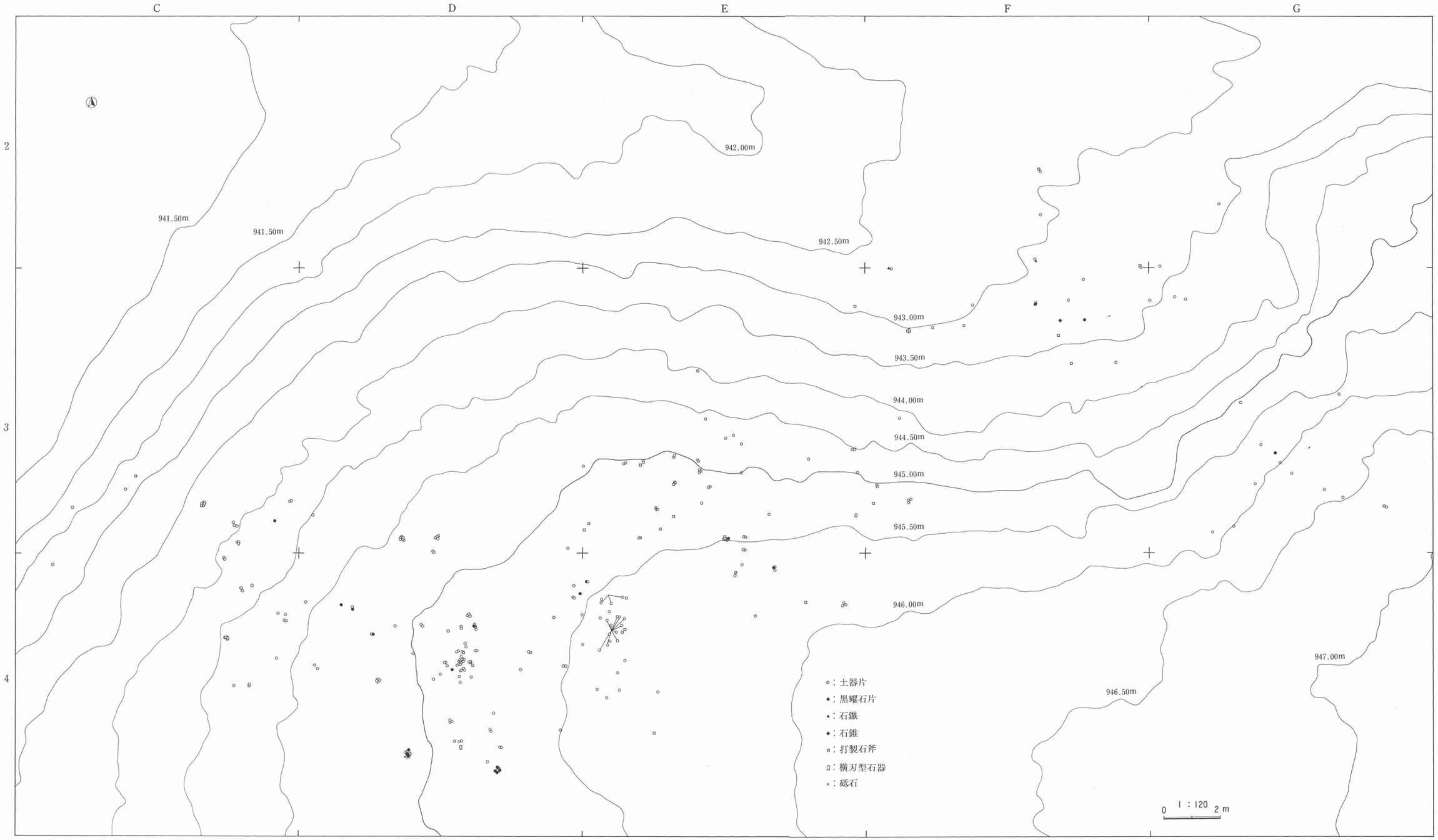


第30図　土坑群（1/60）

悦南遺跡の西に約3km離れた弓振川と宮川が合流している手前左岸の中位段丘上に位置していた入の日影遺跡（第4図、C）から大悦遺跡と同様に、浮線網状文の土器片を含まない条痕文系土器群が出土しており、異なる点では未使用の打製石斧が出土している。同遺跡で注目される点は、大悦遺跡ではほとんどなかった接合関係がみられる石器の剥片が多量に出土していることで『茅野市史　上巻　原始古代』では時期の特定を縄文時代晩期最終末に比定し「本遺跡が一時的に石器製作の場であった可能性は強い。」と性格付けをしている。時期が重なる石器製作域の入の日影遺跡と、石器を実際に使用した生産域の遺跡と捉えられる大悦遺跡の間には、現在は県営向ヶ丘団地となっている長峯（比久尼原）遺跡も位置しており、ここからは同系土器群の出土した記録がある。このほぼ同時期にあたる3遺跡には関連性があると考えられるが今回の整理段階では詳細な分析はできず今後の課題となった。凹石は中期に比べると総じてやや大型である。凹石のなかに何点か使用部の明瞭に判るものがある。これは安山岩系の礫で火災流などに含まれ転がってきたときの影響で表面が暗赤褐色に変色して若干滑らかになっている。礫の使われた部分は敲打により変色部が剥げている。これをみるとくぼんだ部分だけでなく長軸の先端両側にも敲打痕がある（第28図－1）。大悦遺跡は礫が極端に少なく凹石も多面使用せざるをえなかった跡として明瞭に見ることができる好資料である。

平安時代の遺構、遺物は2軒の竪穴住居址と、これに伴って出土した土師器と灰釉陶器で、鉄器の出土と遺構外遺物の発見は無かった。住居址は平面プランも大差なく軸線はほぼ同方位を向く、竈も南東側にあり東壁にかかることや灰穴の位置も酷似し、土器も灰釉陶器の碗、土師器の内面黒色土器杯、甲斐型甕からほぼ同時期の10世紀後半から11世紀初頭にかけて存在し、廃絶したと考えることができる。更に調査区外の畑からは土師器片が集中し採集できるところが数個所あるので集落は南向き斜面の肩から中腹にかけてある程度の広がりをもって存在していたと想定できる。今回の調査は集落の北西隅を発掘したにすぎない。近年茅野市内だけでなく大悦・大悦南遺跡の隣接する原村でも圃場整備に伴い大規模な発掘調査によって平安時代の住居址はもとより集落全体の様相が判明し始めてきている。大悦南遺跡でも工場団地造成第1期工区においては本年度調査を行い、既に2軒該期の住居址を検出しているが、調査区の南西側の涌き水があった周辺で試掘時と踏査の際に土師器片を採集しており、密度はあまり濃くないが大悦遺跡より広範囲にわたる可能性の集落が推察できる。

最後に昭和30年代から文献で現われる大悦遺跡は、地元において圃場整備以後特に遺跡保存の関心が高く、今回の発掘調査に当たっては関係各位からご高配、ご協力を得ることができた。その中には参考になることも多々あり感謝する次第である。ただ整理期間が諸々の事情により短期間で行わなければならず分析、考察面では不十分な点があり、今後の課題である。



第31図　北西斜面遺物集中状況（1/120）

引用参考文献

鳥居龍藏　1924　『諏訪史』第一巻　信濃教育会諏訪部会

諏訪史談会　1958　『諏訪史蹟要項16茅野市宮川篇』

今井すみ江　1959　『旧宮川村史編纂会研究其の６』「旧宮川村に於ける縄文式文化時代（附弥生式文化時代）遺跡」

長野県考古学会　1968　「シンポジウム弥生文化の東漸とその発展」『長野県考古学会誌５』

長野県教育委員会　1980　『八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書　昭和54年度』

設楽博己　1882　「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃　第34巻　第４号』信濃史学会

小林秀夫・百瀬長秀、他　1982　「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市その五－』
長野県教育委員会

群馬県考古学談話会他　1983　『第４回　三県シンポジウム　東日本における黎明期の弥生土器』

石黒立人　1985　「（条痕文系土器）文化の評価をめぐって（１）」『静岡県考古学研究　18』静岡県考古学会

茅野市教育委員会　1986　『茅野市史　上巻　原始・古代』

㈳長野県史刊行会　1988　『長野県史　考古資料編　全一巻(四)　遺構・遺物』

茅野市教育委員会　1989　『山寺遺跡』

長野県埋蔵文化財センター　1989　「吉田川西遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書　３』

茅野市教育委員会　1990　『狐塚遺跡』

茅野市教育委員会　1990　『棚畑』

富士見町教育委員会　1991　『富士見町史』上巻

茅野市教育委員会　1991　『茅野市遺跡台帳』

東日本埋蔵文化財研究会　1991　『東日本における稲作の受容』－第　分冊　研究発表概要・追加資料－

原村教育委員会　1992　『長峰遺跡』

韮崎市遺跡調査会　1992　『宮ノ前遺跡』

茅野市教育委員会　1993　『中ッ原遺跡』

茅野市教育委員会　1993　『稗田頭Ａ遺跡』

茅野市教育委員会　1993　『阿久尻遺跡』

茅野市教育委員会　1993　『天狗山遺跡』

諏訪考古学研究会　1994　『第６回諏訪地区遺跡調査研究発表会』

茅野市教育委員会　1994　『立石遺跡』

原村教育委員会　1994　『阿久遺跡』（第７次発掘調査）

㈶長野県埋蔵文化財センター　1994　『鶴前遺跡』

原村教育委員会　1995　『恩膳西遺跡』（第４次発掘調査）

表１　出土土器観察表（縄文～弥生時代）

図番号	図版番号	出土地点	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第17図－１	11－１	Ｇａ－３Ｉ	深鉢	口縁下に沈線回る、胴部に稲妻状沈線垂下	淡い灰赤色	やや硬質	縄文時代中期
－２	11－２	Ｊ－２	〃	口縁部内側比厚、胴部押圧文凸体が直上	灰黒褐色	白色粒子 硬質	縄文時代後期
－３		３土	〃	条痕文（ナナメ）	淡い灰赤 ～灰黄褐色	白色粒子	
－４		〃	〃	櫛状工具による条痕文（タテ）	濃茶褐色	白･橙色粒子	
－５		〃	〃	枝茎状工具による条痕文（ヨコ）	表･茶褐色 裏･灰赤褐色	白色粒子	
－６		４土	〃	二枚貝腹縁による条痕文（タテ）	赤茶色	白･橙色粒子	
－７		〃	〃	条痕文（タテ）	表･淡灰赤色 裏･灰赤褐色	白色粒子	
－８		〃	〃	浅い条痕文（ナナメ）	淡い灰赤色	〃	
－９		〃	〃	櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表･濃茶褐色 裏･灰茶褐色	白･橙色粒子	
－10		〃	〃	枝茎状工具による条痕文（ナナメ）	茶褐色	白･赤色粒子	表面･炭化物
－11		〃	〃	櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰茶褐色	白色粒子	
－12		〃	〃	櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表･濃茶褐色 裏･茶褐色	白色粒子多	
－13		〃	〃	櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰赤褐色	白色粒子	
－14		〃	〃	櫛状工具による条痕文（タテ、太め）	表･黄褐色 裏･黄～赤褐色	〃	
－15		〃	〃	櫛状工具による条痕文（ヨコ）	灰赤褐色	〃	
－16		〃	〃	櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰赤褐色	〃	
－17		〃	〃	櫛状工具による条痕文（タテ）	表･灰赤褐色 裏･灰黄褐色	〃	
－18	11－４	16土	〃	口唇にヘラ押圧風の刻み、櫛状工具による条痕文（タテ）	表･茶褐色 裏･茶色	白･赤色粒子	６片接合
－19	11－５	〃	〃	〃　　〃	〃 〃	〃	３片接合 18と同一個体
－20	11－６	〃	〃	口唇にヘラ押圧風の刻み、浅い条痕文（ナナメ）	表･黒褐色 裏･茶褐色	〃	
－21		〃		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表･灰黄褐色 裏･茶褐	白･橙色粒子	
－22		〃		二枚貝腹縁による条痕文（ナナメ）	表･灰赤褐色 裏･灰黄褐色	白色粒子	
－23		〃		櫛状工具による条痕文（タテ）	表･黄褐色 裏･茶褐色	白色粒子多	
－24		〃		二枚貝腹縁による条痕文（タテ）	黒色	白･橙色粒子 硬質	
－25		〃		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表･灰黄褐色 裏･灰茶褐色	白･橙色粒子	11片接合
－26		〃		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表･黒褐色 裏･茶褐色	白･橙色粒子	
－27		〃			表･黒褐色 裏･茶褐色	白･橙色粒子	
－28		〃		浅い条痕文（タテ）	表･灰黄褐色 裏･灰茶褐色	白･橙色粒子	
－29		〃		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表･灰黄褐色 裏･灰茶褐色	白色粒子	11片接合
－30		16土		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表･濃茶褐色 裏･茶褐色	白･橙色粒子	４片接合

注：条痕の施文具の分類は、中山誠二氏「甲斐における弥生文化の成立」の記述を参考にした。

表２　出土土器観察表（縄文～弥生時代）

図番号	図版番号	出土地点	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第17図－31		〃		浅い条痕文（タテ）	表・灰黄褐色 裏・濃茶褐色	白・橙色粒子	
－32		〃		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰黄褐色 裏・灰赤褐色	白・橙色粒子 軟質	
－33		〃			表・灰茶褐色 裏・黄褐色	白・橙色粒子	
－34		〃			表・黒褐色 裏・茶褐色	白・橙色粒子	
－35		〃			表・灰黄褐色 裏・灰茶褐色	白・橙色粒子	
－36		〃		底部・網代痕	灰茶褐色	白・橙色粒子	
－37	11－７	18土	甕	口縁端部と口縁下を回る凸体にヘラ押圧風の刻み、ヘラ状工具による条痕文（ヨコ）	黒褐色～ 灰茶褐色	白・橙色粒子	
－38	11－３	〃		口縁に山形の微突起、櫛状工具による条痕文（タテ）、内面ナデ、みがき	黒褐色	白色粒子 硬質	
－39	11－８	〃		櫛状工具による条痕文（タテ）	黒褐色～ 灰赤褐色	白・赤色粒子 硬質	
－40		〃		櫛状工具による条痕文（タテ）	灰黒褐色	硬質	
－41		〃		枝茎状工具による条痕文（ナナメ）	表・赤茶色 裏・灰黄褐色	白色粒子	
－42		〃		枝茎状工具による条痕文（タテ）、内面ナデ	表・灰黄褐色 裏・灰茶色	硬質	
－43		〃		枝茎状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰黄褐色 裏・灰茶褐色	白色粒子	
－44		〃		櫛状工具による条痕文 （上・ヨコ、下・ナナメ）	表・黒色 裏・赤茶色	白色粒子 やや硬質	
－45		〃		櫛状工具による条痕文 （上・ナナメ、下・ヨコ）	表・赤褐色 裏・茶褐色	白色粒子	
－46		〃		櫛状工具による条痕文（タテ）	表・黒色 裏・灰黄褐色	白色粒子	表・炭化物
－47		〃		枝茎状工具による条痕文（ナナメ）	灰赤色	白色粒子	
－48		〃		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰赤褐色 裏・灰茶褐色	白色粒子	
－49		〃		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰茶褐色 裏・灰褐色	白・橙色粒子	
－50		〃		櫛状工具による条痕文（タテ）	表・黒色 裏・赤茶色	白・橙色粒子	
－51		〃		浅い条痕文（タテ）	灰赤褐色	白・赤色粒子	裏・炭化物
－52		〃		櫛状工具による条痕文（ヨコ）	表・黒色 裏・茶褐色		
－53		〃			表・灰茶褐色 裏・灰褐色	白・橙色粒子	
－54		〃		枝茎状工具による条痕文（ナナメ）	灰茶褐色	白色粒子	
－55		〃		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰茶色 裏・灰褐色	白色粒子	
－56		〃		浅い条痕文（ナナメ）	灰赤褐色	白・赤色粒子	
－57		〃		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰茶褐色	白・橙色粒子	
第18図－１	12－１	Ｆｄ－３Ⅱ	深鉢	口外帯ヘラナデ、枝茎状工具による条痕文（ヨコ）、内面ナデ	灰褐色	白色粒子	
－２	12－２	Ｇｂ－３Ⅴ	深鉢	口外帯ヘラナデ、櫛状工具による条痕文（ヨコ）	茶褐色	白色粒子	
－３	12－３	Ｄｂ－３Ⅴ	〃	口外帯ヘラナデ、櫛状工具による条痕文（タテ）	灰褐色～ 赤褐色	白色粒子	

表３　出土土器観察表（縄文～弥生時代）

図番号	図版番号	出土地点	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第18図－４	12－４	Ｅｂ－３Ｖ	〃	口外帯ヘラナデ、櫛状工具による条痕文（タテ）、口唇角付	表・黒色 裏・赤褐色	白・橙色粒子 硬質	
－５	12－５	Ｅ－４	〃	口外帯ヘラナデ、櫛状工具による条痕文（ナナメ）	茶褐色	白・橙色粒子 硬質	
－６	12－６	Ｆ－２・３	〃	口外帯ヘラナデ	茶褐色	白色粒子	
－７	12－７	Ｅａ－４Ⅱ	〃	口外帯ヘラナデ、ヘラ状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰褐色 裏・赤褐色	白・赤色粒子	
－８	12－８	Ｅａ－４Ⅱ	〃	〃　　〃	〃 〃	〃	７と同一個体
－９	12－９	ＮＷ	〃	口外帯ヘラナデ、櫛状工具による条痕文（ナナメ）、内面条痕（ヨコ）	茶褐色	白・赤色粒子 硬質	
－10	12－10	Ｅ－４	〃	口外帯ヘラナデ、枝茎状工具による条痕文（ナナメ）、口唇に稜	赤褐色	白・赤色粒子 硬質	
－11	12－11	Ｃｅ－４Ⅰ	〃	口外帯ヘラナデ、枝茎状工具による条痕文（タテ）、口唇に稜	表・黒色 裏・赤褐色	白・赤色粒子 硬質	
－12	12－12	Ｄｅ－４Ⅱ	〃	口外帯ヘラナデ、櫛状工具による条痕文（ナナメ）口唇角付	淡い灰赤褐色	白色粒子 硬質	
－13	12－13	Ｆｄ－２Ⅳ	〃	口縁端部指頭圧痕、表面固いがあばた状	表・茶褐色 裏・赤褐色	白・赤色粒子	
－14	12－14	Ｄｃ－４Ⅱ Ｄｃ－４Ⅲ	〃	口唇にヘラ押圧風の刻み、櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・黒褐色 裏・茶褐色	白色粒子	２片接合
－15	12－15	ＮＷ	〃	口唇にヘラ押圧風の刻み、櫛状工具による条痕文（ナナメ）	焦茶色	白色粒子	
－16	12－16	Ｄ・Ｅ－４	〃	口唇指頭圧痕、櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰赤褐色	白色粒子	
－17	12－17	Ｃｄ－３Ｖ	〃	口縁端部にヘラ押圧風の刻み、櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰赤褐色	白・橙色粒子	
－18	12－18	Ｅｂ－３Ⅳ	〃	口唇指頭圧痕、ヘラ状工具による条痕文（タテ）	表・灰黒褐色 裏・灰茶褐色	白色粒子	
－19	12－19	Ｄｃ－４Ⅱ	〃	口唇指頭圧痕、浅い条痕文（タテ）	茶褐色	白色粒子	
－20	12－20	ＮＷ	〃	口唇指頭圧痕、条痕文（ナナメ）	灰茶褐色	白・橙色粒子	
－21	12－21	ＮＷ	〃	口唇指頭圧痕、条痕文（ナナメ）	灰赤褐色	白・赤色粒子 硬質	
－22	12－22	Ｅａ－４Ⅰ	〃	口縁端部指頭圧痕、二枚貝腹縁による条痕文（タテ）	灰褐色	白・橙色粒子 硬質	
－23	12－23	Ｆａ－３Ｖ	〃	口唇に稜、櫛状工具による条痕文（タテ）	灰茶色	白・赤色粒子 硬質	
－24	12－24	ＮＷ	〃	口唇指頭圧痕、櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰茶褐色	白色粒子	
－25	12－25	Ｅａ－４Ⅱ	〃	口外帯ヘラナデ、枝茎状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰赤褐色 裏・灰褐色	白色粒子	
－26	12－26	Ｄｅ－４Ⅱ	〃	口唇ヘラ押圧風の刻み、櫛状工具による条痕文（ヨコ）	表・灰赤褐色 裏・灰茶褐色	白色粒子 やや硬質	
－27	12－27	Ｅｃ－３Ｖ	〃	口縁端部ヘラ押圧風の刻み、条痕文（タテ）	表・黒色 裏・赤褐色	白・赤色粒子	
－28	12－28	ＮＷ	〃	口唇に稜、口縁直下に沈線回る、枝茎状工具による条痕文（タテ）	表・灰赤褐色 裏・赤茶色	白色粒子	
－29	12－29	Ｄｂ－４Ⅳ	〃	口外帯ヘラ押圧風の刻み、枝茎状工具による条痕文（タテ）、内面ナデ	灰赤色	白・赤色粒子	
－30	12－30	Ｅｂ－３Ｖ	〃	櫛状工具による条痕文（タテ）、太い条が混じる	茶褐色	白色粒子 硬質	表・炭化物
－31	12－31	Ｆｄ－３Ⅰ	深鉢	口唇尖る、櫛状工具による条痕文（タテ、浅い）	表・灰赤色 裏・灰茶褐色	白・赤色粒子 硬質	
－32	12－32	Ｅ－４	〃	口縁端部にヘラ押圧風の刻み 先端の丸い棒状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰褐色 裏・赤茶色	白色粒子	
－33	12－33	Ｆ－２・３	〃		赤茶色	白・赤色粒子	

注：出土地点のＮＷは、発掘区西側の尾根の北西斜面で検出されたもの

表４　出土土器観察表（縄文～弥生時代）

図番号	図版番号	出土地点	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第18図－34	12－34	Ｆｄ－３Ⅰ	〃	浅めの条痕文（タテ）	表・黒褐色 裏・灰褐色	白色粒子	
－35	12－35	Ｃ－３	〃	条痕文（ナナメ）	淡い灰赤色		
－36	12－36	Ｅａ－４Ⅰ	〃	櫛状工具による条痕文（タテ）	淡い灰赤色	白色粒子	
－37	12－37	Ｄ・Ｅ－４	〃	櫛状工具による条痕文（タテ）、内面みがき	灰黒色	白・赤色粒子 硬質	
－38	12－38	Ｄ・Ｅ－４	〃		黒色	やや硬質	表面・炭化物
－39	12－39	Ｆ－２・３	〃		灰茶褐色	白・赤色粒子	
－40	12－40	Ｄｃ－４Ⅲ	〃	口唇薄く尖りぎみ	黒～赤茶色	白色粒子	
－41	12－41	Ｄ・Ｅ－４	〃	口唇薄く尖りぎみ、口縁外反	赤茶色		
－42	12－42	ＮＷ	〃	口唇ヘラナデ、櫛状工具による条痕文（ナナメ）、内面ややあばた	淡い灰赤茶色		
－43	12－43	ＮＷ	〃	櫛状工具による条痕文（ナナメ、浅い）	灰茶褐色	白・橙色粒子	
－44	12－44	Ｄｃ－４Ⅰ	〃	口唇薄い、枝茎状工具による条痕文（ナナメ）	表・茶褐色 裏・灰褐色	白色粒子	
－45	12－45	Ｄｂ－４Ⅲ	〃	口唇にヘラ押圧風の溝、口縁に山形小突起内面ナデ	灰赤褐色	やや硬質	
－46	12－46	Ｅａ－４Ⅲ	〃	口縁に山形小突起、条痕文（ヨコ）	表・灰褐色 裏・黒色	白・赤色粒子	
－47	12－47	Ｄ・Ｅ－４	〃	枝茎状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰褐色 裏・赤茶色	白色粒子	
－48	12－48	Ｆａ－３Ⅴ	〃	枝茎状工具による条痕文（ナナメ）	灰赤褐色	白・赤色粒子 やや硬質	
－49	12－49	Ｇｅ－３Ⅴ	〃	浅い条痕文（ヨコ）	灰黄褐～ 灰茶褐色	白色粒子	
－50	12－50	Ｆ・Ｇ－３	〃	口縁に山形小突起、突起頂部に棒状工具による刻み、櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰赤褐～ 灰茶褐色		
－51	12－51	ＮＷ	〃	口縁に山形小突起、突起頂部に棒状工具による刻み、器面荒れている	灰黄褐色	白色粒子	
－52	12－52	ＮＷ		口唇尖り、口縁外反、口唇に棒状工具による刻み、櫛状工具による条痕文（ヨコ）	淡い灰赤褐色	白色粒子 硬質	
－53	12－53	Ｆ－２・３		口唇指頭圧痕、条痕文（ナナメ）	灰褐色	白色粒子 硬質	
－54	12－54	ＮＷ	壷	口外帯および口縁を回る凸体に指頭圧痕	表・灰黄褐色 裏・灰茶褐色	白・橙色粒子	
－55		Ｆ－２・３	〃	頸部下縁を回る凸体に指頭圧痕 二枚貝腹縁による条痕文（ヨコ）	〃	〃	
第19図－１		ＮＷ		櫛状工具による条痕文 （上・ヨコ、下・ナナメ）	灰赤褐色	白色粒子	４片接合
－２		Ｄ－２		櫛状工具による条痕文 （上・ナナメ、下・ヨコ）	灰赤褐色		
－３		Ｃ－３		櫛状工具による条痕文（上・タテ、下・ヨコ）	灰赤茶色	白色粒子	
－４		Ｄｃ－４Ⅱ		枝茎状工具による条痕文（ヨコ、ナナメ）	表・灰赤褐色 裏・灰赤色	白色粒子	
－５		Ｇｂ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰黒褐色～ 灰黄褐色	白・橙色粒子	
－６		Ｅａ－４Ⅱ		櫛状工具による条痕文 （上・ヨコ、下・タテ）	赤茶色	白・橙色粒子	
－７		Ｄｅ－４Ⅰ		枝茎状工具による条痕文 （上・タテ、下・ナナメ）	灰赤褐色	白色粒子	
－８		Ｅｄ－４Ⅱ		櫛状工具による条痕文（タテ）	灰黄褐色	白色粒子	

表５　出土土器観察表（縄文～弥生時代）

図番号	図版番号	出土地点	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第19図－９		Ｅａ－４Ⅱ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	茶褐色	白・橙色粒子	５片接合 表・炭化物
－10		Ｅａ－４Ⅱ		櫛状工具による条痕文（タテ）	灰紫褐色	白・赤色粒子	表面・炭化物
－11		Ｅｃ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰黄褐色	軟質	裏面・炭化物
－12		Ｆａ－３Ⅳ		二枚貝腹縁による条痕文（タテ）	灰赤茶色	白・赤色粒子	
－13		Ｄｂ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	淡い灰茶褐色	白色粒子	
－14		Ｅａ－４Ⅱ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）、太い条が混じる	表・灰紫褐色 裏・灰赤褐色	白色粒子	
－15		Ｄｃ－４Ⅱ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）、内面あばた状	灰黄褐色		４片接合
－16		Ｆ－２・３		櫛状工具による条痕文（タテ）	表・灰褐色 裏・茶褐色	白・橙色粒子	
－17		Ｆｄ－３Ⅰ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰赤茶色 裏・灰黄褐色	白色粒子	
－18		Ｆａ－３Ⅱ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰黄褐色	白色粒子多	
－19		Ｅａ－４Ⅱ		枝茎状工具による条痕文（ナナメ）	表・暗灰褐色 裏・灰茶褐色	白色粒子	
－20		Ｅｃ－４Ⅰ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰黄褐色	白色粒子	裏面・炭化物
－21		Ｇｂ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰赤褐色 裏・灰紫褐色	白色粒子	
－22		Ｄｂ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰黄褐色 裏・赤茶色	白・橙色粒子	表・炭化物
－23		Ｆ－２・３		櫛状工具による条痕文（タテ）	灰紫褐色		
－24		Ｅａ－４Ⅲ		先端の丸い棒状工具による条痕文（ヨコ）	表・灰黄褐色 裏・淡灰赤色	白色粒子多 軟質	
－25		Ｄｂ－４Ⅳ		櫛状工具による条痕文（タテ）	灰色	赤色粒子 硬質	
－26		表採		凸体に指頭圧痕、櫛状工具による条痕文（ヨコ）	灰褐色	白色粒子	表面・炭化物
－27		Ｆａ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（ヨコ）	表・赤茶色 裏・灰褐色	白・赤色粒子	
－28		Ｄｂ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・薄灰赤色 裏・灰赤褐色	白色粒子	
－29		Ｇｂ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰黄褐色	白色粒子	裏面・炭化物
－30		Ｇｂ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰黄色	軟質	
－31		Ｅａ－４Ⅰ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	茶褐色	白色粒子	表面・炭化物
－32		Ｄｂ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰黒褐色 裏・灰茶褐色	白・赤色粒子	
－33		Ｆｂ－３Ⅱ		枝茎状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰黄褐色 裏・灰赤茶色	白色粒子 軟質	
－34		Ｇｂ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（タテ）	表・灰紫褐色 裏・灰黄褐色	白・赤色粒子	
－35		Ｅａ－４Ⅱ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・茶褐色 裏・灰紫褐色	白・橙色粒子	６片接合 表・炭化物
－36		Ｅａ－４Ⅱ		〃　　〃	〃 〃	〃	表・炭化物 35と同一個体
－37		Ｆａ－３Ⅴ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰黄褐色	白色粒子 軟質	
－38		Ｇｂ－３Ⅳ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰赤茶色 裏・灰茶褐色	白色粒子	

表６　出土土器観察表（縄文～弥生時代）

図番号	図版番号	出土地点	器種	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第19図－39		Ｃ－４		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰赤色	白色粒子	
－40		Ｅｃ－３Ｖ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰黄褐色 裏・灰褐色	白・橙色粒子	
－41		Ｅ－４		二枚貝腹縁による条痕文（タテ）	表・灰赤茶色 裏・灰黒褐色	白・橙色粒子	表面・炭化物
－42		Ｅａ－４Ⅰ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰茶褐色 裏・灰赤茶色	白・赤色粒子	
－43		Ｆｄ－３Ⅰ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰茶褐色	白・赤色粒子	
－44		Ｃｄ－４Ⅱ		櫛状工具による条痕文（タテ、太い溝１、細い溝３が一単位）	表・赤茶色 裏・灰茶褐色	白色粒子 硬質	
－45		Ｇｂ－３Ｖ		櫛状工具による条痕文（タテ）	灰赤茶色	白色粒子	
－46		Ｄｄ－４Ⅱ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	薄い灰赤色	白色粒子	２片接合
－47		Ｄｄ－４Ⅳ		櫛状工具による条痕文（タテ）	灰赤茶色	白・赤色粒子	表面・炭化物
－48		Ｇｂ－３Ⅳ		櫛状工具による条痕文（ヨコ、不明瞭）	表・灰赤色 裏・灰黄褐色		表裏面・炭化物
－49		Ｆ・Ｇ－３		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	灰黄褐色	白色粒子	表裏面・炭化物
－50		Ｇｂ－３Ｖ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）	表・灰赤色 裏・淡灰赤色	赤色粒子多 繊維混？	表面・炭化物
－51		７土			表・灰赤褐色 裏・灰黒褐色	白・橙色粒子	
－52		Ｆｅ－２Ｖ			表・灰赤褐色 裏・灰黄褐色		裏面・炭化物
－53	11－15	Ｅｅ－４Ⅰ		条痕文（ナナメ）、底部・網代痕	赤茶色～ 赤褐色	白・橙色粒子	２片接合
－54	11－17	Ｆｄ－２Ｖ Ｆｄ－３Ⅰ ＮＷ		櫛状工具による条痕文（ナナメ） 底部・網代＋木葉痕	赤茶色～ 赤褐色	白・橙色粒子	４片接合
－55	11－21	Ｆａ－３Ⅳ		櫛状工具による条痕文（タテ）、底部・網代痕	灰黄褐色	白・橙色粒子	
	11－９	Ｄ－３		底部・木葉痕	表・暗赤褐色 裏・赤褐色	白・橙色粒子	２片接合
	11－10	ＮＷ		底部・木葉痕	表・灰茶褐色 裏・暗黄褐色	白色粒子	
	11－11	Ｇｂ－３Ｖ		底部・木葉痕	灰黄色褐色	白色粒子	
	11－12	Ｃ－３		底部・木葉痕	表・暗黄褐色 裏・赤褐色	白色粒子	
	11－13	ＮＷ		櫛状工具による条痕文（ナナメ）、 底部ヘラ描き痕	暗褐色～ 赤褐色	白色粒子	２片接合
	11－14	Ｄｃ－４Ⅲ		底部・網代痕	表・灰赤褐色 裏・灰黄褐色	白・黒粒子	
	11－16	Ｄｃ－４Ⅲ		底部・網代痕	表・暗黄褐色 裏・赤褐色	白色粒子	
	11－18	16土		底部・網代痕	表・黄赤褐色 裏・暗黄褐色	白色粒子	
	11－19	Ｄｃ－４Ⅱ		底部・網代痕	表・暗黄褐色 裏・灰黄褐色	白・茶色粒子	
	11－20	ＮＷ		底部・網代痕	暗赤褐色	白色粒子	
	11－22	ＮＷ		底部・網代痕	暗赤褐色	白色粒子	20と同一固体の可能性
	11－23	Ｆ・Ｇ－３		底部・網代痕	灰黄褐色～ 暗褐色	白色粒子	

表７　出土石器観察表　　（　）は推定値

図番号	図版番号	出土地点	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	破損	備考
第20図－１	13－１	Ｄ－２	石鏃	(31)	(27.5)	2	2.2	黒耀石	頭・脚部	
－２	13－２	表採	〃	19.5	(19)	2	0.4	〃	脚部	
－３	13－３	19土	〃	27	16.5	3	0.9	〃	完形	
－４	13－４	Ｅ－６	〃	30	(20)	4	1.1	〃	脚部	
－５	13－５	表採	〃	22	(14.5)	3	0.5	〃	脚部	
－６	13－６	Ｆｄ－２Ⅳ	〃	21	(16)	3.5	0.5	〃	脚部	
－７	13－７	Ｆｄ－２Ⅴ	〃	(24)	19.5	4	1.1	〃	頭・茎部	有茎
－８	13－８	１土	〃	29.5	19	3.5	1.4	〃	完形	有茎
－９	13－９	Ｆａ－３Ⅰ	〃	(25)	12.5	3.5	0.8	〃	茎部	有茎
－10	13－10	Ｃ－２	〃	(33)	20	5	2.4	頁岩	頭部	
－11	13－11	Ｆ－２・３	〃	15	15.5	4	0.9	黒耀石	—	未成品
－12	13－12	Ｄ－４	石錐	21.5	9.5	3	0.6	〃	完形	錐部長×幅：21×９mm
－13	13－13	Ｆｄ－３Ⅰ	〃	38.5	11.5	7.5	2.4	〃	先端部	錐部長×幅：35.5×11mm、使用痕
－14	13－14	Ｆ－２・３	〃	35.5	11	6	0.3	〃	完形	錐部長×幅：30×10.5mm、使用痕
－15	13－15	Ｄ－２	〃	32	10.5	7.5	0.7	〃	完形	錐部長×幅：28.5×10mm、使用痕
第21図－１		Ｄａ－４Ⅰ	ピエス・エスキーユ	31.5	24	8	4.1	〃		片面調整あり
－２		Ｆｅ－２Ⅴ	〃	28	19	4	1.3	〃		片面調整あり
－３		Ｅｄ－４Ⅰ	〃	21.5	21	10.5	2.6	〃		片面調整あり
－４		16土	〃	34	23	9.5	6.3	〃		片面調整あり
－５		Ｄ・Ｅ－４	〃	35	22.5	5.5	4.0	〃		周縁片面調整、スクレーパー？
－６		Ｆ－２・３	〃	29	17.5	9	3.4	〃		片面調整あり
－７		Ｆ－２・３	〃	32	12.5	5.5	3.4	〃		
－８		Ｃ－３	〃	20.5	30.5	5	2.7	〃		
－９		１土	〃	19.5	30.5	8.5	5.6	〃		
－10		Ｄａ－４Ⅰ	〃	23.5	16	3.5	1.3	〃		
－11		Ｇｃ－３Ⅳ	〃	21.5	16	5.5	1.5	〃		
－12		Ｆ－２・３	〃	34	22.5	11.5	8.2	〃		片面調整あり
－13		Ｃ－３	〃	28	21	7.5	3.9	〃		使用痕
－14		NW	〃	23	20.5	6.5	2.8	〃		使用痕？
－15		NW	〃	25.5	22.5	9	4.3	〃		使用痕
－16		Ｆ－２・３	〃	28	24.5	8	3.5	〃		周縁片面調整
－17		NW	〃	26.5	24.5	9	4.0	〃		
－18		NW	〃	23.5	28	4.5	2.1	〃		
－19		Ｄｂ－４Ⅱ	〃	27	15	8.5	2.3	〃		片面調整あり
－20		NW	〃	23.5	12.5	4	1.6	〃		
－21		NW	〃	22.5	14	6	1.2	〃		使用痕
－22		NW	〃	21	13.5	3	0.5	〃		片面調整あり
第22図－１		Ｆ－２・３	〃	17	14.5	5.5	1.2	〃		
－２		Ｆｅ－２Ⅴ	〃	17	13.5	3.5	0.7	〃		
－３		Ｆｄ－３Ⅰ	〃	20.5	15	6.5	1.1	〃		
－４		NW	〃	16	13	5	0.8	〃		

表８　出土石器観察表

図番号	図版番号	出土地点	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	破損	備考
第22図－５		Ｅａ－４Ⅲ	ピエス・エスキーユ	10.5	16	2.5	0.4	黒耀石		
－６		ＮＷ	〃	18	10.5	4	0.5	〃		片面調整あり
－７		Ｄｃ－４Ⅲ	〃	21.5	8	3.5	0.4	〃		周縁片面調整、石錐？
－８		ＮＷ	〃	15	11.5	6	1.0	〃		片面調整あり
－９		ＮＷ	〃	39	14	9	3.7	〃		片面調整あり
－10		ＮＷ	〃	22	29	6.5	3.2	〃		
－11		ＮＷ	〃	25.5	20.5	6	2.3	〃		
－12		Ｆ－２・３	〃	22.5	14.5	7.5	2.5	〃		使用痕
－13		ＮＷ	〃	19	12.5	6.5	1.2	〃		使用痕
－14		ＮＷ	〃	17.5	9	8.5	1.3	〃		使用痕
－15		ＮＷ	〃	18	10.5	8.5	1.1	〃		使用痕
－16		Ｆ－２・３	〃	31.5	13.5	10.5	2.4	〃		調整痕
－17		Ｆ－２・３	〃	24.5	11	7.5	1.7	〃		調整痕、使用痕
－18		ＮＷ	〃	29	15.5	10.5	3.2	〃		調整痕、使用痕
－19		Ｆ－２・３	〃	24	10	7	1.5	〃		
－20		ＮＷ	石核	38.5	47.5	29	40.8	〃		
－21		Ｃｃ－３Ⅳ	三角錐状石器	163.5	57	54	670	緑泥片岩		鋸歯状の刃部を持つ
－22		Ｄｂ－４Ⅳ	砥石	61	22.5	15.5	40	砂岩	一部欠損	近世の遺物とみられる

表9　出土石器観察表

図番号	図版番号	出土地点	器種	分類	長さ(m)	幅(cm)	刃幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	破損	備考
第23図－1	14－1	Ｅａ－４Ⅱ	打製石斧	撥形	15.1	6.0	5.9	1.3	184	砂岩	完形	
－2	14－2	Ｄｄ－４Ⅱ	〃	〃	(11.4)	6.3	——	2.5	189	砂岩	刃部	
－3	14－3	Ｅａ－３Ⅴ	〃	〃	12.2	5.7	5.4	2.0	208	硬砂岩	完形	
－4	14－4	Ｃ・Ｄ－２	〃	〃	11.7	4.9	4.9	1.7	120	硬砂岩	完形	
－5	15－5	Ｆａ－３Ⅴ	〃	〃	(11.9)	5.1	——	1.3	107	砂岩	刃部	
－6	15－6	Ｅｂ－４Ⅳ	〃	〃	12.4	4.6	4.6	1.8	122	砂岩	頭～側縁	
第24図－1	14－7	Ｄｂ－４Ⅳ	〃	〃	11.5	4.0	3.8	1.3	80	硬砂岩	完形	
－2	14－8	Ｆ－２・３	〃	〃	9.3	4.3	4.3	1.3	68	砂岩	完形	
－3	14－9	Ｆｄ－３Ⅱ	〃	〃	(10.4)	5.2	5.1	2.1	172	硬砂岩	頭部	
－4	14－10	Ｄｂ－４Ⅳ	〃	〃	11.5	4.4	——	1.8	113	粘板岩	刃部	
－5		Ｄｃ－４Ⅱ	〃	〃	(12.2)	5.6	5.5	2.3	171	砂岩	頭部	
－6	14－12	Ｃ・Ｄ－２	〃	〃	10.3	(5.2)	(5.2)	1.8	109	硬砂岩	頭、側縁	
第25図－1		Ｅａ－４Ⅱ	〃	短冊形	9.5	4.3	——	1.6	76	粘板岩	刃部	
－2		Ｄａ－４Ⅱ	〃	〃	(6.3)	4.8	——	1.6	73	砂岩	側縁、胴～刃	
－3		Ｃ・Ｄ－２	〃	〃	(7.8)	6.2	——	1.6	101	硬砂岩	頭～胴、刃	
－4	14－11	Ｄｃ－４Ⅱ	〃	撥形	(11.1)	4.9	——	1.4	105	硬砂岩	頭～胴、刃	
－5		Ｅａ－４Ⅰ	〃	短冊形	(8.1)	7.5	7.3	1.3	94	緑泥片岩	頭～胴	
－6		Ｃ－３	〃	〃	(8.3)	4.5	——	0.8	49	砂岩	頭、刃	
－7		Ｄ－３	〃	〃	(6.5)	6.0	——	1.4	75	砂岩	頭～胴	
－8		Ｅｂ－３Ⅴ	〃	〃	8.5	4.5	4.4	1.3	74	砂岩	刃部の一部	
第26図－1		表採	〃	〃	(7.6)	3.7	——	1.7	73	硬砂岩	刃部	
－2		Ｆａ－３Ⅱ	〃	破片	6.4	5.0	5.0	0.6	26	粘板岩	——	
－3		Ｄ・Ｅ－４	〃	短冊形	6.8	5.5	——	0.9	49	砂岩	頭、刃	
－4		Ｆ－２・３	〃	〃	(8.8)	4.6	——	1.3	56	砂岩	頭、側縁、刃	
－5		Ｅ－４	横刃型石器		5.5	7.8	5.9	0.9	37	粘板岩	完形	
－6		Ｅｂ－３Ⅳ	打製石斧	破片	(5.9)	5.2	——	1.4	75	砂岩	——	
－7		Ｄｃ－４Ⅳ	横刃型石器		5.2	6.6	5.7	1.4	42	砂岩	刃部の部	
－8		Ｅ－３	〃		(4.5)	7.2	7.2	0.9	35	砂岩		打斧からの転用品
第27図－1		Ｅｅ－３Ⅰ	打製石斧	撥形	(5.2)	4.4	——	1.7	54	硬砂岩	胴～刃	
－2		Ｆ－２・３	〃	短冊形	(4.3)	5.1	——	0.9	32	硬砂岩	胴～刃	
－3		Ｅｂ－３Ⅳ	〃	破片	(4.1)	5.1	——	1.3	36	砂岩	——	
－4		Ｆ－２・３	〃	〃	(4.1)	4.4	——	1.0	26	硬砂岩	——	
－5		Ｅｄ－４Ⅰ	〃	〃	(8.1)	(4.5)	——	1.5	58	緑泥片岩	——	
－6		Ｆ－２・３	〃	〃	(3.8)	(3.1)	——	0.5	9	粘板岩	——	
－7		Ｆ－２・３	〃	〃	(4.0)	(4.2)	——	0.7	15	粘板岩	——	
－8		Ｆ－２・３	〃	〃	(4.1)	(3.3)	——	0.9	12	硬砂岩	——	
－9		Ｆ－２・３	〃	〃	(2.7)	4.0	——	0.7	13	硬砂岩	——	
第29図－2		Ｄｅ－４Ⅰ	敲打器		7.9	5.1	——	3.5	152	緑泥岩	完形	
－3		Ｄｄ－４Ⅳ	〃		9.2	5.1	——	4.2	187	砂岩	完形	
－4		Ｄｄ－４Ⅳ	〃		9.1	4.1	——	2.6	115	砂岩	完形	

表10　出土石器観察表

図番号	図版番号	出土地点	器種	径(cm)		厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損	備考
				最大	最小					
第28図－1		Ｅｅ－3Ⅳ	凹石	12.3	10.0	7.7	1,110	安山岩	完形	火砕流の影響で表面暗赤褐色
－2		16土	〃	16.7	11.5	6.3	1,370	安山岩	完形	
－3		Ｅｅ－3Ⅳ	〃	11.6	9.5	6.5	930	安山岩	完形	
第29図－1		16土	磨石	11.0	——	6.5	900	安山岩	約半分欠損	

表11　出土土器観察表（平安時代）

図番号	図版番号	出土地点	器種	法量(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第11図－1		1住	灰釉陶器 高台付埦	(16.1) 6.8 5.1	釉・刷毛掛け	灰白色 淡黄緑色釉	堅緻	
－2		〃	〃	(15.3) —— ——	釉・漬け掛け	灰白色 淡緑色釉	〃	
－3		〃	土師器 高台付坏	—— —— ——	内面黒色処理	内・黒色 外・淡灰赤色	白色粒子 φ3～4mmの 砂粒含む	
－4		〃	土師器 坏	(11.7) (6.4) 3.8	底部外面あばた状	内・灰黄褐色 外・淡灰赤色	赤色粒子	
－5		〃	〃	(12.6) (5.1) (3.9)	黒色土器（一部還元）、底部糸切り	灰クリーム色 部分的に黒	堅緻 赤色粒子	
－6		〃	土師器 甕	(23.7) —— ——		内・赤褐色 外・茶褐色	白色粒子 雲母含む	
－7		〃	〃	(25.7) —— ——	胴部ヘラ削り	内・紫褐色 外・赤褐色	雲母含む	
第12図－1		2住	灰釉陶器 高台付埦	(16.1) —— ——		灰白色 淡緑色釉	堅緻	
－2		〃	土師器 坏	(15.1) —— ——	内黒（一部還元）	内・黒色 外・淡灰赤色	赤色粒子 砂粒を含む	
－3		〃	〃	(13.1) (6.9) (3.9)	〃	内・黒色 外・灰黄褐色	砂粒を含む	
－4		〃	〃	(14.3) —— ——		内・灰黄褐色 外・灰赤褐色	赤色粒子 砂粒を含む	
－5		〃	土師器 小甕	12.0 —— ——	外面胴部および内面くびれ部 刷け目	赤褐色	砂粒含む	
－6		〃	〃	—— —— 7.6	刷け目、底部糸切り	内・赤褐色 外・灰黒色	〃	5と同一個体 の可能性あり
－7		〃	土師器 甕	(26.3) —— ——	表裏・刷け目	赤褐色	白色粒子 砂粒、雲母	
－8		〃	〃	(26.9) —— ——	〃	〃	砂粒、雲母 含む	

（法量は口径・底径・器高の順、—は計測不能、（　）は推定値）

①大悦遺跡調査区全景航空写真　西側から

②大悦遺跡調査区全景航空写真　東側から

図版 2

①平成 4 年度大悦遺跡試掘風景

②平成 4 年度大悦南遺跡試掘風景

①平成 5 年度大悦遺跡試掘風景

②平成 5 年度大悦南遺跡試掘風景

図版 4

①大悦遺跡発掘調査の重機による表土剝ぎ

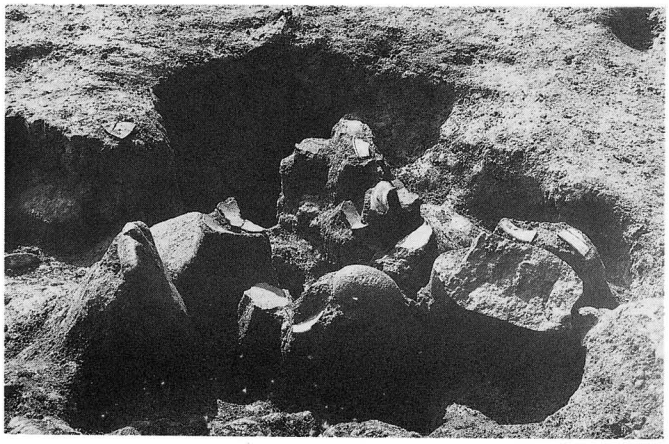
②遺構確認の鋤簾がけ作業

①第 2 号住居址発掘調査風景

②北向き斜面の遺物集中部実測風景

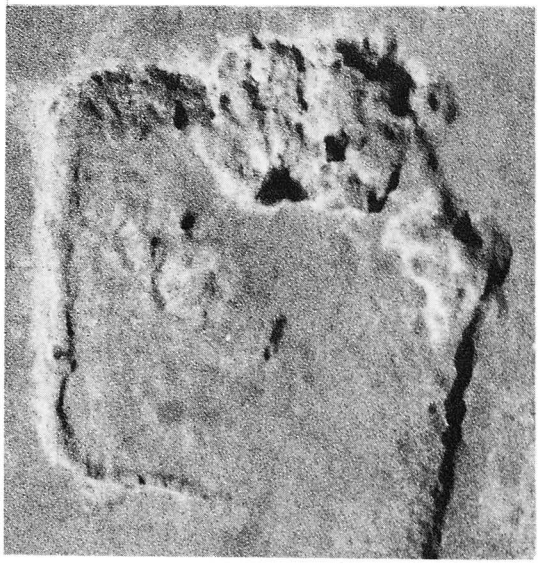
図版 6

①第１号住居址遺物出土状況全景　南側から



②第１号住居址竈周辺遺物出土状態　東側から

③第１号住居址航空写真による全景

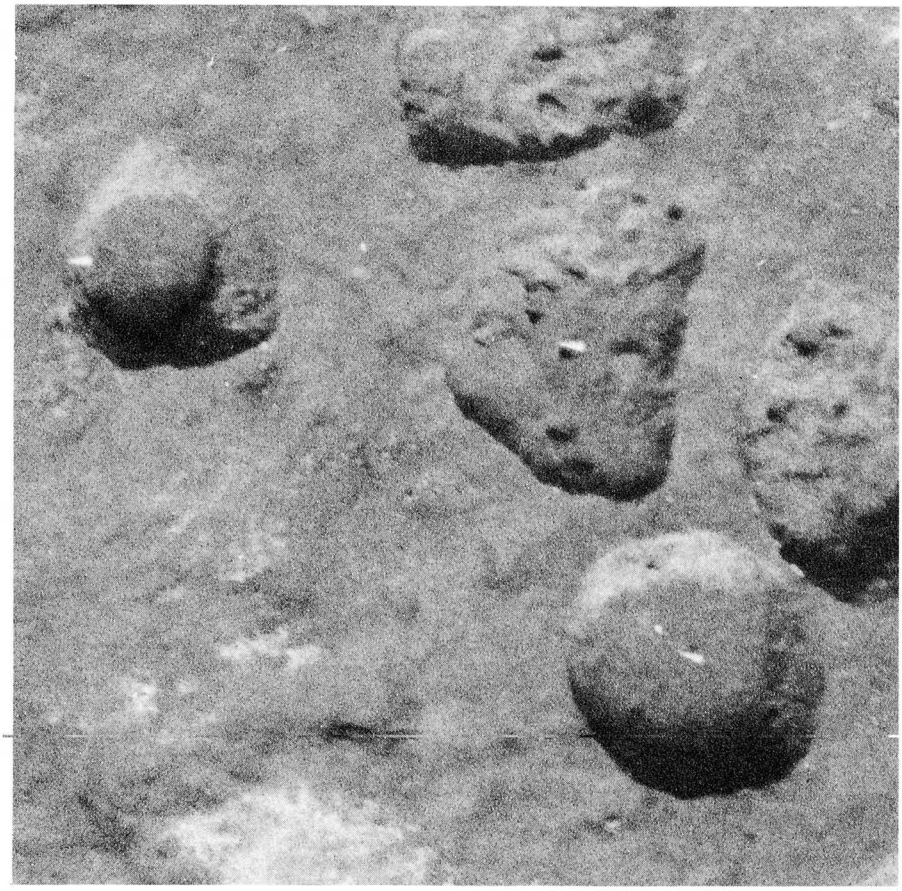


①第 2 号住居址遺物出土状況全景　西側から

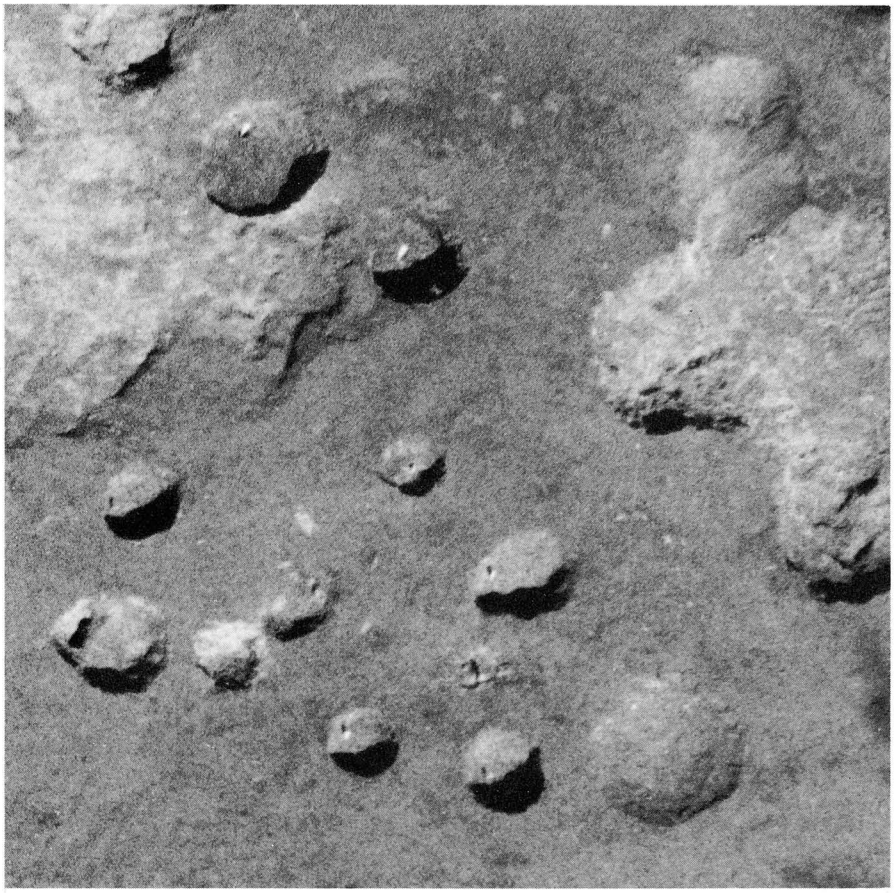
②第 2 号住居址竈周辺遺物出土状態　西側から

③第 2 号住居址航空写真による全景

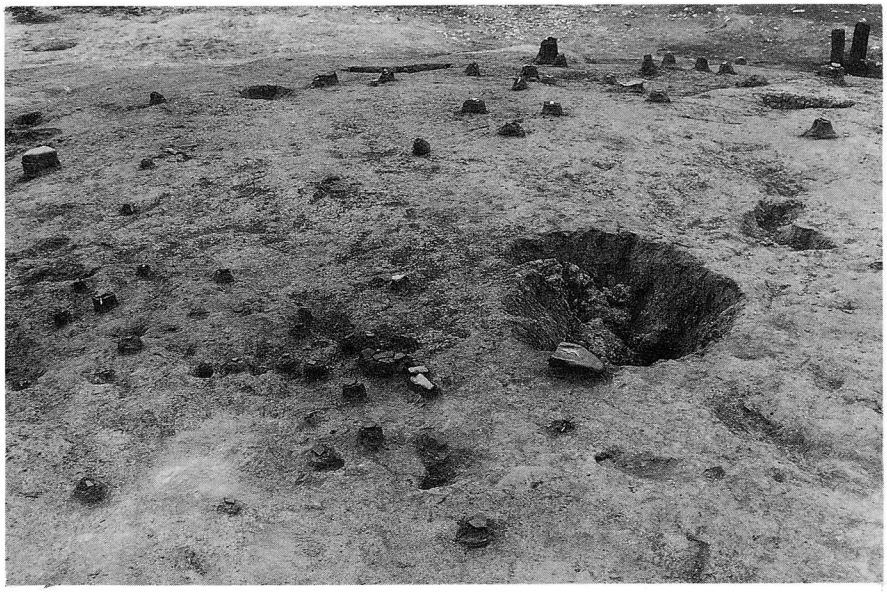
図版 8



①土坑集中部第2、4、3号土坑航空写真



②土坑集中部第16、15、14、10、13、11、12号土坑航空写真



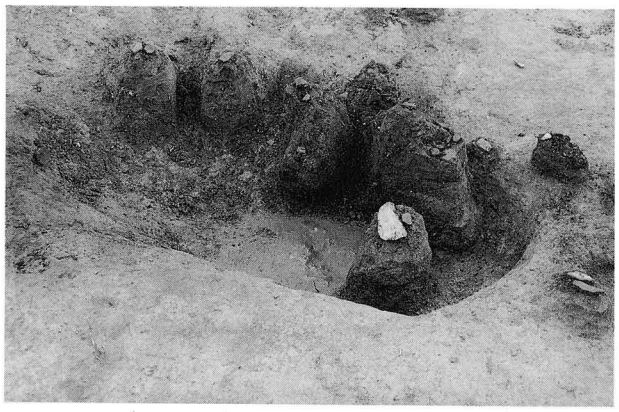
①尾根上遺物集中部

②尾根上遺物集中部の中心

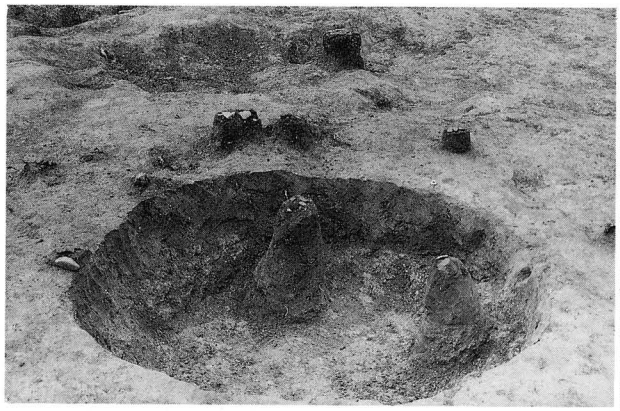
③小渓谷遺物集中部

図版10

①第１号土坑　東側から



②第２号土坑遺物出土状況　東側から



③第３号土坑遺物出土状況　南側から

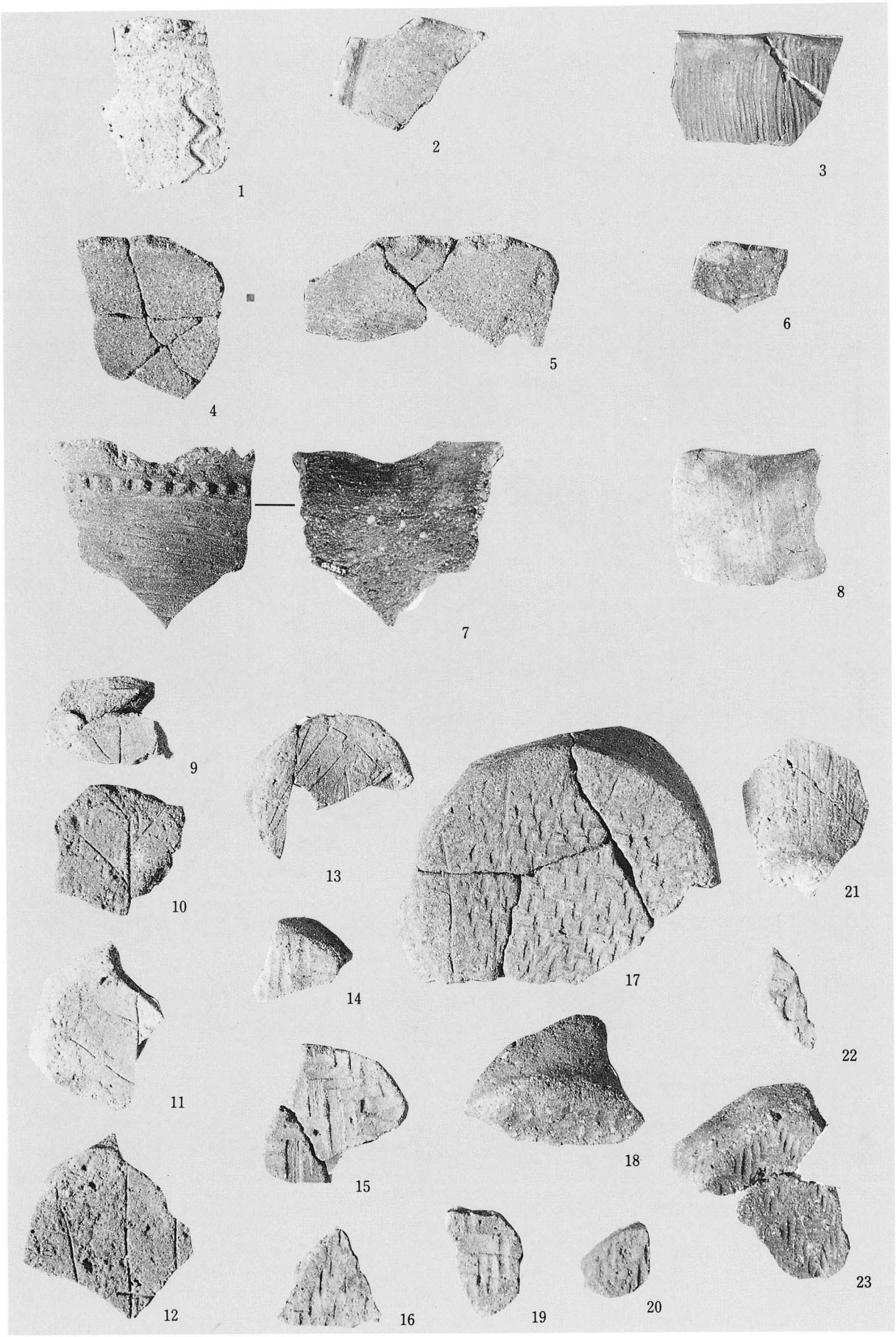
④第５号土坑　東側から

⑤第16号土坑遺物出土状況　南東側から

⑥第18号土坑　南側から

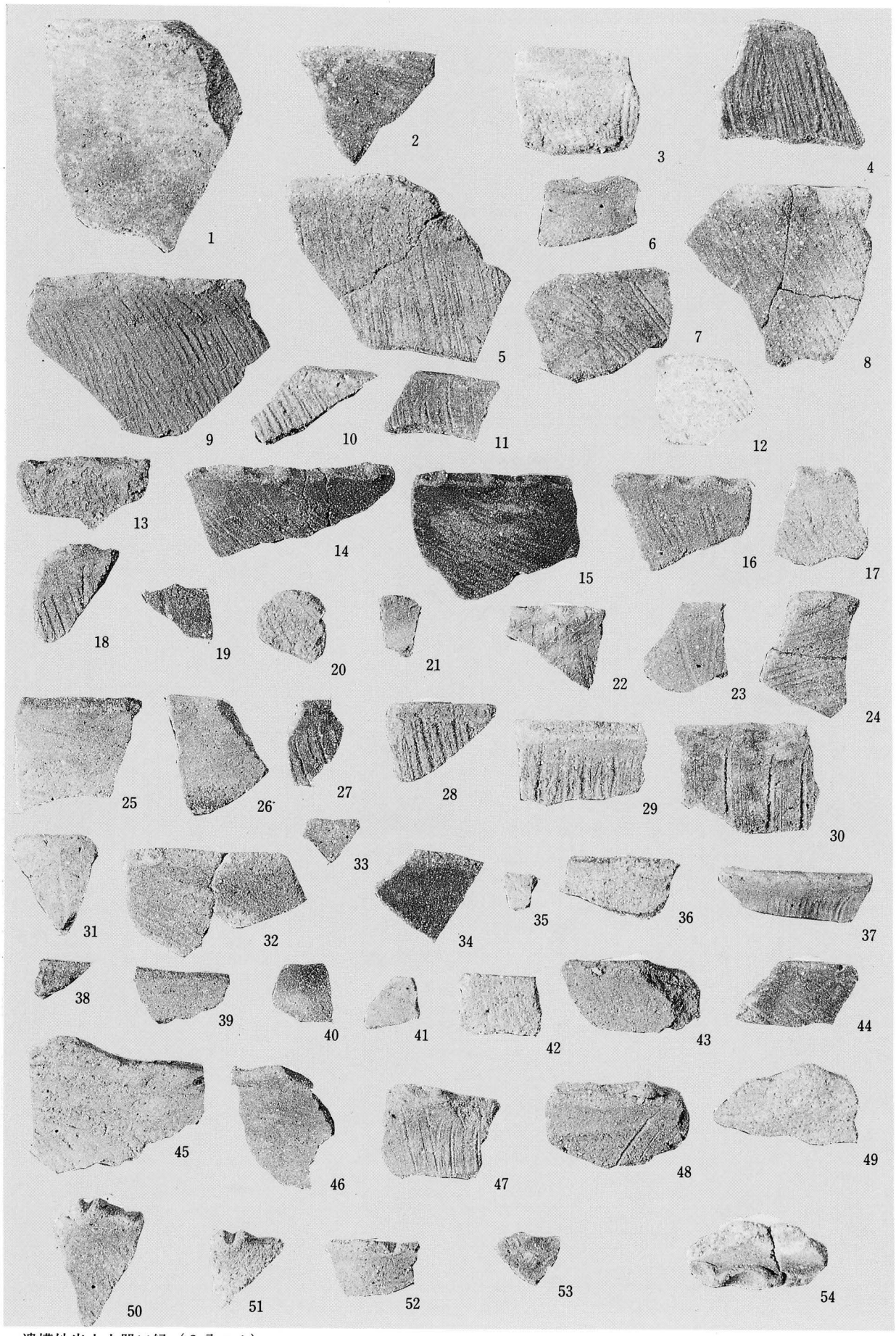
⑦第28号土坑　北側から

⑧第31号土坑　南側から

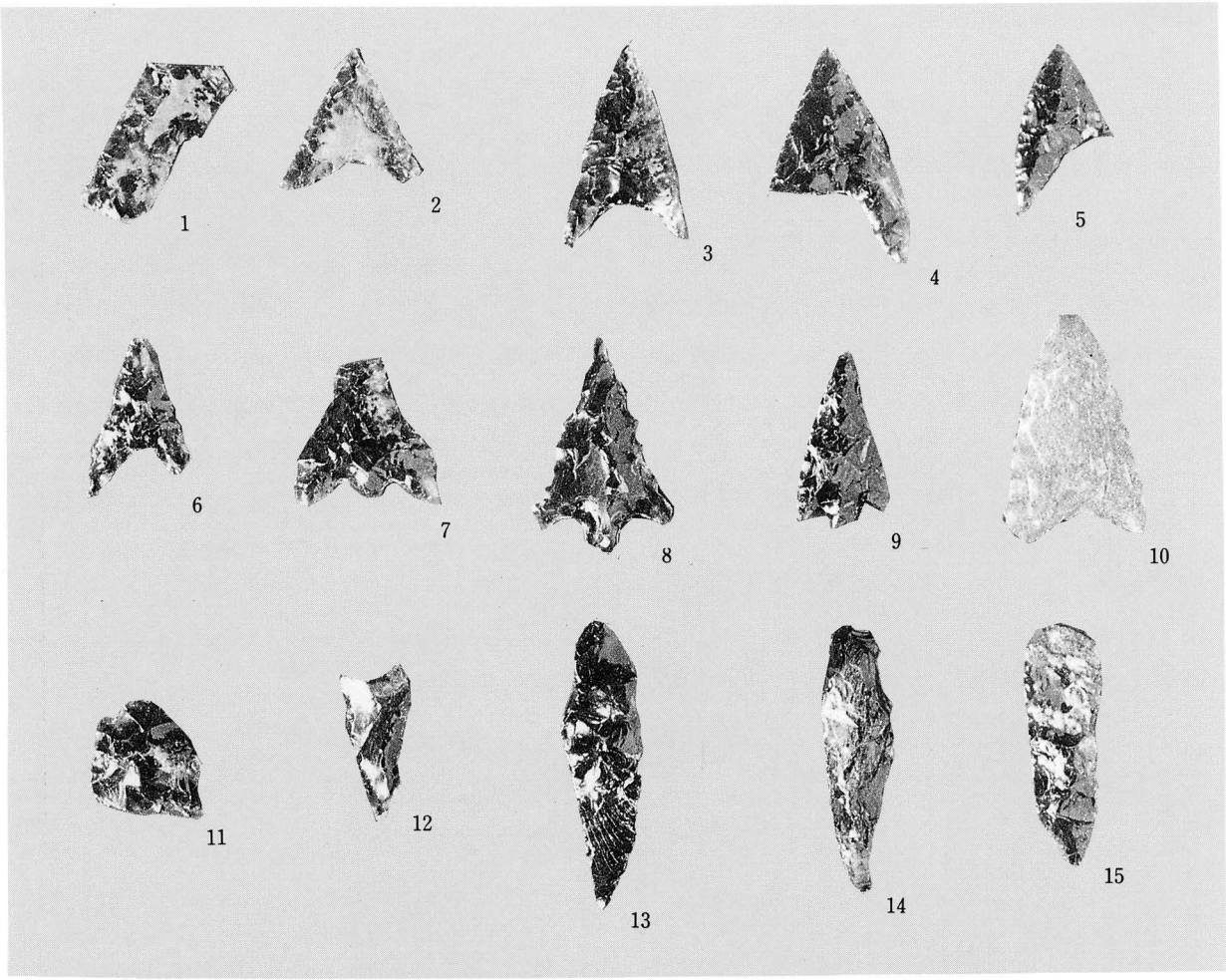


出土土器（2分の1）

図版12



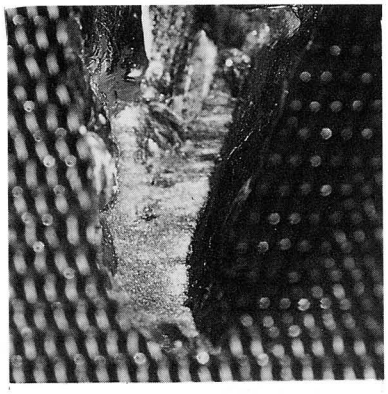
遺構外出土土器口縁（2分の1）



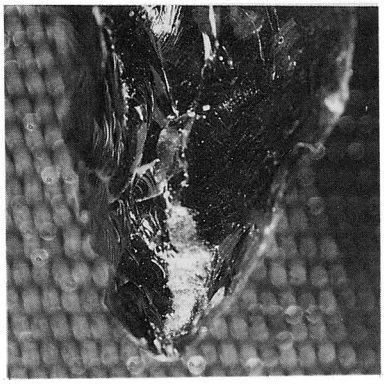
①出土した黒耀石、頁岩製石器類（等倍）

②上記①—1
極部磨製石鏃擦痕部（五倍に拡大）

③上記①—2
極部磨製石鏃擦痕部（五倍に拡大）



④上記①—14
石錐先端擦痕部（五倍に拡大）



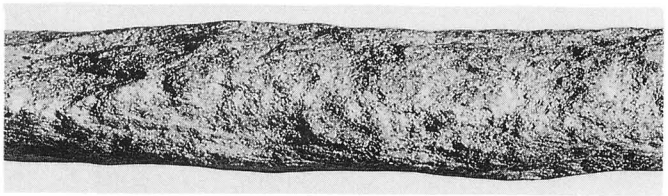
⑤上記①—15
石錐先端擦痕部（五倍に拡大）

出土石器

図版14

①出土した打製石斧の一部

③上記①－９基部の柄装着痕（５倍に拡大）



②上記①－１側西敲打部〔白い斑状の部分〕（1.5倍に拡大）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	だいえつ　いせき
書　　名	大悦遺跡
副　書　名	丸山工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	百瀬一郎
編 集 機 関	茅野市教育委員会
所　在　地	〒391　長野県茅野市塚原二丁目6番1号　TEL 0266-72-2101
発行年月日	西暦1995年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積m²	調査原因
大悦（だいえつ）	長野県茅野市（ながのけんちのし） 宮川大悦（みやがわだいえつ）	20214	181	35度 58分 26秒	138度 12分 18秒	19940519～ 19941219	7,600	工業団地造成に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物	特　記　事　項
大悦	集落址	弥生 平安	土坑　5基 竪穴住居　2軒	条痕文系土器群 土師器　甕、杯 灰釉陶器　埦	縄文時代晩期末～弥生時代中期並行期の土坑 平安時代の集落

大悦遺跡

—「丸山工業団地」造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成７年３月22日　印 刷
平成７年３月28日　発 行

編　集　長野県茅野市塚原２丁目６番地１号
発　行　茅 野 市 教 育 委 員 会
印　刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5